

---

# 二千年姫の死亡

凜野 冥

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

二千年姫の死亡

### 【Nコード】

N8508W

### 【作者名】

凜野 冥

### 【あらすじ】

とある夏の日、神宮唯人は四年ぶりにとある島に帰り、未曾有の大量殺人事件に遭遇する。二千年の時を生きるという姫が殺され、唯人はその犯人に仕立て上げられ、島そのものを敵に回すことになった。真犯人を告発することで身の潔白を証明することを決意した唯人は、たった一人の味方と共に、巨大すぎる島の謎に挑む。その先に待ち受けていた真相は、残酷で儂く、それを知った者はきつと、ことごとく精神が崩壊するだろう。

## 不慮の連続

僕の親が事故に遭ったらしい。

高校の自分の教室で授業中居眠りをしていた僕は、慌てて駆けこんできた教師から、それを聞かされた。

僕は眠気のせいで頭がうまく働かず、担任教師に誘導されるままになり、車に乗って親が運ばれたという病院に連れて行かれた。

病院にいた刑事の話聞けば、親が乗っていた車がトラックと正面衝突を起こしたとのことだった。親というから母か父のどちらかだろう、と僕は漠然と考えていたのだが、その両方みたいだった。

今日は父親の休日だったから、二人で出掛けたのだろうと僕は推測した。

刑事の表情が妙に暗かったので予想はしていたのだが、しばらくして手術室から出てきた医者は、両親が亡くなったということを僕に告げた。余程両親が悲惨な姿になってしまっていたのか、医者は僕を気まずそうにしながら見ていた。僕は「ああ、親の姿は見なくていいです」と言っ、その場を離れた。刑事も教師も医者も、誰もついてはこなかった。変な気遣いをしているのかもしれない。

「ああ、どうしてくれんだよ……」

嫌な脱力感があつて、体を動かすのも億劫だった。

ただ、自分ではもっと悲しむものだと思っていたのだが、それほどではなかった。僕は両親が死んだ悲しみや悔しさよりも、これからの生活の面倒さを憂っていた。我ながら非情なことだとは思うが、あまりに突然の出来事だったし、仕方がないのかもしれない。

だけど両親も両親で僕のことは嫌いとは言わないまでも苦手に思っていたようだし、深く愛し合っているような親子では実のところ

なかったのだ。ここまで僕が生きてこれたのはひとえに両親の助力のおかげだろうことは明白なので、清々しただなんて傲慢な発言はしないけれど、涙すら出てこないのはやはりその辺りの事情が関係しているのではないだろうか。

ポケットを探ると、携帯電話と財布が入っていた。あとはガム。この病院の中は涼しいけれど、夏真っ盛りということもあり今までいた場所は猛暑そのものだったので、僕は今喉が渴いていた。病院内の自動販売機でコーラを買って、その喉の渴きを潤す。そしてコーラを片手に、待合室みたいな場所のベンチに腰を下ろした。まだ午後三時頃なので、夏風邪をこじらせた程度の人達が周りには多くいる。

僕の両親は保険には入っていたのだろうか。そうでなければ、僕は今の家でそのまま一人で暮らしていくことは難しそうだ。いや、どの道、今の家は売ることになるのかもしれない。学校に通うのも無理になるだろうか。ならば僕はこれから学校を辞め、バイトでもしながら安いアパートでしばらく生活することになりそうだ。僕はその結論に軽く憂鬱になる。こうして徐々に正常に思考ができるようになってくると、両親が死んだということが僕の生活に与えるダメージの大きさを痛感する。

その時、

「ねえ、唯人ゆいひとだよな？」

不意に頭上から呼びかけられて顔を上げると、どこかで見たような顔をした女性が立っていた。黒くて艶のある髪が肩の下あたりまで伸びていて、顔は小さめで、目鼻立ちが整っている、美人と形容していい女性だ。肌は白くて、背が高い。僕よりも高いかもしれない。スタイルも抜群に良い。しかしその大人っぽいビジュアルとは違い、幼い印象を与える笑顔を僕に向けている。

誰だろう。年齢は二十代前半と言ったところだろうか、と推測した辺りで、僕は彼女のことを思い出した。

「京香姉きょうかさん？」

昔していた恥ずかしい呼び方が不覚にも口から出てしまい、僕は少しだけ後悔する。

女性は満足そうに微笑んだ。

「嬉しいなあ、覚えててくれたんだ。うん、久しぶりだね唯人。親御さんがお亡くなりになったみたいだけど、その様子を見るに、あまり悲しみはないのかな？ 大方、これからの処理が面倒だったって心持ち？」

「え、っていうか、待って。何で京香……さんがここにいるの？」

「京香姉さんって呼びなよ。君にそう呼ばれるのが私は好きで好きでたまらないのだから、さ」

そう言って、京香姉さんは僕に手のひらを差し向けた。

「すぐに一から十まで説明してあげるから、とりあえずここから出ようよ。そろそろ皆、君を探しに来るでしょう？」

「出て、どうするの？」

僕が未だ状況が上手く整理できずに戸惑っていると、京香姉さんは「何を当たり前のことを訊いているんだ」とでも言いたそうな顔をした。

「私と一緒に島に帰るんだよ。姫が、呼んでるからね」

そう言ってから京香姉さんは、妖しげに笑った。

僕と両親は十四歳までとある島に住んでいた。

その島には姫と呼ばれ崇められてられる存在がいた。彼女は島の中央にある社に、およそ二千年前からずっと一人で住んでいるという話だった。彼女は島を治めている唯一の存在であって、全ての住人から神のように扱われていた。島のことは全て彼女が決めて、住人は彼女に教えを乞う。彼女の決定に逆らう者はいない。そんな者は反逆者とみなされ処罰される。

先程は比喩として神という言葉を使ったが、実際彼女は神と呼ん

で差し支えないだろうと思う。彼女は人間のものとは思えない不思議な能力があった。予知能力や念動力や千里眼や透視などが僕の知るところである。

姫は常に社の中において、外に出てくる時はない。話す時は社の扉ごとということになる。この扉も内側から常に鍵がかけられており、開くことはない。だからその実際の姿を見た者はいない。僕は会話をしたことはあるのだが、その声は子供みたいな声だったと記憶している。しかしその言動は博識高く、達観していて、拙い部分はなく、それでいて流れるようにすらすと話すのだ。こちらの心の内を見透かしたようなことをずっと言っていた。

だけど僕と両親は、四年前に島を出た。正しく言うのなら、追い出された。姫によってだ。僕らは島を追放され、この日本の本州に逃げ込んだのだ。そしてここでの生活にも二年ほどで慣れ、今では自然と呼べるほどの状態で日々を送っていた。だからあの島のこと意識の外にあった。

そういう事情もあり、京香姉さんと四年ぶりに再開してすぐには島のことを明瞭に思い出すことはできなかった。何より、この日本の本州に京香姉さんがいること自体が実に不思議で不自然で、僕にはいまいち実感が湧かなかつたのだ。それも、両親が事故死した直後だというのだから、僕の脳内は誰かに手を突っ込まれてぐちゃぐちゃかき回されたみたい混沌としてしまって、正常に働かすことは困難だと言えた。

京香姉さんは病院の外にタクシーを待たせていて、僕も京香姉さんと共にそれに乗せられた。実は「本当に京香姉さんか？」と疑ってもいたのだが（京香姉さん、という名前は僕が先に言った訳だし、姫という単語が出てきたことから、彼女は本当に京香姉さんで間違いないだろうと判断した。しばらく接していると、幼い頃に京香姉さんと話していた頃の感触も生々しく蘇ってきて、僕はいよいよ確信する。

タクシーは病院の敷地を出る。どこに向かっているのかは分から

なかった。その時現時点で表示されている料金があまりに高額であるのを見て、僕は慌てた。

「京香姉さん、タクシー代が大変なことになってきてるんだけど、大丈夫なの？」

京香姉さんは島の人間だ。ひよっとするとタクシーの料金制度というやつが分かっていない可能性もある。僕はかなり心配していたが、京香姉さんは特に慌てるそぶりも見せなかった。

「大丈夫よ。まあ、詳しい話は後にしようか。まだ君、多少なりとも混乱している風に見えるし」

「そう？ そんなことはないけど」

僕は久々に会った京香姉さんの手前、少し強がりを言った。四年が経ち、京香姉さんはさらに大人っぽく、魅力的な女性に成長していて、僕は先程から少し緊張気味であるのも否めない。

「今日はこのままホテルに行くよ。安いとこだけど。積もる話もあるからね、話すことになる内容を考慮すると二人きりになれるところがいいかなって思って、さ。それで、明日の朝には島に行く。船が用意してあるの。ふふ。私、操縦できるようになったんだからね」

「島に行くって……、いつ僕は帰ることになるの？ ただでさえ親が死んだっていつのに病院から抜け出してきたいるんだから、その上しばらく行方不明になっていれば、後のことが面倒なんだけど」

「何言ってるの、もうこんなところには帰ってこないよ。元から唯一人は島の住人じゃない。言うなれば、島こそが本来の帰るべき場所でしょう？ あの島は安全よ、もうこんなところのことは完全に忘れて、未練を断ち切って、また前のように生活できるわ」

京香姉さんの言うことは一理あった。確かに僕は、もともと島の生まれだ。こんな偽物じみた四年間のことなんて気にせず、僕は再び島に戻ることを喜ぶべきなのかもしれない。

「でも、僕は島から追放された身だ」

「姫が許してくれたのよ？ 他でもない姫自身が。ならばこれは島の決定だわ。みんなはまだこのことは知らないし、私は一応内密に

こちらに来ているのだけど、そんなことは関係ないでしょう」

「……じゃあ、僕の家へ寄ってよ。着替えとかさ、いろいろ準備する」

「ああ、それもそうね。早くしないと君は行方不明の扱いになってしまっし……。運転手さん、行き先変更、いえ最後にはホテルに行ってもらっけど、寄り道して」

僕はまたちらりとタクシーの運転料が掲示されている画面を見てひやりとする。

僕は京香姉さんに言われて、運転手に家の位置を説明した。二十分ほどで到着する。タクシーは家の前で待たせて、僕は外に出た。

必要はないと思うのだけど、京香姉さんも着いてくる。

「へえ、こんなところに住んでいたの」

「あ、そういえば、鞆は学校に置きっぱなしだから、鍵が閉まってるな」

「え、家に入れないってこと？」

「うん。どうしよう……」

試しに扉を開けようとして見るが、やはりそれは徒労に終わった。両親も家を無人にして出掛けていたのだから、当然窓も全て閉まっている。

「何を困っているのよ。こんな家、もう来ることはないのよ？」

京香姉さんはそう言っていると、ベランダに落ちていた大きな石を拾い上げると、微塵の躊躇もなく、窓ガラスに投げつけた。ガラスにヒビが入る。僕は何か声をかけようとしたが、確かにもうこの家は僕には関係なくなるし、明日には僕は島にいるのだから、やめることにした。

三回同じことを繰り返すと、やっとガラスが割れた。僕はそこから手を入れて鍵を開けると、窓を上からスライドさせて、家の中に入る。

「なるべく早くしてね」

京香姉さんもそう言いながら、家の中に入って来た。僕は二階の

自分の部屋に向かう。途中、両親の寝室の扉の前を横切る。もう姿を見ることも声を聞くこともない両親のことを思い出す。先程は考える余裕がなかったのだが、少し時間が経ってみると、両親との思い出が回想されて、胸の奥が嫌な感じに痛む。でも今は干渉に浸っている場合でもないのだから、僕は首を横に振って回想を中断させ、自分の部屋に入った。

クローゼットから大き目のアタッシユケースを引っ張り出して、そこに衣類を入れて行く。ウォークマンが学校の鞆の中だということに気付いて、少し落ち込む。大方の生活に必要なものは島に揃っていると思ったので、荷物は想定していたよりも少なくて済んだ。部屋を出て行く時、もうここに戻ってこないということをおもうと、感慨深いものがあった。

階段を下りて、一階に戻る。京香姉さんは手に酒を持っていた。僕の家にあつたものらしい。

「済んだ？　じゃあ行くのか」

僕のアタッシユケースはトランクに乗せた。京香姉さんの荷物はどこなのだろうと思って質問すると、ホテルにあるとのことだった。成程、僕はすでにホテルの部屋がとってあるとは思っていなかった。タクシーは再び走り出した。

「僕はまたあの家で暮らすことになるの？」

「そうね。部屋もとってあるわよ。勿論、あの家のまま。えーっと唯人がいなくなつて変わったことと言えばね……ああ、幹樹おじいちゃんが、死んだよ」

「へえ」

幹樹おじいちゃんとは僕の父の父、すなわち曾祖父にあたる人だ。あの島では子を産むのが早く、血族は全て同居することが定められているので、曾祖父母がいる家というのは珍しくはない。僕が島を追い出された時に家にいたのは、僕と僕の両親、おばと従姉妹、それに祖父母と曾祖父の計九人だった。そこから僕の両親と曾祖父が御釈迦になつたので、今では六人になつてしまつたという

ことである。

「あとはみんな元気よ。……未香<sup>みか</sup>は自分の部屋に引きこもったまま  
なんだけどね」

未香という名前を聞いて、僕はピクリと反応してしまった。京香  
姉さんを急いで見るが、僕の動揺が気取られた風ではなかったので、  
一安心する。

「まあその辺りも、おいおい説明するわ。それにしても、この島は  
疲れるわ。こんなところに四年間も暮らしていたなんて、唯人、可  
哀そうね。姫は何故君たちを追放したのでしょうか。父上が死んだ  
ことが原因なのでしょうけれど。唯人はその事情は分かっているの  
？」

「分からないよ」

「へえ、今でも父上の死の真相は分からないままなの。あの後も調  
べたり考えたりしてくれた人達がいたのだけどね、全て徒労に終わ  
ったわ。だってあれは、不可能犯罪だったものね」

「そうだね」

京香姉さんの父というのは、名前を神宮冬賀<sup>ひめみやとうが</sup>と言って、僕のおじ  
にあたる。四年前、彼は神宮家内で殺された。それは客観的にみる  
上において、確かに不可能犯罪と呼べるものではあった。それはい  
わゆる密室殺人事件だった。冬賀おじさんは腹を包丁で計八力所刺  
されており、そのうち二カ所はかなり深い傷で、内臓は破損されて  
いて、大量出血による死亡だったと見られている。といっても死因  
が本当にそうなのかどうなのかと言えば、あの島には警察などはい  
なかったし、そのような事件が起こっても全て島の中で処理される  
ので、確実にそうだとは言い切れないのだけど。

そして僕と僕の両親が島から追放されたのは、その事件から一カ  
月が経った時だった。

「結局、自殺が一番妥当な考え方だったことになったわ」

「腹を八力所刺されてたのに？」

「腹は自分で刺せるからね。まあ確かに深い傷もあったし、できる

かどうかは甚だ疑問だけど、実際にやろうとする人もいないのだから、分からないでしょう?」

そうだろうか。僕はどう考えてもそれは間違っていると思う。

京香姉さんはその後、至極真面目な顔つきで続けた。

「だけど、ほとんどの人間は姫が下した裁きだとしているの」

「ふうん……」

「あ、ごめんね、あんまり気分の良い話ではなかったわよね。父上の死体を発見したのは唯人と未香だものね」

「うん、いや、それは気にしないで良いけど」

その時、タクシーが停まった。運転手は振り返って「着きましたよ」と言った。

僕と姉はタクシーを下りた。トランクからアタッシユケースを取りだすと、まだ料金を払っていないのに、タクシーは走って行ってしまった。僕は訳が分からなくなっただけで京香姉さんにそのことの説明を要求した。京香姉さんは笑って言った。

「事前に多めにお金払つていたんだよ。最終的にあの人、十万円くらい得したんじゃないかな? 十万円って高いのか安いのか、分からないけど」

ホテルは商店街の外れの方にある、特にこれといって特徴もない有り触れたホテルだった。京香姉さんが借りていた部屋はこの六階にある六 三号室だった。部屋にはリビング、寝室、風呂、トイレがついていて、大きさも手頃な感じだ。

「豪華なホテルをとってもいいのだけど、目立つと都合が悪いからね。じゃあ、どうしようか? ちよつと早いけど、夕食はルームサービスで適当に済ます?」

「うん、それでいいよ」

僕はいまいち食欲も湧いていなかったので、そう答えた。

やがて運ばれてきたステーキを僕と京香姉さんは椅子に座って食べ始めた。窓から賑やかな夜の灯りが眩しいくらいにキラキラ見え始める時間だった。

「姫は言ったわ。唯人の両親は七月十一日に交通事故で死ぬって。そして残った唯人を島に連れ戻してきてくれたって。私が姫に社に呼ばれてそう告げられたのは四日前。こちらに来たのは昨日よ」

「僕の両親が死ぬって知ってたのなら、それを食い止めることはできなかつたの？」

もう過ぎてしまったことをとやかく言うのは趣味じゃないけれど、これは形式上訊いておくべきことかもしれないと思つて、僕はそう尋ねた。そうでもしないと、僕は両親が死んでも別に良かったと思えてしまうような非情にして劣悪な人間だと判断されてしまう。しかし僕はすぐに、京香姉さん相手にそんな心配は無意味であるということを思い出した。僕はこの四年間で、こちらのいわゆる一般的な世界というのに順応する生き方に慣れてしまっているようだ。あのイカれた島での僕は、時間と共に廃れていつてしまったに違いない。

「姫がそれはするなつて。ほら、姫って唯人のこと結構気に入つてたみたいでしょう？ 両親が死ねば、君も快く島に戻ることに応じてくれるとでも姫は考えたのかもしれないね」

京香姉さんはその後「もつとも、姫がそんな風に人間じみた思考ができるのかは私の知るところではないけど」と付け加えるのを忘れなかつた。そう、姫を僕らの価値観を使って理解することは冒流とさえ言えるようなことなのだ。彼女は、誰にも測れない。測ろうにも、他に例を見ない彼女の特性は、比べるものの存在をそもそも許していない。それでは、彼女を解することなど出来ないに同義なのだ。

「それで指示された時間に指示された場所に行つて、唯人に会つた訳」

京香姉さんからすれば、それは当たり前のことだった。二十三年

もあの島で生きてきた彼女には、姫はそのような人知を超えた事象を起すのが常識になっている。この四年間で僕は姫の能力には何か仕掛けがあったんじゃないかと疑うようになっていたけれど、こうしてまた彼女の話に接してみると、やはりそれは本当のことなのだろうと思う。

「島の様子も変わりはないよ。……ん、そういえば唯人はさ、恭輔きんすけくんのことって知ってたっけ？」

僕は口の中のステーキ肉を飲み込んでから「誰それ？」と訊く。聞き覚えのない名前だった。

「ほら序列にして二位の神谷家かみやの男の子だよ。歳は、えーっと、十五歳かな」

島では姫の意向を代表して窺い、姫と住人の仲介役を担う家が四つある。四つもあるのはそれぞれが互いを監視して姫とその意向を護るためだ。しかしその四つも対等では話が進みづらくなる場合があるということ、その四つの家には序列がつけられている。一位は神音家かみね、二位は神谷家、三位は僕が所属する神宮家、四位の名前は忘れてしまったが、三位までと同じく神という字が入っていたのは覚えている。

「十五歳か……まだ餓鬼だな」

そつという僕も餓鬼なのだから、これは思い上がりも猛々しい恥知らずにして傲慢な台詞になってしまったかもしれない、と僕は言った後で反省した。

「その子が少し問題児なの。本来序列二位の家にあるまじきことなのだけど、彼は姫を信仰しないどころか、反抗精神をむきだしにしているのよ。勿論住人達も手を焼いているわよ。統制を乱す不確定因子は取り除いていくべきなのでしょうけれど、厄介なのが神谷家の跡取りだつてことなのよね……。あそこには子供が他にないし」

「ふうん。それはおかしな話だよね。あそこの島では姫は絶対的な存在だつて幼い頃から教え込まれるのにさ」

「そうね。まあ私だつて幼い頃に少しだけ姫に反抗したい気持ちがある

出たり、その実態に疑いを持つことだつてあつたけれど。それを表に出してしまつてはあそこでは生きられないものね」

京香姉さんはそう言つてから、溜息をついた。もしかしたら序列三位の神宮家の住人である京香姉さんが、その恭輔くんという子供の監視役にさせられているのかもしれないな、と僕は少し考えた。

「そうそう。君を島に呼び戻すのは、跡取りの問題もあるのよね。神宮家の跡取り候補は私と未香で両方女の子でしょう？ 今から母上が新たな夫をもらいうけてこさえようにも、四十五歳で子供に実権を譲らなければならぬから間に合うはずもない。そこで、唯人が必要になつてきたのね」

僕の脳内にその時、不意にある仮説が浮かんだ。それは自分の考へだとは思えないような突然のインスピレーションで、僕はその仮説の不気味さに気分が悪くなつた。

もし神宮家の跡取り問題を解消すべく僕を島に呼び戻す必要ができたのだとする。しかし僕とその両親は一度島を追放された身だ。それを全員呼び戻すことは難しい。島の外で四年間島とは異なる文化に触れてしまった人間を三人も島に入れるは危険だ。ならば姫はどうするだろう……。

……必要な僕だけ呼び戻して、邪魔な両親は消すんじゃないだろうか？

両親は姫の裁きを受けたのではないだろうか？

そうすることで、二次的な結果として、僕を島に呼び戻す簡単な口実もいくつか生まれた。

果たして……。

「ん、どうしたの、唯人」

京香姉さんが僕の不自然な様子に気がついたようで、少し心配そうにしながら僕の顔を覗き込んでくる。僕は「なんでもないよ」と答えた。

「明日は朝早くここを出て、またタクシーを使って港に行くわ。そこから二人で船に乗って島に行くの。じゃあ、どちらが先に風呂に

入る？ 私が先でいいかな？」

僕が頷くと、京香姉さんは部屋にあらかじめあった浴衣を持って、風呂の方に向かって行った。下着は持っていないのかな、と僕は下らないことを考えた。

シャワーが浴室の床を叩く音がうつすらと聞こえ始めて、僕は部屋で一人になった。部屋にはテレビがあつたが、つける気にはならなかつた。僕は静寂に心地よさを見出す人間だ。

僕はソファから下りて、窓を開けた。夜のひんやりとした空気が部屋に流れ込んできた。車の走行音や人々の話し声が聞こえる。このような喧騒から、僕は離れることになる。それは嬉しいことだった。

もうどうにでもなれ、と言うような投げやりな気持ちが僕にあることは否定できない。最近の僕は現状への正体不明の不満がつのり、一種のやりきれなさやある種のわだかまりを感じていた。徒労の後に訪れる、あの居心地の悪い疲労感が常に体を重くしているのを感じていた。死んで楽になりたい、だなんて冗談じみた思考をいたずらに繰り返していた。日常をばらばらに破壊して、自分ことごとく壊れてしまいたいような欲求にかられていた。だから島に戻ることは、僕の望むことであつただろうし、望まなくとも拒否するような話ではなかつた。

段々と僕は切ない気持ちになつてきた。視界を彩るたくさんのが滲んでいく。理由の分からない寂しさが、こみあげてきていた。

僕は自分の目を拭って、窓を閉めた。明日にはもうこんな場所とはお別れだ。友達と呼べるような人達もいたけれど、彼らは僕この場所に縛り付けておくような莫大な価値までは有していない。

僕はぐったりしてきたので、ソファに寝転がった。そして、あの島のことをなるべく思い出すように努める。あの島、なんて呼び方を僕はしているが、それも仕方がない事で、何故かというところあの島には正式な名称がない。こちらに来て地図を見てみても、名前どころかあの島は載ってさえいなかった。それほど小さな島でもな

いので、その理由は定かではない。

あの島は緯度約三三度、経度約一三九度上にある島だ。大きさとしては約八平方キロメートルほど。といっても以上のことは、地図を見たり、他の島と比較したりして僕が導き出したおよその数値なので、それほど信憑性が高い訳ではない。

島では食糧は大体が自給自足である。住民は田畑を耕し、魚を釣り、主にそれを食材にしている。足りない分、または自分達だけで生産することが難しい食材あるいは生活用品などは、外から運んでくる。定期的に決められた島の者が日本本州の方に船で出掛けていき、情報を収集し、いろいろなものをも島に持って帰ってくるようになっていたのだ。その決められた島の者というのは、主に序列四位の家が担当していたと思う。

島の住居は比較的しつかりして、こちらの家とそう大差ない。御洒落なものはないけれど、どれも扉があつたりガラスのはめられた窓があつたりして、鍵もしつかりかかる。ただ、その多くは一階建てだ。序列三位の僕の家は二階建てだった。僕が生まれる少し前に島では大規模な家の建て直しが行われたらしく、本州の方から大工が来てそうなたたという話だ。そのような資金が何処から出ているのかなど詳しいことは、僕では分からない。今思うと、不思議なことばかりなのだ。島では共通通貨などは使われていない。政治制度としてはかなり遅れたものだし、勿論日本の政治の範囲から外れている。そもそもあの島が日本領なのかすら怪しいのだ。あの島に外の人間がやってくるなんてごく稀なのだ。

そんなことを考えていると、京香姉さんが部屋に戻って来た。髪は濡れていて、体は朱が差して火照っているのが分かる。その上浴衣姿だ。僕はその色気のある妖艶な雰囲気にとキリとした。

「あー、さっぱりしたわ。じゃあお酒飲もうかしら。私が島の外の世界のことで唯一認めているのがお酒なの。アルコールって最高よ」  
京香姉さんはそう言って、部屋にあつた冷蔵庫から、僕の家から持ってきた日本酒を一本取り出す。

「じゃあ唯人も入ってきちやいなさいな」

僕は言われるがままに、自分の鞆から着替えを取り出して、浴室に向かった。

## 不慮の連続（後書き）

こんにちは、凜野冥です。

「二千年姫の死亡」は僕が初めて全力で執筆活動に取り組もうと現時点では思っている小説です。

出来が良く話がまとまった場合どこかの賞にでも出そうかな、と生意気ながら考えている小説です。

そして面白くならなかつた場合、執筆活動をそこで終了しようと思え本気で決めている小説です。

更新は遅めだと思いますが、たまに覗いてくださると嬉しいです。

## 姫との面会

僕は言われるがままに、自分の鞆から着替えを取り出して、浴室に向かった。

脱衣所で服を脱いで裸になると、浴室に入り、シャワーを浴びた。そうしながらも、僕は島のことをあれこれ思い出す。そうしておかないと、僕はこの四年間で島との生活から遠く離れてしまったので、不都合なことが多くなってしまうだろうと思ったからだ。

ただ、島のことを思い出そうとすると、どうしても未香のことが頭をよぎった。未香は僕の従妹にあたり、僕より二つ年下なので今年で十六歳になるはずだ。未香は体が弱くて引きこもりがちで、内気で引つ込み思案なところがあり、積極的な活動というのが苦手な少女だ。僕のことを「お兄ちゃん」と呼んで慕ってくれていたのを思い出す。だけど彼女に僕は負い目を感じずにはいられない。僕が意識的に思い出さないようにしている四年前の記憶、冬賀おじさんが殺された日の出来事、それが心臓を掴んで潰そうとしているかのような負荷を僕にかけ、苦しめるのだ。僕はわざと呼吸を荒げて、自分を落ち着かせようとす。しばらくしてから大分平気になると、僕は考えることをとりあえず中断して、なるべく無心のままに体を洗った。

風呂からあがって僕はジャージに着替えて部屋に戻った。考え事にふけりすぎて僕はすっかり長風呂になってしまったので、京香姉さんはすでに寝ているようだった。机の上には、酒瓶やビールの缶が計六本倒れていた。京香姉さんは僕の想像以上にアルコール好きらしい。

現在の時刻は夜十時をまわったところで、普段寝ることは絶対にない時間なのだが、明日の朝は早いと言うし、僕ももう寝ることにした。寝室に入る。リビングから洩れてくる光がわずかにあるばかりなので薄暗い。ベッドが二つ並んで置かれていて、京香姉さんは

片方のベッドで眠っていた。浴衣がはだけていて、僕は少し目のやり場に困った。

僕はもう片方のベッドに潜ると、目を閉じた。おやすみなさい。……しかし、普段十二時過ぎまで起きている僕が、こんな時間にすぐ寝られるはずもなく、結構苦勞することになった。思案にふけていればいつの間にか眠っているだろうと僕は思っ、目を閉じたままよしなしごとを考え続けることにする。

隣の京香姉さんのベッドからもぞもぞと音が聞こえた。僕は気にせずに島に戻ったらもうハンバーガーは食べられないかな、だなんて下らないことを思考し続けていたが、体にかかっている布団が持ち上げられるのが分かり、目を開けた。

「京香姉さん？」

京香姉さんが、僕と同じベッドに潜り込んできたのだ。部屋は暗いので、その表情までは窺えない。僕は驚いて起き上がろうとしたが、京香姉さんは僕に少し乗るようになって、それは叶わない。京香姉さんはそのまま、僕に抱きついてくる。腕を首の下にまわして、足を絡ませてくる。そして舌を僕の首にいやらしく這わせた。僕はびくつと反応して、慌てて京香姉さんを自分から離そうと抵抗してみる。

「駄目だよ、京香姉さんっ！」

「どうして？」

京香姉さんは即座に僕の耳元で囁く。

「どうして駄目なの？」

京香姉さんの手が、僕のジャージの上着の中に滑り込んでくる。僕はアルコールのにおいに気がついた。

「どうしてって……。京香姉さん、酔ってるんじゃないの？」

「ふふふ、酔ってるわよ？」

京香姉さんは僕の耳の中に入れて舌を入れてくる。僕は首を動かして抵抗しようとする。

「どうして嫌がるの？ こういうの、好きなんですよ？」

京香姉さんは僕に絡みついて、離さない。上に乗られているので、逃げることはできなそうだった。

僕は自分までが酔いそうになっているのを感じた。このまま京香姉さんに凌辱されることを認めようとしている自分に気付いた。しかし、それはいけない！

「駄目だっ！」

僕は語気を強めて言った。そうでもしないと、京香姉さんも僕も酔いから醒めそうになかった。

その時、僕の頬にぽとりと、熱い水滴が垂れた。僕は目の前にある京香姉さんの顔を見て、衝撃を受ける。暗闇の中だとは言え、僕は確かに見たのだ。

京香姉さんは泣いていた。

僕は金縛りにあったかのように動けなくなった。何がどうなっているのが何も分からなくて必死で頭を働かそうとするが、思考はうまくいかずにぐるぐると同じ場所を無意味に回り続けるのみだった。

「どうして？ いいでしょう？ 未香にはしたくせに、どうして私は駄目なの？」

京香姉さんのその言葉に、僕は頭を鉄の棒で思い切り殴られたかのような気がした。何故、京香姉さんが僕と未香とのことを知っているんだ？

しばらく、お互い何も言葉を発さずに、無音の時間が続いた。

やがて京香姉さんはぽつりと「ごめん、悪かったわ」と寂しそうに言うと、僕の上から離れて、寝室から出て行った。僕は何かを言おうとして、しかし言うべき言葉は何も浮かばなかったので、結局口を閉ざすことになった。

僕はそれからも眠ることはなかなかできなかった。

いつの間にか僕はちゃんと睡眠状態に落ちていて、京香姉さんに起こされることになった。急に光が視界に入ってきたので、僕は眩しくてまばたきを多くした。

「もう行くよ。準備して」

意識がうまく覚醒していないままで僕は起き上がり、時計を見て時刻を確認した。朝四時半は早すぎだろう、と僕は寝呆けたままの頭で考えた。

京香姉さんはもう着替えていて、いつでも出掛けられると言った様子だった。水色の薄手のティーシャツにショートパンツという出で立ちで、かなり涼しそうである。

僕は歯磨きと洗顔を済ませてから、黒の半袖ティーシャツとジーズを身につける。寝癖が気になったので、適当に水で濡らして整えた。

僕と京香姉さんは荷物を持つと、部屋を出た。ホテルの外には京香姉さんがすでにタクシーを呼びだして、それに乗り込む。僕はもしかや昨日と同じタクシーに乗ることになるのではないか、あれはあの島に何やら関係のあるタクシーなのではないか、などと愚考していたのだが、そうはならなかった。京香姉さんが港の名前を伝える。昨日のことがあったので、タクシー代はちゃんと後払いするようにしろ、と京香姉さんに忘れずに注意した。

「ふふっ、眠そうね。唯人って朝に弱い方なの？」

「低血圧なんだ」

低血圧であることと目覚めが良くないことはそれほど関係はないということを知っていたのだが、それにも関わらずそんなことを言った辺りに、まだ僕の意識が完全には覚醒していないことが窺えた。

「ああ運転手さん、途中で七に寄ってくれるかしら」

僕はこちらに振り返った運転手が怪訝そうな顔をしたのを見て「セブンイレブンですよ」と代弁めたことをした。京香姉さんは島の外のことに於いてある程度の知識は島に入ってくる情報から知っ

ていたにしても、実際に訪れるのは多分初めてなのだ。

その後コンビニでおにぎりやサンドイッチを買い、車内でそれを食べて朝食は終了した。

僕はタクシーの中で眠ってしまい、目的地に到着してから運転手に起こされた。窓から広大な海が見えて、その上に多くの漁船が浮かんでいる。京香姉さんも僕と揃って眠っていて、僕の肩に首を預けていた。時間を確認すると、出発から三時間あまりが経っていた。僕らが寝ている隙に運転手がわざと遠回りをしたり京香姉さんの体に悪戯したりしてはいないかと僕は素朴な疑問を頭に浮かべたが、どちらも僕に直接的な被害がある訳ではないので、思案の外に捨てた。

京香姉さんは札束を何枚か運転手に渡してから「お釣りは結構よ」と言って、タクシーを下りた。「かっけー！」と僕は頭の内で叫ぶ。「んー、じゃあ睡眠もしっかりとったし、早速島に向けて出発するか！」

京香姉さんは伸びをすると、トランクから荷物を取り出して、すぐに歩き始める。僕もそれに続く。

「そうそう、これこれ。ほら乗って」

少し大きい目のモーターボートだった。といっても、船というからかなり大きいものを想像していたので、少々期待外れだった。

飛び乗るようになると当然だがボートが揺れたので、僕は思わず転びそうになっちゃった。ボートに乗るのは二度目だ。一度目は島を追い出されたあの時で、もう少し大きい船だったことを覚えていた。このモーターボートは五人程度なら乗れる程の大きさだ。

モーターボートは島に向かって走り出した。僕は備え付けの椅子に座って、潮風を肌で感じる。日差しが強かったので、僕は帽子を持ってくれば良かったと後悔した。京香姉さんの方は、ちゃっかり麦わら帽子をかぶっていた。

「ねえ京香姉さん、どうしてあんなにたくさんお金持ってたの？あの島はどういう仕組みでこちらの通過を手に入れているの？」

特に輸出じみた真似をしているということもなさそうなのだが…

「ふふつ、あの島はかなり融通されてるからね。あの島は一応日本領よ、しかしあらゆる政治制度や経済制度に縛られずに独自の文化と生活様式を持って成り立っている。観光客なんては来ないし、何か物資が不足した場合は補ってもらえる」

「うん」

「言うなればあの島は超法規的空間なの。国から目を瞑られている特殊でいて特別な島。何せ古より生きる神とも呼べる存在が治めし神聖なる島だもね。何年も昔から、あの島は国から護られているのよ。それは暗黙の掟とも言える絶対事項。私達の先祖様がね、中央政権に深い根を張ってくれたんじゃないかしら、私はそう思ってるわ。これでいいかしら？」

「うん。それは知らなかったな。なんだか随分と凄い島なんだね、あそこ。正直、にわかには信じられない話だ」

しかしその話を信じなければ、あの島についてのあれこれを完全に説明することはできないのも確かだ。まああまり深く突っ込んでいいような事でもなさそうだし、僕は曖昧なまま自分の中に問題をしまいこんでおいたほうが良いのだろう。ある程度は問題を放置しておける適当さも、人生においては必要なのだ。

「君の行方不明のことだって、もし君が島の関係者だということが判明すれば、すぐにもみ消されるわ。第一、どうやったってあの島に結び付けることはできないでしょうけどね……。地図にもないみたいよ、あの島」

「そうだね。ねえ京香姉さん、姫は、あの姫は、本当に二千年も生きているのだと思う？」

モーター音が大きくて僕の言葉がうまく聞き取れなかったのか、京香姉さんは「え、何て？」と訊き返してきた。僕はもう一度同じ質問を声を若干大きくして繰り返す。

「そんな問いかけをする時点で、唯人は信じてないのでしょうかね。」

いや、いいのよ、四年間も島を離れば、そうなるのは分かるわ。

昨日言った恭輔くんだって、半年本国の方に行ったことで、姫へ反抗心が芽生えたと言うし。だけど唯人、注意しておくわよ」

京香姉さんは直後、真剣な面持ちになる。

「そんなことをあの島で言えば、ただでは済まないわ」

僕は京香姉さんのただならぬ雰囲気に気圧されて、「ごくりと固唾を飲んだ。

「恭輔くんのごときは本当に不思議なのよ。なんであんな大それた真似をして、未だ処罰されないのか。自宅謹慎なら食らっているようだけれど、構わず外に出ているし。許可なく姫に何度も会って喧嘩腰で会話するらしいわ」

僕は恭輔くんという男の子がどれ程の蛮行を働いているのかはまだ実際に見てもいないので、いまいちピンとこない。

「いくら神谷家と言っても、所詮は序列二位よ。まあ噂では、序列一位神音家の娘と繋がりがあるみたいなのだけだね」

僕は話を聞きながら、船酔いしてきたのを感じていたのだが、京香姉さんに醜態は晒せないの、澄ました顔をするよう努める。酔い止めくらい飲んでおけばよかった。まだ出発して十五分程度しか経っていないと言うのにこれでは、この先が思いやられる。

進んでいくにつれ、左の遠くに大島や三宅島、御蔵島を見ながらも進み続ける。なるべく遠方を見るように心がけて安静にしていたのが功を奏したのか、僕の船酔いは段々と消えていった。

「島に着いたら、まずはじめに姫のいる社に行ってもらわ。そこで、姫と話をしてもらおう」

「うん、分かった」

姫と話すのは苦手なのだけど、僕の個人的な事情が考慮されるはずもないので、仕方なく了承した。姫のいる社というのは島の丁度中央にあつて、頂上ではなくとも山の上にあるので階段を登って行かなければならない。

「その後で家に行くわ。すぐにじゃなくていいけれど、未香に会っ

てあげて。未香、唯人が来るのを凄く楽しみにしていたのよ。今では私のことすら部屋に入れてくるのは稀なんだけど、きっと唯人はいつでも入れるようになると思う」

それは素直に嬉しいことではあった。未香が僕に会いたがっていたというのは、救われる話だ。僕の顔なんて見たくもないものだと、それどころか未だ未香が引きこもりがちなのは僕のせいなのだと、考えていたから。

空腹を感じてきた頃合で僕らはコンビニ弁当を昼食として食べた。京香姉さんは「すぐく脂っぽいわ。不味い」と文句を垂れていた。島の食事は京都料理よりもヘルシーだから、まあそうなって当たり前なのだろう。

島に到着したのは、携帯電話で確認すると、午後二時頃だった。モーターボートには六時間強乗ったことになる。浜辺に乗り上げて、モーターボートから飛び降りると、立眩みがした。京香姉さんはモーターボートが流されないようにロープを近くの岩に結び付ける。

この島は大体円形になっていて、島そのものが大きな山のようになっている。山と言っても傾斜は緩やかだけど。

砂浜を少し離れるとすでに森になっていて、僕と京香姉さんはその中を通っているあまり整備されているとは言い難い道を進んだ。この道もなだらかな坂になっていて、横に三メートル程広がっている。下はもちろん土がむき出しになっている。この島にコンクリートで舗装されたような道は一つもない。

まだ砂浜や生い茂る木々を見ただけなので、別段懐かしいといったような感覚は生まれてこない。

三十分くらい歩き続けると、森を抜け、村に出た。この島において人々が生活している村というのは、比較的平らな土地になっている。

広い田畑が広がっていて、ちらほらと人家も見える。人間も何人かいる。身につけている衣服は派手でこそないものの、一般的な日本人の格好とそう変わらない。ここはまだ村の隅の方だ。勿論姫に近

づくことも許されないような低階級の人間達が住んでいる地域である。この島の身分は家柄で決まるのだ。それが当たり前になってしまえば、底階級の者も自分が低階級なことに疑問をそもそも呈さない程に当たり前になってしまえば、争いなんて生まれえない。

畑道をずつと進んでいくと、それに従って人家も増えてくる。田畑と人家の割合が段々と逆転していくように。何人かの住人は「京香さん、お久しぶりですね」と声をかけてくるのだが、皆、僕のことを怪訝そうな面持ちで見つめていた。京香姉さんは内密に島を出て内密に僕を連れて来たのだから、当然である。

家と家が垣根で分けられ、ちよつとした住宅街みたいになっている地域に到着した。この辺りが一番住人が密集していて、僕の家も近い。しかし僕らはまず姫に会わなければならぬので、そのエリアも通り過ぎる。すると今度は人家も全くなくなり、田畑もなく、何にも利用されていない土地になる。この先に姫がいるのだ。

また道に傾きが出てくる。やがて石で造られた階段が見えてきた。姫のいる社に行くための階段だ。階段の下には小さな小屋が一つある。近づくと、中には監視役の人間がいた。姫の側近とも呼べる四家ではなく、その次に高貴と言えるいくつかの家の代表が、代わる代わるここで監視役を務めるのだ。監視役は小屋から出てくると、僕らに向かって深々と頭を下げた。京香姉さんよりも年上のその男が僕らに頭を下げる図は、少し滑稽でもあった。

「ああ京香様、姫から事情は聞きました。勿論情報漏洩の心配はありませんよ。島の外からお客様を連れてきてくださったのでしょう？ そちらの方がそうですか？」

「うん、そういうことだ。じゃあ唯人、ここを上がって行って、分かるよね？ 私はここで待っているから。姫は君一人に会いたいと言っていたのだし」

僕は京香姉さんも着いてきてくれるものだとはかり考えていたので戸惑ったが、結局一人で階段を上ることにした。

階段は両脇を背の高い木々に囲まれているので、日差しが遮られ

て涼しかった。僕はすでに汗だくだったので、早くシャワーを浴びたい心境だった。

階段は途中で二手に分かれていた。片方は今まで上って来たのと同じ石造りで、もう片方は木が地面に埋め込まれて作られた階段だ。僕は迷わず石造りの方に進む。もう片方の階段は、村が数年前に大改造された時の名残だ。あの先には、かつて姫が住んでいたボロボロの社がある訳だ。

その時、僕は突然、何か不自然な感覚に支配された。正体不明のあやふやが、僕を不安にさせ、焦燥に駆りたてる。これは、視線だ。そう、僕はどこから自分を誰かが見つめているのを直感的に察知したのだ。その直感のままに僕に向かう視線の先を振り返るが、そこには誰もいなかった。気のせいであることはすぐに分かった。僕はそのまま階段を上ることを続けたが、気持ちの悪い倦怠感のようなものは胸の内にわだかまり続けた。

階段を登り終えると、少し開けた場所に出る。真正面、五メートルくらい先に、見覚えのある社が建っている。社を取り囲むかのようになんぞ離れて背の高い木々が茂っている。その場所は薄暗く、現実とはかけ離れた何か特異な空間であるかのような錯覚を僕に植え付ける。

石畳を進み、僕は社の目の前で立ち止まった。心臓が平常時よりも早く動いているのが分かる。緊張のせいか、言葉を発しようと決断したのと実際に言葉が口から発せられるのには若干の時差があった。

「お久しぶりです、姫。神宮唯人です」

しかし反応はない。完全なる無音だった。僕が不安な気持ちでもう一声かけようとした時、やっと社の中から、凜とした女の声が聞こえてきた。

「そうね、久しぶりね。唯人じゃない、うーん、知ってた通り、格好良くなっただわ」

どこか幼さの残る張りのある声だ。僕はかつて姫と話した時の感

覚が蘇るのを感じた。この、自分という存在がいかに取るに足りないものであるかを痛感させられるような、勝手に圧力を感じてしまふような、羞恥と居心地の悪さ。

「夏雅と舞穂が残念だったね。だけどもめんね、私は人の生死に関することには干渉しない主義なの。それはその人にとっても、自分の命を軽々しく扱われるようで嫌でしょう?」

夏雅と舞穂というのは、僕の両親の名前だ。

「そうですね」

「あら、随分と澄ました態度ね。昔からあなたは冷淡な態度を基本としているようだけれど、私に対してそのような真似をするのは失礼と言うものじゃないかしらん。いえ、いいのよ、このように普段とは違った刺激を感じられるから、あなたとお喋りするのは好きなの。私をして、被虐趣味に目覚めてしまうほどなのだから。あなたの相手をするのは禁忌に触れているかのような危うい快楽を私に与えるの。ところで、どうだった? 島の外は。聞かせて頂戴」

「ろくでもない、ところでしたよ。文明が発達しているのに、生活は便利になっているはずなのに、余計に生きづらい社会になっているんです。仲が良い振りをしていても自分以外の全員が敵、みたいな感じで。好きなこととかもあつたけど、それも他の皆がこぞって批判してくるんです。疲れないようにすることに疲れる、といいますか……」

姫相手に本心を偽っても意味がないことは明白だったので、僕は思ったままのことを述べたが、そうしていると、姫がくすくすと笑いだした。

「そうでしょうね。それは当然よ。文明が秀でていけば、自然、劣っているものを否定する社会が出来上がるわ。過ぎたるはなお及ばざるが如し……少し使い方が違うけれど、いいでしょう、言いたいことは表せるわ。それに情報過多は劣悪な感情を生み出す原因になるの。誰でも知りたいことを知れるシステムは自らを博識だと錯覚させ、他人を見下したがる人間性を構築するでしょう。低能な人間

でさえも一人一人が身の丈以上の自意識を持つことは、対人関係において障害となるわ。身分制度にしてもそうよ。平等なんて謳うことが、滑稽なばかりの本末転倒を引き起こしているわ。この島のように明確に格付けをして固定してしまえば、皆は『誰でも生まれた家によって身分が決まる』ということにおいて平等ですものね。あとはそのことに不平を抱かないような制度を徹底すれば、軋轢は生まれないわ、日本はこのことに随分と昔に失敗しているけれどね、ふふ」

姫はかなりの饒舌家で、合いの手を入れる間もなくすらすらと喋る。しかしそれを面倒だとは思えないほどに、流暢に、テンポの良い台詞回しをするのだ。言うなれば、話し上手なのだろう。

僕はここで言わなければタイミングを失うことになると思ったので、姫の語りが途切れたその間について「こうして僕に再び島で生活することを許してください、ありがとうございます」と礼を言った。

「むう……あなたまでかしまった物の言い方をするのね。傷ついてしまうわ。不躰な行いを許してしまうのは支配者として失格になってしまふけれど、だからと言って余所余所しい扱いを受けるのも駄目だわ。対等でなくとも親密に、これってそれほど難しいことではないでしょう？ まあいいわ。あなたを呼びつけたのはある相談がしたくてなのよ。ねえ唯人、神宮家の後を継ぐつもりはあるかしらん」

僕は咄嗟には判断しかねて、口ごもった。するとまた姫のくすくすという笑い声が扉一枚を隔てて聞こえてくる。

「こう早急に尋ねられても困るでしょう？ 分かるわよ、船に揺られて疲れてここに来たのですものね。だけど最終的にはあなたはきっと神宮家の代表となるのだから、その過程にかかる時間は短縮するのが効率的というものでしょう」

「しかし僕はまだ十八歳です。そのような莫大な責任を負う役目が務まるでしょうか」

「務まるわよ。他でもない私が言うのだから、間違いないことは分かるはずよね。だけど、この話は説明すべきことが多くあるし、今のあなたに話すのは酷というものよね。だから今は気にしないで。後日、また呼ぶわ。ああ、でもこれは断っておくわよ」

「何でしょうか」

「あなたは島の外の世界を体験し、島の外の文化や考え方に影響を受けている。それに則ると、私の在り方は否定の対象になるはず。だからこそ、あなたが私に忠実にならないと言うのなら、あなたがこの島で生きることには私は認めない。しかるべき処置、すなわち命は断たせてもらうわ。あなたのことは島の者は皆、部外者だと考えるように今のところしむけているの。あなたがその心も体も私のためだけにあるものと考え、その全てを私に捧げないと言うのなら、死ぬことになります」

あなたの両親のようにね、と姫は続けた。

ぞわっ、と僕は身の毛が逆立つ思いがした。背筋が冷たくなり、全身が小刻みに震えだす。身を押しつぶさんばかりの恐怖が、僕の心臓を暴れさせる。吐きそうになってしまうほどの威圧感があり、呼吸をすることすら困難になる。

「この島に外から客が来る、という情報が島全体に行きわたっているの。上位四家にはあなたを敵視しないように姫宮唯人というあなたを伝えているけれど、今現在、大体数の者の認識では、あなたは部外者。早いところ、決断してね。そうしたら、私の名の下あなたのことを知らせて、あなたには早速仕事をしてもらうわ。とりあえずは、今日明日で島の生活について思いだして頂戴」

「……分かりました」

僕はなんとか、そう口にすることができた。もう姫の相手をすることを今すぐにもやめたかった。京香姉さんがいてくれれば良かったのだが、それを見越して姫は僕を一人でここに来させるように指示したのだろう。姫は僕の人格も感情も未来も全てを見透かしているのだから。

「本当はもつとたくさんお喋りしたいのだけど、唯人もかなり疲れ  
ているみたいだし、今日はここまでにしめよう。じゃあ、ばいば  
い。また今度いちゃいちゃしようね」

僕は「さようなら」とだけ返すと、すぐに振り返って逃げるよう  
にその場を離れた。もつとも、逃げるようにというのは心持ちの話  
で、速度は歩くそれと変わらずに、だ。少しでも姫に見栄を張ろう  
としたが故の行動だったが、すぐにそんなことはこの姫の前では無  
為であるということを出す。いや、姫の前でなくとも、この世  
のどこにいようと、この姫には全てが筒抜けなのだ。

僕の認識が甘かった。姫のことを僕はどこかで軽んじていたのだ。  
四年間ですっかり僕は姫の凄まじさを記憶の内で薄めてしまってい  
たのだ。

僕は早く京香姉さんに会いたくて、小走りで階段を下りた。つい  
先程まで一緒にいたというのに、それは随分と昔のことであるかの  
ように錯覚してしまっていた。

その時だった。僕の左側に立ち並んでいる木の裏から、人影がぬ  
っと出てきたのだ。僕はすぐに立ち止まった。人影の正体は、僕よ  
りも歳下に見える男の子だった。黒の短髪で、来ているシャツと短  
パンも黒色だった。ニヤニヤと、感じの悪い笑みを浮かべている。

「よお」

男の子は左手を上げて、手のひらを僕に向けてきた。

僕は咄嗟に「君は？」と尋ねていた。男の子は両手をポケットに  
入れてから、だらしなくヘラヘラと笑ったまま、答えた。

「俺は神谷恭輔。序列二位神谷家の御曹司だよ」

## 四年ぶりの姫宮家

「俺は神谷恭輔。序列二位神谷家の御曹司だよ」

僕はその名前を聞いてはっとする。この子が、京香姉さんが言っていた恭輔くんなのだ。

「あなた、神宮唯人だろ？ 今日来るって聞いたからさ、結構前から待ってたんだぜ。あんな小屋一つ建てただけで監視しているつもりになるなんて、馬鹿馬鹿しいぜ」

どうやら僕がついさつき感じた視線は、恭輔くんのものだったらしい。

「ん？ 姫は未来予知ができるのだから、実際は見張りなんて元からアテにしてないって？ 本当にそうかねえ。大体、保身を考えるなら、こんなところじゃなくて、だだっ広い荒野の真ん中にもぼつんと社を建てればいいのさ。まあ、姫というのは平住民とは区別され、神聖なものであるからこそ高いところに君臨してなければいけないとか、そういう威厳みたいなものをこの場合は重要視してるんだろうけどな、ハッ。ところで神宮唯人、聞いてるぜ、四年前のこと。俺はあれ、結構興味あるんだ」

恭輔くんはこうして自分からぺらぺらと親しげに話しかけてくるんだけど、僕としては初対面で突然そのように饒舌に振る舞われても困るといふものだった。どう反応するべきか掴みかねる感じだ。しかし恭輔くんは、僕が狼狽しているということを十分に汲み取っているはずなのに聞かずに、話し続けてくるのだった。

「実際滅多に拝めるような事件じゃねえよな。序列三位神宮家の代表、神宮冬賀が、他にもない神宮家の自室で殺された。腹を包丁らしきもので八力所も刺されて、大量の血液を部屋中にまき散らして死んでいた。発見したのは同じ家に住む当時十四歳の神宮唯人と十二歳の神宮未香。何度呼びかけても神宮冬賀から反応がないことを不審に思った二人は、扉に何度も突進して、遂に扉を外して中に入

ることに成功した。一つしかない窓には鍵がかかっていて、そもそもそこは二階でありベランダはない。扉にも鍵がかかっていて、鍵をかけたまま扉が外れたことを裏付ける傷が扉の外枠に存在。この扉に鍵はない。当時家にはこの二人と二人の曾祖父しかおらず、村の仕事から帰って来た家族も、少し遅れてその惨状を発見する……」

恭輔くんは事件の概要を説明口調で述べてから「ハッ！」と笑い声をあげた。

「面白い話だぜ。もう皆これを、姫の裁きだ姫の裁きだって阿呆みたいに繰り返すんだ。馬鹿すぎるぜ。この事件から数日が経つと、今度は大事な跡取りを含んだ神宮唯人、夏雅、舞穂の三人を島から追放。ここまで材料が揃ってるにも関わらず、不可能犯罪だ何だって、この島は十四歳の俺にすら及ばない低能で溢れかえってんだよ」

僕はそれを聞きながら、動揺を隠すのに精一杯だった。それでも冷や汗は体中から噴き出し、激しい動悸故呼吸が荒がるのを抑えられない。正直、僕は立っているのもやっとで、平静を装うのは失敗しているに決まっていた。だけど僕は、自分よりも年下の、このような世間知らず丸出しの傍若無人な態度をする餓鬼に、下に見られる訳にはいかない。こいつは言うほど個性的でも特別でも有能でもないくせに、自分をそれらと信じて疑わない、恥じらいを知らないどこにでもいるような程度の低い人間だ。そんなのにやりくるめられることは、僕としては屈辱なのだ。しかし、ここを恭輔くんに構わず通り過ぎるのは逃走そのものであるし、なお無視を続けるのは喋る余裕がないと見られてしまう。そのように僕が逡巡していると、恭輔くんは「んー？」とおかしな声を出しながら、大げさに首を傾げた。

「随分と無口じゃねえかよ。あつ、もしかしてさ、俺が序列二位の神谷家の人間だって知ってビビっちゃった？ まあ、それを狙って俺はいつも家柄を名乗ることにしてんだけどさ、その点だけじゃあ便利な名前だからな。ハハッ、でも気を遣う必要はねえよ、俺は序列だの何だの、本当は馬鹿馬鹿しくて嫌いなんだ。そういう、姫だ

か言う女の作ったちやちい仕組みが、俺からしたらしよぼすぎて付き合いきれねえのさ。この気持ち、四年間島の外にいたあんたなら分かるだろ？ この島はイカれてるぜ」

「それなら程度の低い批判を述べるばかりで具体的に大それた行動を起こす訳じゃない君のその態度も、相当にしよぼいね」

「はあ？ 殺されることに繋がるような真似を進んでるのは、それこそしよぼいだろ。俺はそうじゃねえのさ。大体、俺がそんなことしなくてもな、この島には火種がすでに仰山あるのさ。俺はそれを少しばかり刺激し続けていれば、自分にお咎めが向かわないままにこの島をぶつ壊せる。知ってるか？ 今この島ではな、姫を殺して島を出ようとする計画が裏で着々と立てられてるんだよ。そのことに、何でもお見通しのはずの御姫様は気付くこともできないでいる。勿論、罰なんか下るはずもねえさ」

「その話は、本当なの？」

恭輔くんの話が大変興味深いものだったので僕はそう尋ねてしまつたが、すぐにこれで完全に恭輔くんのペースに乗せられたのだということを知る。だけど、今は僕の自尊心などより重要な事柄がある。姫を殺す計画、そんなものがあるというのか？

「今この島には三百人の人間が住んでるんだぜ？ その全員が全員たった一人の女の操り人形でいる訳がねえじゃねえか。今まで成り立ってたのが不思議なくらいだぜ。強力な催眠とも言える状態に島の住人の大多数は置かれてるが、前に神音家の連中と一緒に島の外に半年程出た俺は、その催眠から解けた訳だ。俺は科学って奴が大好きでね、あれからはそういう本を外から持ってきてもらっては読み漁った。参考がてら宗教関連の本もかじってみただよ、その俺からしたら、二千年も生き続ける女なんて、抱腹絶倒ものだぜ。そうだろ？」

「姫は二千年前からの記憶も断片的に所持しているようでよく会話に出すと言うけれど、それも眉つばものだっていうことか？ 姫が起こす奇跡と呼べる事象の数々にも、全てにトリックがあると？」

「当たり前じゃねえか。なんだがっかり、あんたも姫の力とやらを信じてるのかい？ 序列三位でしかも十四歳で島を出されているあんたなら無理もねえのかもしれないねえが、姫が起こす奇跡なんて実際は一つもねえよ。あれは全部、神音家や神谷家が姫の指示通りに動いて、姫の奇跡を演出しているに過ぎねえ。代々やってきてることだし、自分達が裏切れば島は混乱しちまうってことが分かってるもんだから、言いなりになるしかねえ訳だな。だっせー」

その時だった。階段を上がる足音が、下の方から聞こえてきたのだ。恭輔くんは「ああ、そういえばそんな時間だっけかな。あんたには言いたいことも訊きたいこともまだまだあるんだが……、今んとこ悉く俺の期待を外してくれちゃってるし、興も失せたかな。じやあな神宮唯人、まあお前もこれをきっかけに姫に不信感を抱いてくれよ、それが俺の計画をよりスムーズに進める潤滑油になるのさ」と残し、また木々の中に押し入って、消えてしまった。下を見ると、丁度男が一人登ってくるのが見え始める時だった。男はお盆のようなものを持っていて、その上には食器が並んでいる。男は僕に気付くと、頭を下げた。

「これはこれは島へのお客様ですね？ わざわざどうも。姫が予め伝えていた時間になりましたので登り始めたですが、ご面会はすでに終了したようですね。これも姫の予定通りという訳ですか」

男はそんなことを言っている。すれ違い様に確認すると、食事は少なすぎると言えるほどで、姫は小食なのか、などと僕は下らないことを考えた。確か、姫への食事の配達は一日に二回しかなかったはずだ。

階段を下り終わった僕は、小屋を覗いた。京香姉さんはそこでお茶を飲んでいたが、僕が戻ってきた事を知ると、すぐに立ち上がった。小屋を出た。

「どうだった？」

「疲れたよ」

僕は正直な感想を述べた。恭輔くんのことを言うか言わまいが迷

つたが、会話の内容は考えなしに易々と話せるようなものではなかつたし、僕はひとまずやめておくことに決めた。

「ふふつ、そうよね。さあ、四年ぶりの我が家ってやつに行こうか。ああ、でもその前に、どうせ近くなんだし、自分達より高位の神音家と神谷家に御挨拶しましょうか。ごめんなさいね、だけど今後のためにも必要だと思つわ。本当に顔見せ程度で、どちらとも長居したりなんかしないから。そもそも、私だつて疲れているしね」

「うん、大丈夫だよ」

僕と京香姉さんは先程来た道を引き返し、また住宅街のような地域に戻つて来た。

神音家と神谷家は隣同士に位置していた。先に挨拶に伺うのは当然、序列一位である神音家である。インターホンはないので、玄関まで行つて、京香姉さんが扉をノックした。「はい」という声が内部からかすかに聞こえてきた後に、扉が開けられた。そこにいたのは京香姉さんに歳が近いように見える、感じのよさそうな男性だつた。「突然お伺いしてすみません。もう姫から知らせを受けていると聞いたので承知済みだとは思いますが、これが神宮唯人でございます」

京香姉さんはひどく丁寧な言葉遣いで、男性に僕を紹介した。

「ああ、大きくなつたねえ。覚えているかい？ 神音統吾だよ」

名乗られて、僕はその男性のことを思い出した。以前、何度か会つたことがある、それに、幼い頃によく遊んでもらつたらしいのだ。

「はい、覚えています。お久しぶりです。姫のお許しを受け、再びこの島に踏み入ることができました」

「ははっ、礼儀も覚えたようじゃないか。昔、君には手を焼いたんだよ。まあ、それはいい。唯人くん、随分と逞しい顔つきになつたよ。その様子ではこれから姫宮家の代表として僕らに名を連ね島を引っ張つて行くことができそうだ。姫から、その話は聞いたかい？」

「はい、まあ、聞きました……」

僕はその時の嫌な感覚がまた胸の内に蘇る気がして、若干渋い顔つきになつたと思う。統吾さんは僕のそんな態度を見て何があつた

のかを察したのか、苦笑いを浮かべた。

「大丈夫、慣れれば、姫と話すのも楽しいんだよ。それは高位の家で生まれた僕らだけの特権な訳だしね。そのものの価値っていうのは、持つてる者より持っていない者の方が知っているものさ、実際僕らは他の村人からは羨ましがられる。姫との面会は、下級の家に生まれればどうしたって叶わないんだからな」

「そうですね。完璧に仕事をこなす自信は正直な話、希薄ですが、責任を感じながら、ぬかりないように努めようと思います」

「うん、最初の内はそれで良い。俺は十七歳でもう家の代表にさせられたけど、緊張してやっていけば、すぐに責任も仕事内容も馴染んでくるようになったよ。適度な手の抜き方も、直に覚えるさ。気負わず、取り返しのつかない過ちだけに気をつけてやっていけばいいさ。何かあったら、俺を頼ってくれよ」

「はい、ありがとうございます」

統吾さんの言葉のおかげで、僕は気分が楽になった。それが社交辞令のようなものだったのだとしても、それを全然感じさせない態度には、親しみが湧く。

「うん、琴音にも挨拶させようと思ったけど、あいつは最近ちょっと反抗期気味だね。じゃあ、京香も頑張れよ」

統吾さんが会話を切り上げようとする気配を察知して京香姉さんは「はい、ありがとうございます。それでは失礼します」と言って頭を下げた。僕もそれに倣う。統吾さんは「そんなにかしこまんなくていいのにな」と苦笑しつつ言っ、家の中に引っ込んで行った。僕と京香姉さんは神音家を出る。

「唯人、やっぱり神宮家の後を継ぐことになったのね」

「うん。あまり気は乗らないんだけど……。人の前や上に立つのは、苦手だし、嫌いなんだ……」

「神宮家程度じゃ、あまり人前に立つ機会がある訳じゃないわよ、大丈夫。私のことも頼っていいからね」

京香姉さんはそう言うてから、僕の頭を撫でた。子供扱いされて

いるようで、僕は少し不満を覚えた。

続いて僕と京香姉さんは隣の神谷家に入った。「例の恭輔くん、いるかもしれないわね。あの子に出てこられたら最悪なんだけど」と京香姉さんは心配しているようだけれど、僕はそれがいいことを知っている。

扉をノックすると、中から出てきたのは三十路は越しているように見える男性だった。この島の住人にしては珍しく、太っている。四角い縁の眼鏡をかけてもいた。この男にもうっすら覚えがあったが、名前は思い出せない。

「突然お伺いしてすみません。もう姫から知らせを受けていると聞いたので承知済みだとは思いますが、これが神宮唯人でございます」  
京香姉さんは統吾さんに対して時と同じ台詞を口にした。

「ああ、分かりました。唯人くん、大変だったねえ、えーっと五年島から離れていたのかな？」

「四年です」  
「四年か、それでも大変だよ。僕はこの島から出ることもなんか考えられないからねえ。外の世界は話を小耳にはさむだけでも怖いところらしいじゃないか。嫌だねえ、だけどこの島は姫が護ってくれている。平和そのものだ。えーっと、京香さん、上がって行きますか？」

男はかなり早口で喋った。気さくな人らしい。

男の誘いに、京香姉さんは少しだけ困ったようにしながら答えた。  
「嬉しいお誘いではありますが、この度は御挨拶に伺っただけなので」

「ああ、そうですね」

僕はその時、玄関の奥に伸びる廊下に、女の子が一人いてこちらを見ているのが目に入った。僕はその視線に気付いたのか、男もそちらを振り向く。女の子は怯えたような反応をして、一步引き下がった。

「ああ紗耶美、お前もこちらに来て挨拶しなさい」

男はそう言ったが、紗耶美と呼ばれた女の子はお辞儀のようなものをしただけで、廊下の奥へ逃げて行ってしまった。

「すみません、人見知りする奴なもので。恭輔の方も今家にいなくてね、あいつはいつも皆様に迷惑をかけていてね、重ねてすみませぬねえ。叱ってるのですが、自分の非を認めない奴なもので……」

「いえ、大丈夫ですよ」

「そう言ってもらえると安堵しますが、やはり早い内に手を打っておかないとね、姫の怒りに触れることのみが、この島に存在する恐怖ですからね」

京香姉さんはその時、強引な感じに「それでは私達はこれで」と言った。

「ああ、そうですね。では、今後ともよろしくお願いします」

男はそう言うのと、僕らを家の外まで見送った。神谷家から少し離れてから、僕は彼の名前を京香姉さんに尋ねた。

「紀久夫さんよ。あの人は喋り出すと長くなるから苦手なの。それに、私の体をじろじろ見まわしてくるのよ」

僕は成程と思った。

そして僕と京香姉さんは、やっと神宮家の前にやって来た。

門から敷地内に入ると、庭の方から声がした。

「ああ、お帰りなさい！ まあ唯人、本当に唯人？ 立派になったわねえ！」

見ると、懐かしい和沙叔母さんが花にジヨウロで水をやっている姿があつた。和沙叔母さんは京香姉さんのお母さんだ。今年で四十三歳のはずである。

「さあ、入って。京香も疲れたでしょう？」

和沙叔母さんはそう言いながらジヨウロをその場に放置してこちらに歩いてくると、玄関の扉を開けた。僕はそれに続いて四年振りの我が家に入る。懐かしい玄関に懐かしい廊下に懐かしいにおい、それらに僕はノスタルジックな気持ちになる。和沙叔母さんは「京香が唯人を連れて帰って来たわよ」と家中に聞こえるような声を

出しながら、靴を脱いだ。僕と京香姉さんもそれに続く。

神宮家は入ると玄関があり、真つすぐに廊下が伸びている。廊下に平行な階段が左手にあり、右手には扉が一つ。廊下の奥にも扉が一つ。その奥の扉の前で、廊下は左に曲がっていて、その先に便所と風呂・洗面所がある。階段の脇にも一つ部屋があり、かつてはそこで曾祖父母が生活していた。僕らは右手の扉を開けて、中に入った。そこはリビングになっていて、三十五畳の広さを持っている。リビングに入ると、正面に襖、左手に扉があり、左手の扉はダイニングへ、正面の扉は祖父母が生活する和室になっている。ダイニングに入ったとするならば、左側がキッチンと繋がっていて、最初家に入った時に廊下の奥にあった扉は、このキッチンの扉でもある。一階の構造は、こんな感じだ。

僕がリビングに入るとすぐに、正面の襖が開いて、懐かしい祖母もリビングに入って来た。祖母は今年で六十三歳、祖父の年齢は忘れてしまったが、まあ祖母とあまり変わらないとは記憶している。

「おかえりなさい、唯人」

「ああ懐かしい、変わらないねえ唯人」

祖父母は口ぐちにそんなことを言いながら、僕に近づいてきた。握手を求められたので、それに応える。今のところ会う人全員に「変わった」と言われるので、祖母の言葉は少し意外であって、がっかりする言葉でもあった。

「未香ー！ 唯人が来たわよー！」

和沙叔母さんが階段の下で二階に向かって叫んでいる声が聞こえる。しかしその返事は聞こえてこない。しばらくすると和沙叔母さんは首を横に振りながら戻って来た。

「駄目だわ、全然反応がないもの。唯人、後で様子見に行つてあげてくれる？」

「うん。とりあえず、自分の部屋行って、荷物整理してくる」

「そうね。ご飯の用意、しておくから。御馳走よ、今日は」

和沙叔母さんはそう言つてキッチンの方へ行つてしまった。京香

姉さんが「ああ、手伝うよ」と申し出たが、和沙叔母さんは「いいのよ、京香、疲れてるでしょう？」と言って断った。

僕はリビングを出て、階段を上がり、二階に行く。階段は途中の踊り場で百八十度方向を変えて、上に伸びている。階段の上には左側に廊下が向かっており、右手に三つ、左手に二つの部屋がある。僕の部屋は左手一番奥の部屋で、未香の部屋の向かいだった。隣は京香姉さんの部屋である。右の手前の部屋は僕の両親の部屋として使われていて、今どいう扱いを受けているのかは分からない。右手一番奥の部屋は叔父叔母の部屋で、おそらく今は和沙叔母さんが一人で使っているのだろう。

僕は四年ぶりの自分の部屋に入って、すぐに顔をしかめた。埃っぽくて、僕は咳がでる。カーテンも閉められていて、部屋は暗い。僕は電気をつけてから、埃をかぶったベッドの上にアタツシユケースを置いて、すぐに窓を開けた。窓の外に顔を出して、僕は咳を続ける。たまには手入れくらいしておいて欲しかったが、僕の部屋は四年間放置されていたようだ。まあ、僕が帰ってくることは今後ないだろうと思つてのことだったのかもしれないが、何日か前にはそれは決定していたのだから、気を遣つておいてほしいものだ。掃除しておいてくれたなんて図々しいことは要求しないが、せめて窓は開けておいて欲しかった。

こんなところでは生活できない、と僕は思つて、すぐに部屋を出た。未香の扉が目に入り、声をかけたものかどうか迷つたが、その機会は今後ずっとあるし、たっぷり時間がある時がいいだろうと思つて、結局はやめた。

僕は階段を下りて、リビングに入る。汗をかいたので風呂に入りたかと思つていたが、京香姉さんがすでに入つてしまつているようであつた。

僕はリビングで椅子に座り、祖父母と会話をし、京香姉さんが風呂からあがるまでの時間を過ごした。

「お爺ちゃんとお婆ちゃんは、姫は二千年前から生きていると、思

う？」

祖父母になら大丈夫だろうと踏んで、僕は途中、そんな話を振った。恭輔くんのこともあるが、僕は姫に対する疑惑の念が生まれているのは事実であり、それは恭輔くんの思惑に嵌まってしまっているということなので、癪だった。

「さてねえ。だけど、姫様のおかげでこの島が平和でいられるのも事実でしょう。だから、尊び、敬う心を忘れてはいけないわ。二千年前のことなんて私達には分からないけど、それでも長い間、姫様はこの島を治めてきているのだから、ありがたいことよ」

喋るのは主に祖母で、祖父は腕組みをして僕らの話を聞いているというのが常だった。祖母の言葉は、姫の力を信じているのか信じていないのかよく分からなかった。

そこに、刺身がたくさん乗った大皿を運びながら、和沙叔母さんがやってきた。

「唯人、知ってる？ 真偽は定かじゃないけど、姫の正体は卑弥呼っていう、ずっと昔に邪馬台国という国を治めていた女王だって言うのよ」

和沙叔母さんは僕と祖父母の話聞いていたようで、そう割り込んできた。僕はその話が興味深かったので「それ、本当なの？」と尋ねた。確かに卑弥呼は大雑把に言ってしまうえば二千年前の人物だ。「だから、真偽は不明だって。唯人、卑弥呼って知ってるの？」

僕は学校の歴史の授業で勿論知っている。

「二千年っていう時期も一致するし、姫が今でも使っている呪術も卑弥呼との共通点があるんですって。卑弥呼が治めていた邪馬台国っていう国がどうなったのかにはたくさん説があつてね、ここでは、大和朝廷の拡張に伴ってこの島に移したんじゃないかっていう話らしいわ。そしてしばらくの間浮世と離れて独自に生活を続けていたのよ。卑弥呼は不思議な力を使うシャーマンで、その力の内の一つで、今も生きながらえていて、それが姫なんじゃないかって、凄い話よな」

しかし僕は話を聞きながら、それは妄想の域を出ないと思った。証拠がある話の一つもないし、年数と呪術に關しては偶然だと言える。それに、姫と女王だと意味合いが変わってくる気もするし、姫自身からそんな話が出たという訳でもないのだから。

「それと、この島。地球を緯度経度っていうので表す方法があるのは知ってる？ それによるとね、この島は東経一三九度なんですって。ひい、みい、ここいつ、でしょ？ この頭の文字を繋げると、卑弥呼、よ！ 何か使う時が来るかもしれないとも思ったのかは知らないけれど、卑弥呼は未来を読んで、将来生まれる東経一三九度に位置するこの島を、邪馬台国を移す場所に選んだんじゃないかって訳！ まあそれにしてもこの島は小さすぎるから、邪馬台国の中でも島に来たのは一部の人だけだったらしいけれど」

僕はその話には驚いた。東経一三九度のことは自分で調べて知っていたけれど、そこから卑弥呼に辿りつこうだなんて発想は全く生まれなかったのだ。

「もっといろいろあったけれど、ごめんなさい、忘れてしまったわ。確か、卑弥呼と関連深い遺跡や神社があるのも全てこの東経一三九度近辺なんだって言ってたかしら。この前村の誰かが取り寄せた小説にね、そんな感じの事が書いてあったらしいわ、東経一三九度の頭文字の件も含めてね。何だったかしら、本国の方で人気の推理小説だったかしら」

少なくとも僕は読んだことがない。でも成程、誰が東経のことや卑弥呼のことを知って、それを姫と繋げるだなんて真似ができたのかと疑問に思ったが、外から入って来た情報をベースにした訳か、と僕は一人合点した。

和沙叔母さんはまたキッチンの方へ戻って行った。そしてから祖母が「よく分からないわ」と言った。祖父は腕組をしたまま、何も言わなかった。

京香姉さんが風呂から上がると、すぐに僕も風呂に入った。ご飯の支度がもうじき終わると言うので、落ちついて入ることはできな

かったが、汗を流すことくらいは十分にできた。僕は持ってきていたジャージに着替えた。昨日ホテルでも夜に着ていたものだ。明日洗おうと思う。

僕がリビングに来ると、風呂からあがってから京香姉さんも夕食を手伝い始めたようで、出来た料理をリビングのテーブルに並べているところだった。僕も料理を運ぶのを手伝うようにする。

お刺身や野菜、それに米もすべて、自給自足で賄われたものだ。故に新鮮で、美味しそうである。

京香姉さんは、二階の未香にも、一人分の食事を運びに行った。京香姉さんは扉の前で皆と一緒に食べるように説得を試みたようだったが、失敗に終わったらしい。京香姉さん相手には会話が成立するようなので、中にいることは確かみたいだが……。話を聞けば、未香は京香姉さん以外には、返事をするこすら稀だという話だった。

未香は僕が来たことを本当はどう思っているのだろうか。僕はその点の不安が徐々に大きくなっていくのを感じていた。京香姉さんは僕のそんな気持ちを知ってか知らずか「未香、唯人にはすごく会いたがってるようなの。後で行ってあげてよ、唯人」と言ってくる。しかし僕はその言葉を実際には耳にしていないのだし、真偽について、疑念を抱かずにはいられなかった。

夕食のメニューがテーブルの上に全て揃うと、未香以外の五人で席に着き「いただきます」をした。お腹が空いていたので、僕はよく食べた。だけど、肉類がなくて、あまり満腹感を感じなかった。京香姉さんは「ああ、やっぱり島の料理は美味しいわ」と言っていて、それに異論がある訳ではないのだが、僕は四年で本国の脂っばい料理の方に慣れてしまったようだった。

「未香がいなのが残念だわ。最後に食卓に訪れたのはいつかしら、半年以上前よね。唯人、後で未香のもとを訪れるのだったら、あなたからも、せめてご飯と一緒に食べられるように説得してくれるかしら」

和沙叔母さんの言葉に、僕は頷いた。だけど、未香を上手く説得できるとは毛ほども思っていない。四年前からも若干引きこもりがちだった彼女なのだから、それは元来の性質のようなもので、今更おいそれと変更できるようなことではないのだろう、と考えている。麦茶を飲みながら僕は、もう炭酸飲料を飲むこともないのだろうと推測して寂しい気分になったが、いざとなれば取り寄せてもらえば良いとすぐに気付いた。そうしていると、和沙叔母さんがやっと両親の話題を持ち出した。

「夏雅さんと舞穂さん、残念だったわね。私達は姫から二人が死ぬことを事前に知らされていたけれど……。まだ若い唯人には酷だったわよね。二人が死ぬことを事前に知っていたと言うことは二人を救うことも出来ないんじゃないかなかったのでしょうか、姫がそれはするな、と言うからね」

「夏雅も舞穂さんも、早くに死んでしまったねえ。夏雅は良い子だったわ、頭も良かった。もう冬賀も死んでしまったし、なんだか寂しいねえ」

和沙叔母さんの方はともかく、祖母の態度は随分と冷たいと感じられた。息子が死んでしまったと言うのに、まるで他人事のように話す。涙ぐむようなこともなければ、表情が陰することもない。全く悲しんでいない訳ではないようだが、それにしても息子が死んで一日しか経っていないのに、このように落ちついて今まで通りに生活していられるのも異常だと言えた。……いや、違う、と僕はすこで思いなおす。これは、僕がこの四年間で形成された価値観に則った物言いだ。この島では違う。この島では、親族が死んだとしても、酷く取り乱れるようなことはあまりない。だから姫の命令であれば、親族を死から救うことも諦めてしまう。姫の命令が最も優先順位が高いのだ。幼い頃からこの島でそのように教育されているのだから、そもそも親族が死ぬことをあまり悲しまないことが普通であり、それに疑問を抱くことすらないのだろう。僕が親が死んでもそれほど深くショックを受けることがなかったのも、幼い頃にずっとこの島

で育てられたことが影響しているに違いない。つまり僕は、親の死は悲しむべきことだという知識があっても、親の死を悲しむ心は持っていないのだ。

「まあ、その甲斐あって唯人はまた島に戻ってくる事ができたのだし、過ぎたことをとやかく言っても仕方ないだろう」

だから僕は、祖父のその台詞にも、あまり戦慄しなかった。僕も僕で、やはり本国での一般常識とはズレた物事の見方をしているのかもしれない。

この島は電気はあって、電化製品である冷蔵庫なども取り寄せてあるのだが、テレビやパソコンといったものはない。それは、姫が許していないのだと思う。本くらいなら承認しているが、テレビやパソコンのように島の外の情報を多く取り入れることができる物は、やはりこの島においては危険なだろう。僕は四年間テレビを見ながら夕食を取る様にしていたので、少し違和感があった。

夕食を終えると、京香姉さんと和沙叔母さんはすぐに洗い物を始めた。しばらくは祖父母と会話をしていたのだが、祖母が眠いと言いだして、祖父母も結局自室に引っ込んで行くと、僕も自室に戻ることにした。

自室に入ると、まだ空気の入れ替えは完璧には行われていなくて、埃っぽいままだった。そのこともあって、僕はいよいよ未香に会う決心をした。避けられないことであるし、それに今日やらなければ未香を傷つけてしまうという危険性もあった。

僕は鼓動が早くなるのを感じながら、未香の部屋の扉をノックした。

## 唐突な死体出現

僕は鼓動が早くなるのを感じながら、未香の部屋の扉をノックした。「誰？」と中から小さな声が出て、僕は「唯人だ」と答えた。しばらくすると、ガチャリと鍵が中から開けられる音がした。扉が開く様子はない。自分で開ける、ということらしい。

僕は固唾を飲んでから、ドアノブに手をかけて、それを押した。扉が開く。すぐ目の前に、Yシャツに短めのプリーツスカートという出で立ちの未香が立っていた。未香は緊張気味の面持ちで、僕に視線を向けている。未香は僕より二十センチ程背が低いので、自然と目遣いになる。

「入って」

未香は小さくそう言った。僕が言われたままに部屋の中に入ると、未香はすぐに扉を閉めて、また鍵をかけた。「座って」と言われて、僕は未香のベッドに腰かける。未香は机の前に置かれていた椅子を僕の向かいまで移動させて、それに座った。

改めて未香の姿をじっくりと観察する。幼さの残る顔に、色白な肌、つぶらな瞳。艶やかな黒髪はショートヘアになっている。

「おかえりなさい」

未香はそう言うと、僕に向かってぎこちなく微笑んだ。僕は「ただいま」と返す。すると、しばらく未香は何も言わなくなってしまう。気まずい空気になる。

僕が何か話題はないかと考えていると、突然、未香は椅子から立ち上がった。次の瞬間、未香は僕に抱きついてきた。予想外の展開だったので、僕は身構えていたはずもなく、後ろ向きにベッドに倒れる。未香は僕の上に乗る様にしていて、肩のところに顔を埋めている。

「会いたかった」

未香は僕の耳元で囁いた。生温かい吐息が耳にかかり、僕はぞく

つと反応してしまう。昨晚の京香姉さんのことが思い出された。しかし、今、相手は京香姉さんではなく未香だ。なら、僕の対応も変わってくるのは当然だ。僕は、未香の背中に両腕をまわして、そのままぎゅうと抱きしめる。「僕も会いたかった」と、言葉を返す。そう、僕は未香のことはずっと忘れずに、この四年間を過ごしてきたのだ。だからこの思いは、強い。

「もうどこにもいかない？　ずっと私と一緒に？」

未香はすかさずそんなことを尋ねてくる。彼女も、僕に訊きたいことが四年分、それこそ山のように溜まっているのだろう。ならば僕らの久闊を叙するのは、そのような形式的にも安心感を獲得するための質疑応答こそが相応しいのだ。僕は「ずっと一緒だよ」と、未香を安心させられるように、間髪入れずに答える。すると、未香は僕を抱きしめる力をより強めた。互いの鼓動が早くなっていくのが確かめられる。

「ふふふ、嬉しいな」

未香は片手を僕の背中から脇腹に、這わせるように移動させる。

そしてそのまま、僕の体中をいやらしく撫でまわす。そうしてから、不意に僕に唇を重ねてきた。深い口づけを終えると、未香は僕から少しだけ体を離す。

「お兄ちゃん、私ね、もう子供じゃないよ」

未香は自分のYシャツのボタンに指をかけると、それを上から順に一つずつ外していく。

「四年前と違って、今度はちゃんと、お兄ちゃんのこと気持ちよくしてあげるね」

未香は焦らすようなゆっくりとした動作で、Yシャツを脱いだ。そして、僕の上着を脱がせにかかる。下の階には家族が大勢いるが、このことが露見する心配はないだろう。もしこの部屋に入っただようつしても、未香は先程、この部屋の鍵を閉めていた。

心地よい緊張感に、僕は酔いしれる。このまま未香と二人で破綻してしまつて、欲情に溺れながら、互いを確かめ合うのも悪くない。

その時、階下から、誰か女性の叫び声が聞こえてきた。

未香の手が止まる。

「お母さんだわ……」

今の声は、確かに和沙叔母さんのものだった。続けて、また聞こえた。今度も和沙叔母さんの声で、確かに「助けて！」と言っていたのだ。

「どうしたんだろう」

僕はそろそろ不審に思い始め、体を起こそうとした。不自然な気配を察知したのか、未香も何も言わずに僕の上から離れた。不機嫌そうな顔をして、Yシャツの前を手で押さえている。

すると今度は「きゃー！」と、京香姉さんの叫び声が耳に入った。そしてそれきり、人の声どころか物音さえ、何も聞こえなくなった。未香も徐々に不安げな面持ちになり、僕の手をぎゅっと握る。僕も、突如として充満した曖昧で得体のしれない不気味さに、ひどく心落ちつかなくさせられる。

「……行ってみる」

僕は立ち上がった。何があったのか分からなくて気味が悪いのなら、何があったのかを確かめてそれを解消すべきなのは、否定のしようもないありふれた正論だろう。

しかし部屋から出て行こうとすると、後ろから未香に抱きとめられた。未香は僕の背中に頬をつけて「すぐ戻ってくる？」と尋ねてくる。僕が答えようとすると、未香はすつと僕を開放して「やっぱ、私も行く」と言った。今までずっと引きこもっていた未香のその言葉は本来驚くべき対象なのかもしれないが、今の僕には何か大げさな反応を示すような余裕はなかった。

僕は衣服の乱れを直してから、未香の手を握り、部屋を出た。やはり家の中はシンとしていて、灯りのついていない廊下は薄暗い。未香は僕と繋いでいない方の手で、自分のYシャツのボタンを器用に留めながらついてくる。

階段を下りるが、相変わらず人の声はしない。玄関には、全員分

の靴が揃っていた。出掛けている訳ではないようだ。僕はいよいよ深刻な事態だと認識する。

リビングへの扉が半開きになっていて、中から灯りが洩れている。近づくと、後ろから未香が「お兄ちゃん、痛いよ」と声をかけてきた。知らず知らずの内に手を握る力を強め過ぎていたようだ。僕は「ごめん」と謝罪してから、リビングの扉を押しした。

リビングには誰もいなかった。しかし、すぐに僕はその光景の異様な点に気がつく。未香もそれを見たらしく、小さく悲鳴を上げた。リビングの床には、血のようなものが点々としていた。それを見つけたことよって、部屋に充満する血のにおいにも気付いた。

血痕は祖父母の部屋の襖の前から、扉が開けっぱなしになっているダイニングの床にかけて散っていた。僕の胸の中で、心臓が激しく暴れ出す。僕は焦燥を隠すこともできずに、急ぎ足で祖父母の部屋に近づいて、襖を開けた。

僕は息を呑んだ。布団の上で、祖父と祖母が血まみれになっていた。

仰向けで、腹がぐちゃぐちゃになっているのが分かった。どちらも生気を感じられない目は開けっぱなしになっていて、口からは舌が垂れ下がっている。大量の血液は部屋中に飛び散っていて、強烈な異臭が鼻をつく。ともかく、二人が死んでいることは、明らかだった。

未香が叫び声をあげた。僕が我に返ってから振りかえると、彼女はそこから逃げるように走り出していた。

「未香っ！」

僕はその後をすぐに追う。未香はダイニングの中に駆けこんでいった。直後に僕もダイニングの中に入ったが、その場で突然立ち止まってしまった未香に激突することになった。未香は前方向に突き飛ばされるようになって、倒れ込んだ。

未香が倒れたのは、京香姉さんの死体の上だった。

京香姉さんの綺麗な顔は、血に濡れて台無しになっていた。目は

見開かれ、口は半開きになっていて、あの屈託のない笑みを思い出すのが困難はほどに、その顔は血の気の失せた醜い有様になっていた。祖父母と同じように、腹を刃物で滅多刺しにされたようで、破損した内臓が少しはみ出している。その体から流れ出る血液は今もダイニングの床の上を広がり続けていた。

未香は慌てて京香姉さんの上から飛び退く。自分の服や顔についた京香姉さんの血を、すぐに拭い始めた。呼吸は荒くなっていて、目には涙を浮かべている。

僕は吐き気が込み上げて来て、咄嗟に口を手で押さえた。京香姉さんの姿を見ていられなくなり、僕はおぼつかない足取りで、死体から距離を置こうとする。何気なくキッチンに目を遣ったが、そこでは和沙叔母さんが血みどろの姿で倒れていた。その表情は驚愕を浮き彫りにしたまま固定されていて、もう動くことはない。祖父母や京香姉さんと同じく腹を数力所刺されていて、どろどろになった中身が外にはみ出してきてしまっている。食器が床に落ちて粉々になっていた。

僕は足元でうずくまってしまっている未香を抱きすくめる。未香の体は小刻みに震えていたが、どうやらそれは僕も同じようだった。

「未香、逃げよう」

「に、逃げるって、どうして？」

「だって、犯人は、まだ家の中にいるかも」

未香は僕に顔を向けると、黙って頷いた。恐怖故か悲愴故か、今にも泣き出しそうな顔をしている。

あの叫び声などからも、これは殺人である可能性が高い。それは、混乱しきっている僕の頭でも、考えられることだった。こういう時だからこそ冷静に物事を観察し的確な判断をしなければいけないと分かってはいたが、実際にその通りに行動することは出来そうになかった。いや、だけどここから逃げるといふのはそう悪くない考えだと思う。こんな場所にいつまでもいれば、僕も未香も、壊れてしまふ。そこで僕は、助けを呼ぶということを目指した。助けを呼ぶ

相手を必死に思い出そうとするが、思考は空回りするばかりで、一向にそれは成功しない。

その時、不意になつたチャイムに、僕は心臓が止まったかのような錯覚を受けた。

誰かが、訪ねて来たのだ。僕はどうすればいいか分からなくなる。これは、出るべきなのだろうか？ しかしこの家にはまだ犯人が……、いや、先程から僕は何を言っているのだ、誰もいる訳ないじゃないか。そもそもこれは殺人事件か？ どうやら殺人事件なのは間違いない。だけど犯人がまだ家の中に潜んでいるという考えは正しいのだろうか。僕と未香は、まだ生きている。犯人は僕と未香を殺すことは目的ではないのだろうか。何故四人は殺されたのだろうか。「お兄ちゃん、どうするの？」

未香の言葉が耳に入つて、僕は意味のない思考の繰り返しを中断する。そうだ、今、来客があつたんじゃないか。ピンポン、とまたチャイムの音は家に鳴り響いた。もしや、この来客というのは犯人ではないだろうか、いや、それは意味が分からない。何故犯人が僕の家のチャイムを鳴らす必要があるのだ。僕らをおびき出すためか？ それにしてはチャイムを鳴らすというのは、狡猾とはとても呼べないように思える。そうだ、助けを求めるべきじゃないだろうか。僕はそう考え及ぶと、即座に立ち上がった。未香は足に力が入らない様子だったので、手を握つて手伝うことにする。そして、未香を連れて急ぎ足で玄関に向かつた。

三度目のチャイムが鳴つた時に、やつと玄関に到着する。僕はキョロキョロと辺りを警戒しながらここまでやってきたが、僕と未香以外に生きている者の姿は確認できなかったし、気配もなかった。僕は扉を開けようとして、鍵がかかっていることに気がついた。

「ん、待てよ」

鍵がかかっているというのは、おかしいように思われた。鍵がかかっているということは、犯人がまだこの家から出て行っていないということだ。扉の横に置かれた小さな机の上に、この家の鍵が三

つあることを僕は確認する。確か、この家には三つしか鍵はなかったはずだ。ならば、犯人はまだこの家の中にいるのだろうか。僕ははっとして、今歩いてきた廊下の床を見渡した。僕と未香が歩いてきたことで、足の裏についていた血が付着しているが、リビングにあつたような血痕は見当たらない。犯人は殺害を行った後に、まだここには来ていないのだ。……ならば、犯人は窓から出て行ったのではないだろうか？ 殺人犯が、正面の扉から出て行かなければならない道理もない。

僕は波のように押し寄せる疑問の数々に頭を圧迫されているかのような心持ちだったが、そうしている間にも、四回目のチャイムが鳴らされる。

僕は未香の姿を見た。彼女の服には、京香姉さんの血がべったりと付着している。僕の方は、未香を抱きしめた時に服の袖に付着しただけだ。

結局、上手く思考がまとまる兆しはない。僕は結局、今ここでは助けは求めないことに決めた。慎重に、状況を整理してからの方が助けを呼ぶにも効率的だと考えたのだ。そして何より、僕はあることを危惧していた。それは、僕と未香が犯人だと疑われることだった。

「未香、少しだけ、離れて。扉を少し開けた程度では、見えないところまで」

僕はそう注意してから、鍵を開けて、扉を開いた。すぐ目の前に知らない男が立っていた。その顔には汗が浮かんでいて、その場で足踏みをせわしなくしているところからも、焦りと緊張が窺えた。

男は僕を見ると怪訝そうな顔をした。

「あの、すみません、あなたは誰ですか？」

「神宮唯人です。神宮家の時期頭首です」

僕はなるべく落ちついた口調を心がけたが、声が変に高くなってしまうような気がした。

「唯人くんっ!?! あっ、本当だ! え、どうしてこの島に帰って

きているんだいっ!？」

男はどうやら、僕を知っているらしい。しかしよく考えてみれば、この家に訪ねて来られる時点でそこそこ上流の家の者なのだろうか、序列三位の家の島をかつて追放された息子を知っているのは、当然のことだった。

「あつ、すみません、御挨拶もなしに失礼な真似をするようですが、許してください、非常事態なのですっ!」

「どうしたんですか?」

「すぐに来てくださいっ! 姫が、大変なのですっ!」

男はそれだけ言うと、一礼して、僕に背を向けて走り出した。実は男の姿を見た時に、やはり助けを求めべきだろうかと僕は考えたのだが、それは結局できずに終わった。

「どうしたの、お兄ちゃん」

未香は僕に歩み寄ってくる。やはり立っているのは辛いようで、すぐに僕にもたれかかってきた。僕はそれを、抱くようにして支える。

「分からない。姫が、どうかしたみたいなんだけど……」

遠くから村人達が騒ぐ声が出ている。僕と未香は、家の外に出た靴を履いていないことに気付いたが、そんな些事は、すぐにどうでもよくなった。

僕の家からは、山の中腹、要は姫が住んでいる社がある地点を見ることが出来る。

見ると、その地点から炎が上がっていて、黒い煙が天に向かって立ち上っていた。

## 姫殺しの濡れ衣

「ねえお兄ちゃん、あそこって……。火事？」

未香が僕に続いて家から出てくる。僕はあの男の言う通り、姫のところへすぐに駆け出そうかとも思ったが、すぐに思いとどまる。

「未香、とにかく、この家から離れよう。姫のところに行つて、状況を確認する。家の状態も誰かに……。統吾さんにも話して、助けを呼ぼう。僕らは、今も京香姉さん達を殺した犯人に、狙われているかもしれないんだ」

「う、うんっ、そうだね。分かったよ、お兄ちゃん」

僕は血に染まった未香のYシャツにまた目を遣る。

「事情を話せば分かつてもらえるんだし、いいか。未香、靴を履いて。すぐに行こう」

こんな状況で、我ながら随分と冷静に思考できているものだと思つた。ただその後から考えれば、きつと今だつて冷静だとはとても言えず、この判断も間違つたものであつたと痛感することになるのかもしれない。しかしそれでも、僕はこの家をすぐに出たくなつた。一瞬、家の窓が閉まつているかどうかを確認しようとも思つたが、やはりそれは危険なことのように思えた。

僕も靴を履いて、未香と共にまた家を出る。僕らがない間に誰かが家に上がり込むことなんてないとは思つたが、用心して僕は扉の鍵を閉めた。これには犯人が何らかの証拠を残しているのに気付いて戻つてきたりできないように、という目的もある。

引きこもりの未香は走ることができそうになかつたので、僕は未香のペースに合わせ、歩いて姫の社の方向へ歩いていく。燃え盛る炎は月明かりだけが照らすはずの島をうつすらと赤く染め上げている。僕らのいる地点まで熱気が届いているように感じた。

「姫は、もう避難したのかな？」

「そうだね。姫なら、予めこのことは知っていてもおかしくないは

ずだ」

でもそれなら、食い止めることだってできたはずだ。それに関わらずこうして事が起きてしまっていると言うことは、昼間の姫の言葉借りるなら、人の行き死にに干渉しないようにするため、だろうか。姫ではない誰かが、この火災で死ぬ予定で、姫はそれに干渉しないように火事が起こることは受け入れ、自分だけは助かる様にしている、と。

見ていると、炎が山全体に広がって行くことはないみたいだった。思えば、社から周りを囲む木々までは距離があつたし、今のところ火は社を灰にするばかりで、森には燃えうつっていないのだろうか。消火技術がないこの島では、山火事が最も恐れるべきことだから、その点では安心だ。

いずれにしても、こんなに時間が経ってしまったては、もう社は崩れてしまっただろう。姫が当分どこに住むのか、それは少し気になることだった。

姫のもとへ上がる階段の下は、村人で溢れかえっていた。島の住人全てが一堂に会しているのではないかと思うほどだ。僕と未香はなんとか人々を掻き分けるようにしながら前に進んで行く。やがて最前列のあたりにやって来ると、まるで野次馬を制する警察官のよう、村人達を足止めしている人達がいた。この人数で階段を上がればパニックになることは避けられないので、これより先に進めるのは序列が上の家の者だけなのだろう。僕は両手を広げて村人達を食い止めている男に話しかけた。

「先に進ませてくれますか。神宮家の者なんですけれど」

「ああ、神宮様ですか、勿論でございます、どうぞお進みくださいませ、失礼ですが、お名前を教えてくださいませるか？」

四年ぶりに島に帰ってきた僕と引きこもりの未香では、顔を知られていないのも当然で、すなわち少々訝しがられるのも道理だった。「姫宮唯人と、姫宮未香です」

男は僕の名前の方は知らないようだったが未香の名前を聞くと、

やっと表情を柔らかくした。

「分かりました。どうぞ」

「ありがとうございます」

「いえいえ」

僕と未香は階段を上がる。「お兄ちゃん、もう私、疲れてきちゃったよ」と運動不足の未香はたった少し歩いただけですでに息を荒げていた。しかし、ここに一人放置していく訳にもいかないので、もうしばらく頑張ってもらうことにする。僕は未香の髪を撫でて、励ましの言葉を口にしながらも、姫のもとを目指した。この辺りになると炎の熱気が伝わってきていて、頬を汗が伝うのが分かった。僕が握っている未香の手も、とつくに汗ばんでいる。

階段を上り終え、僕らは現場に辿り着いた。火の勢いはかなり弱まっていた。やはり、周りの木々に燃え移るようなことはなかったらしい。社は崩れて大部分は灰になっていて、それを取り囲むように複数人の村人達がいた。彼らは何やら大騒ぎしていて、僕は事態を把握しようと、その声を拾うように努める。

「これはどういうことだ！」

「大変ですよ、これは！ 一体、我らは何をすればいいのだろうか！」

そしてそんな声の中、僕は確かに聞いた。

「姫が、死んだ！」

僕はその言葉が何を意味するのかを瞬時に理解することはできなかった。何故なら、それは全く以って予想外の言葉で、にわかには信じられない内容だったからだ。

だが村人達の視線の先に目を向けて、僕はやっと事態の深刻さを把握する。

未だ炎に囲まれて倒れている社の柱の下から、人の体のようなものが半分、覗いていたのだ。つまりその体は下半身を柱の下敷きにされていて、今は炎の中ではなかったが、つい先程までは火だるまになっていたらしく、黒こげだった。しかしそれでも、それが人間

で、どうやら女の子らしいことは判別できた。

僕と同じくらいの年代の女の子らしい、体だ。ここからではその顔を確認することはできないが、どうせ炎に焼かれて原型など留めていないのだろう。

社の中には姫しかいなかったはずだ。その状態で火がつけられたのなら、柱の下敷きになることができるのは、姫しかあり得ない。

姫は逃げてなどいなかったのだ。

誰かの泣き声が聞こえる。見れば、血に膝をつき、絶望のあまり頭をかかえて嘆いている人が何人かいる。それはそうだろう、彼らにとって姫は自分達が信仰して止まない、神のような存在なのだから。彼らが生きる意義も意味も、すべて姫に繋がっていて、姫がいなければ、彼らの存在には意義も意味も根こそぎなくなってしまふのだから。

だけど僕はまだ、その焼死体が姫だとは、一部で信じられずにいた。あまりに突拍子のないことが突然にいくつも束になって僕に押し寄せてきて、僕の儂い体はとくに押しつぶされそうになっていたのだ。祖父母と京香姉さんと和沙叔母さんが一気に殺されたことだけではない、両親が交通事故に遭い、それを予知していた姫の使いとして京香姉さんが僕を島に連れ帰るためにやって来たことも含めてだ。そんなことが、ここ二日間で起きているのだ。人間が正常な状態で処理できる物事の限界量をとくに超えてしまっている。

その時だった。僕がまだ呆気にとられてその場で立ちつくしている、その時だった。

「あいつだ！ あいつが犯人だ！」

そんな声が、響いた。遠くで誰かがそんなことを叫びながら、こちらに人差し指を向けている。こちらに、というより、僕と未香に向かつて、だ。

「誰だ、お前は！」

「知っているぞ、今日島に来ることになっていた外からの客だ！」

「部外者だ！」

皆が一斉にこちらに振り向き、口ぐちにそんなことを叫ぶ。ヒステリックに僕らを非難する。

「ま、まっつくだ、さい、ち、違」

僕は慌てて釈明しようとしたが、そんな言葉は、彼らの耳には届かない。

「早くつ、取り押さえる！」

誰かが叫んだ。直後、複数の人が僕らに向かって走り出した。僕はすぐに、逃げなければいけないと直感した。「未香、逃げるぞ！」なんて言った頃には、すでに階段を駆け下りていた。未香の手を強く握って、決して離さないようにしながら。背後からいくつもの足音が迫る。僕らを捕まえる気だ。昼間の姫の言葉を僕は思い出した。「この島に外から客が来る、という情報が島全体に行きわたっているの。上位四家にはあなたを敵視しないように姫宮唯人というあなたを伝えているけれど、今現在、大体数の者の認識では、あなたは部外者」そうだ、僕は部外者なのだ。しかも、そんな僕が来た当日に、こんなことが起こった。彼らは火事が起きた時にすぐに「今日島には客が来ているはずだ」ということに思い当たったのだろう。だから、見知らぬ僕の姿を見た時に、すぐに犯人だと怒鳴ったのだ。思えば、僕も昼間は京香姉さんと、決してこそこそすることなく村中を歩きまわっていた。多くの人々の目に留まっていた。ずっと「部外者」の存在をアピールし続けていた。しかし、統吾さんや紀久夫さんは僕のことを知っているはずだ、姫宮家の跡取りだと知っているはずだ、ならば捕まっても僕の事を証言してくれるはずだ、二人は序列一位と二位の家の者である、信用される。いや、本当にそうか？ 統吾さんと紀久夫さんも、僕が犯人だと考えているのではないか？ 信用できるのか？ 僕は四年間島の外にいて、姫の敵である可能性も考えられるに決まっている。だけど、ここで逃げてはまるで犯人だと認めたいではないか。

僕はぐるぐると思考を巡らせながら、階段を下り続ける。後ろからは村人達が何やら怒鳴り散らしながら、僕らを追ってくる。その

恐るべき雰囲気が、僕に逃げることを強いるのだ。このままでは、捕まった直後に殺されるかもしれない。もう何がどうなっているか、うすればいいのか、僕には何も分からなくなってしまうている。とにかく、時間が欲しい。その時、明かりもない真つ暗な中を焦って階段を下りていたのだから当然だが、未香が転んだ。手を繋いでいた僕も体勢を崩し、そのまま前へ転倒する。背中かどこかを思い切り階段の角に打ちつけ、その勢いのまま、階段を転がり落ちる。未香と手が離れる。体中に痛みが駆け巡り、僕はどうやら悲鳴をあげているようだった。やっと僕は階段の途中で回転をとめることができた。すぐに立ち上がろうとしたが、体に電気が流れるような感覚がして、叶わなかった。「未香！」と名前を呼ぶと、上の方向から「お兄ちゃん！」と声が返って来た。僕は少し安堵してから、痛みを耐えつつ立ち上がる。未香は僕ほど転がらなかつたらしかつたが、相当なダメージを追ったようで、今にもまた転びそうな足取りで僕のもとへと階段を下りてくる様子が、暗がりの中うつすらと見えた。僕らを追いかける村人達の罵声は、少し遠くなったように感じられた。転がり落ちた方が、速かつたのだろう。

僕は再び未香の手をとり、階段を駆け降りる。途中でまた転びそうになったが、なんとか踏みとどまった。

「お兄ちゃん、私もう駄目っ、死んじゃうよ」

「未香っ、しっかりしろ！」

僕は口調が乱暴になってしまったことを、言った後で後悔する。どうやら僕は混乱のためか相当苛立っているようだった。しかしそれを未香にぶつけるだなんて、最低だ。一瞬、何故自分が階段を駆け下りているのか分からなくなりかけた時は、本気で戦慄した。これほどまでに思考回路が破綻しているとは……。

階段を下り終わると、前方には隙間なく村人達がたまっていた。どうするべきか逡巡していると、後方から「そいつだ！ そいつが姫を殺したんだ！ つかまえてくれ！」と大声がした。村人達の視線が、一斉に僕と未香に集中する。

「捕まえる！ 姫殺しだ！ 罪人だ！ そいつらは部外者なんだ！」  
また声がして、何人かの村人は前方からも僕らへ向かって駆け出した。僕と未香は敵に挟まれたのだ。僕は咄嗟の判断で、右側に体の方向を変えて、未香の手を握ったまま走り出す。未香の体力は限界なようで、速度は随分と遅い。このままでは捕まる。

僕は森の中に入って行った。この中を走り続ければ、追手を撒くことができるかもしれない、というより、追手を撒ける確率が残っているとすれば、それはこの順路だけだろうと判断したのだ。

「お兄ちゃん、もう無理だよお、走れないよお」

未香は泣きだしてしまっていた。だけど、泣いているのは未香だけではないということにやっと気がつく。僕もまた、泣いていたのだ。その意味は分からなかったし、考えることも今の状態ではままならなかったけれど。

僕はとにかく前へ前へと森の中を走り続けた。雑草が伸びきっていてひどく進みづらかったし、葉や木の枝で肌を数箇所切ったけれど、それでも逃げ続けた。

やがて、未香がとうとう倒れてしまった。それに続いて、僕も体に力が入らなくなって、その場に倒れた。土のおいがした。人の声は、聞こえなくなっていた。

## 姫殺しの濡れ衣（後書き）

いよいよストーリーが大きく動き出してきました！

風呂敷を広げすぎな感もありますが、きちんと全て収束していくのでご安心下さい。

感想や評価をくださると嬉しいです！

お願いします！

## 神谷家への長い道のり

僕はいくらかの時間、気を失っていたらしい。意識が覚醒すると、そこは森の中で、隣では未香がうつ伏せの状態でまだ眠っていた。僕は何故この状況に至ったのかについてを思い出し、ひどい倦怠感を覚えた。これからどうすればいいのか、は思考しなければならぬ。いが、もう今の僕は何か複雑なことを考えることが億劫になっていたのだ。疲れて眠ってしまったている未香を起こすのも気が引けて、僕はしばらくその場で途方に暮れることになった。夏の夜の森は蒸し暑くて、虫の音がうるさかった。

階段で転倒した時に打ちつけた箇所や、逃走中に草や木の枝で切った箇所には痛みがあった。しかし治療する術もないし、耐えられないと言うほどではなかった。放置する。未香の体に何か大怪我がある可能性にも思い当たり確認しようとしたが、この暗闇の中ではその作業は叶わないということがすぐに分かって、やめた。

もうと言つべきかやつとと言うべきか、時間の経過が分かりづらくて判別つきかねたが、やがて未香は目を覚ました。未香は最初状況を把握することができずに怖がったので、僕はすぐに彼女を抱きかかえて安心させた。未香もすぐに京香姉さん達が殺されたことや姫が死んだことや村人達に姫殺しの容疑をかけられて追われたことを思い出したようで、彼女は泣きだしてしまった。僕は必死に彼女をなだめる。

「お兄ちゃん、これから、私達、どうするの？ 捕まって、殺されるの？」

未香は僕の胸元に顔をこすりつけながら、震えた声で尋ねてくる。「大丈夫、そんなことにはならない。だから、安心して。こういう時こそ、落ちつかないといけない。僕達は姫のことなんて殺してな

いんだから、すぐに容疑は晴れるさ。すぐに、本当の犯人も見つかる」

言いながら、この言葉は自分を安心させるためでもあると、嫌でも自覚させられた。だって、僕の言葉には確証なんて微塵もなく、僕らに都合が良い様に空想されただけの楽観的な理想でしかなかったからだ。

この島に警察はない。また、外からやってくることもない。この島では犯人を告発するのに、証拠なんていらぬ。姫の判断に村人はただ従うのみだったから、証拠なんてわざわざ求める必要性が生まれないのだ。姫が死んだ今でも、証拠を得るといふ考え方は生まれないに決まっている。そして現時点で多くの村人は僕と未香を部外者として姫殺しの犯人だと確信しているのだ。捕まれば、処刑される。

統吾さんに助けを求めるのも、随分とリスクが高い。彼は僕と未香のことを知っているけれど、僕が姫宮家の人間だからという理由だけで容疑を晴らすとは考えにくい。味方に立ってくれそうな京香姉さんも和沙叔母さんも祖父母も、皆、殺されてしまった。

そこまで考えた時、僕はある可能性に気がついた。

姫を殺した犯人は、初めから僕に罪をなすりつけるつもりだったのではないだろうか。それに関係して、京香姉さん達も殺されたのではないだろうか。犯人が一人なのか複数なのかは知らないが、とにかく姫殺しと京香姉さん達の殺害は、繋がっている。

だからこそ、僕が島にやってきて、まだ皆の認識では部外者である今日に、犯行が行われたのだ。

「畜生っ！」

僕は視界が全て真っ赤に染まる気がした。頭に血が上り、興奮状態に陥り、身の内に湧きあがる憤慨をどこかにぶつけずにはいられなくなった。僕は近くにあった木の幹を殴る。全身全霊の力を以つて、木に怒りをぶつける。殺してやる、僕の中でそんな声がある。それは僕自身の発言だ。心の声だ。要は思考だ。僕は怒っている、

なのに怒る相手であるはずの犯人は誰だか不明だ、こんな悔しいことがあるか、こんな悔しいことがあって堪まるか。僕は何度も木を殴る。一向にストレスは発散されない。こうして木を殴り続けないと、あまりの激情に身が張り裂けそうなのだ。

「お兄ちゃん、やめてっ！」

僕はやっと、その声に気付いた。未香が、後ろから僕を取り押さえるようにしていた。未香はやはり泣きながら、懇願するように僕に「やめて！」と何やら説得している。そして僕は、自分の拳に痛みがあることを認識した。見ると、皮膚が破れて拳は血まみれになっていた。

僕は木を殴ることをやめて、未香の頭を撫でる。「ごめんね、もう大丈夫。ありがとう」と僕は未香に謝罪と感謝を並べて述べた。

落ちつかなければいけないと自分で言った矢先にこれでは、情けない。僕は深く反省する。

これからのことを考えなければならない。

まずは、今の状況を確認することが重要だ。今もなお僕らは追われる立場なのか、それとも疑いはすでに晴れているのか。しかしそれを知るには村の者に接触しなければならぬし、話を盗聴するにも、村に出て行かなければならない。とするならば、当然見渡しが良い場所ではなくて、あの住宅街のエリアに行くことになるだろう。僕の今の持ち物は、なしだ。携帯電話などの道具は自分の部屋に置いてきてしまっている。今から戻れば、僕らの家には村人達がいるだろう。そして、あの家の惨状を確認しているはずだ。僕は京香姉さんと昼間ずっと行動を共にしていたのだから、村人達は僕を探すにあたって必ず神宮家には初めに向かうに決まっている。もしかしたらすでに統吾さんや紀久夫さんの証言で僕が神宮家の跡取りだということは知られているのかも分からない。……そこまで考えて、僕は改めて痛感する。やはり、まずは情報収集をしなければならぬということ。

「行こう、未香。ずっとここにいる訳にはいかないだろう？ 隠れ

続けるって言ったって、僕らには食糧も水もない」

僕は自分の決意が揺らく前に立ち上がった。体の節々に痛みがはしる。

「行くって、村に戻るってこと？」

「うん」

「だけど、見つかったらきつとただでは済まないよ。私達、姫殺しの濡れ衣を着せられてるんだよ？」

「勿論、隠れながら行く。情報収集と、それに伴った行動。どちらにしても食糧の確保。こんな村だ、きつと鍵をかけてない家もあるだろう」

「盗むってこと？」

「そうだよ、姫殺しなんて大罪に比べれば、そんなの気にするまでもないし、手段を選んでられるような場合じゃなさそうだ」

僕は未香の手を握った。未香は唇を噛みしめて眉を寄せて、悩ましげな表情をしている。僕は未香に「大丈夫だよ」と言って、安心させようとする。

未香は僕から目を逸らして、不承不承といった感じに小さく頷いた。

未香が立ち上がると、僕らは早速歩き始めた。自分達が歩いてきた方向に大体の見当をつけて、進む。僕らが来た方向は草が踏まれた訳だからよく見れば分かったし、そもそも地面はなだらかな傾斜があるのでそれを下る方向へ進めば、村には出るはずなのだ。

今が夜の何時頃なのかは分からないが、陽が昇るのはまだまだ先だろうと僕は歩きながら思った。

僕はこれからすることを一旦整理することにする。まず、村に出て、住宅街の中に入り、隠れつつ村人達の会話を盗聴し……。

そこで僕は、認めざるを得なくなった。この計画は、破綻している。出来るはずがない。成功率が低いばかりでなく、意味があるとも思えない。しかし、ずっとこんな森の中に身を潜めている訳にはいかないし、何度も繰り返し返すようだが情報を集めないことには今後

の出方が何も分からない。

村に行くのは決定だ。ただ、盗聴だの盗みだの、そんなことをやるのは馬鹿げている。未香は体力も限界が近く、休養が必要だ。僕もそれは同じだろうし、一旦頭を冷やす必要もある。落ちつける場所が必要だ。でも、姫宮家に戻ることはできない。

「そうか」

僕は一つの選択肢に思い至った。

今、僕の頭の中に浮かんでいるのは、神谷恭輔くんのことだった。姫に並みならぬ反抗心を抱いていた恭輔くんならば、僕と未香を村人に差し出すようなことはしないだろう。さらに序列二位神谷家の恭輔くんは、かなりの情報力を持っているに違いない。これほどまでにこの状況で頼るに相応しい人間は、この島には恭輔くんしかいないだろう。

「未香、神谷家に忍び込もう」

「え、どうして？」

僕は未香に、恭輔くんについて僕の知るところを全て説明する。未香は話を聞く限りにおいては恭輔くんのが苦手そうだと言っていたが、これ以上に手はないことは明白だったので、承諾してくれた。それに、恭輔くんに助けを求めようなんてこと、僕だってあまり快いとは言えないのだ。だからここは「助けを求める」というより「利用してやる」くらいのスタンスでいた方が、僕も未香もやりやすいというものだろう。恭輔くんは自らの知能を過信している自己顕示欲の塊みたいな男だが、僕らよりも年下なのだから。

この島には電気が通っているといっても、村に電灯などがそう多くあるということはなく、人目を忍んで村に侵入することはそれほど難しいことではなかった。計った訳でもないからこれは体感的な予測でしかないけれど、森からは歩いて三十分程度で出られたのだ。それでも、無我夢中の内に結構奥まで逃げていたものだ。あの大量の村人達を撒いていたのだから、不自然な話ではないのかもしれないけれど。

この島では夜は各自自宅に帰っているのが常なのだが、この事態の中では、皆外に出払っているらしかった。道路を歩く村人達はあるをキョロキョロと見回しながら、どうやら僕と未香を探している様子だ。

住宅街らしく人家が密集しているエリアに僕と未香は入っていたので、神谷家は普通に歩けば五分程度で辿りつける場所である。しかし村人達の監視があるため、思うようには進めなかった。

誰かも分からない人の家の庭に身を潜め、道路に人が少なくとも近くにはいなくなったのを確認してから、道路に出て神谷家を目指す。ここの動きは堂々とするようにした。遠くから見られても、怪しく見られないようにだ。辺りも薄暗いから、堂々と歩いていれば、すぐに二つの人影を僕と未香だと認識することは避けられそうだと思うた訳である。

神谷家への行き方だが、最短ルートを通ることはやめにした。何故なら、そのルートは途中で神宮家の前を通らなければいけなかったからだ。今頃、神宮家には多くの村人達が入りしているのは、どう楽観的に見たところで間違いないだろうと思われる。

途中で前方から人影が近づいてくるのを見つけて、僕と未香はまた隣にあつた家の庭に逃げ込んだ。しばらく植木の陰から道路を窺っていると、二人の村人がそこを通過した。二人は何やら話をしてきたが、その内容を聞きとることはできなかった。僕は時間をおいてから、再び道路に出る。後方の遠くにうっすらとこちらに向かつてきているらしい人影が見つけれられたが、後ろだし、神谷家はあと一つ曲がり角を曲がってすぐなので、僕らは構わず歩き出した。

もう少して、神谷家だ。もしかしたら恭輔くんは家にいないかもしれないが、それでも恭輔くんの部屋に上がりこんでおく。扉に鍵が閉まっていた場合は、庭に隠れて恭輔くんの帰りを待つしかない。扉に鍵が閉まっただけで恭輔くんが家の中にいた場合は……、と、そんなことを考えながら最後の曲がり角を曲がったところで、

「あつ……」

すぐ目の前に一人の男がいた。いや、二人だ。男のすぐ隣に一人、女がいる。

僕は咄嗟に振り返って走り出すようなことが出来なかった。何故か、足の裏が道路とくっついてしまったかのように、動かすことが叶わなかったのだ。全身から一気に汗が噴き出す。だけど、村人二人は大声を出すようなこともなければ、僕らを捕まえるために飛びかかってくることもなかった。

「えーっと、君達は誰だい？」

男はそんなことを言っている。……どうやらこの二人は、僕らが姫殺しの容疑をかけられている二人組だとまだ分かっていないようだ。確かに、僕の姿は昼間に多くの村人に見られたが、全員に見られていた訳ではないのだし、僕と未香の容姿については話を少し聞いただけ程度の村人も相当数、いるのだろう。そしてこの場合は幸い、この二人は僕らを直接見たことがない村人だったようである。ただ、少年少女二人組という僕らが「話に聞いている姫殺しの罪がある二人組」なのではないだろうか、とは一応疑っているようで、二人とも少し眉を顰めて僕らを矯めつ眇めつしている。

「冬月直弥と冬月流々です。ところで、姫殺しの犯人はもう見つかったんですかね？」

僕は本国で知り合った兄妹の名前を、偽名として使った。あえて姫殺しの単語を出して、相手が僕らに向けている疑念を抑えようとしたが、あざとすぎる気もした。しかし相手はそれであっさり僕らを信頼してしまったようだった。警戒を解いた様子が見えていくに分かった。

「分かりません。見つかったんなら、もうこうして眠い目をこすって村中を歩き回ることもしなくていいんですけどね。それにしても僕は不安なんですよ、姫が死んでしまって、もうこの村はこれからどうしたらいいのやら」

「そうですね。姫の代替が務まる人間なんていないでしょうし。大きく村が変わることになります」

「さつき聞いたんですけどね、島の外には姫が死んだことは伏せるようですよ。日本政府、でしたっけ？ 細かいことは僕のような下級の者には分かりませんが、姫の死は隠匿されるんです。そういうことなら、代理を立てるといふ解釈でいいんじゃないですかね」

「へえ、そうなんですか」

その時、男の隣にいた女が口をはさんだ。

「ちよつと、いつまで話してるのよ。琴吹さん家に行くのでしょうか？ 遅れたら大変なことになるわ」

「ああ、そうだね」

女は何やら焦燥を隠せずにいるようだった。この遣り取りを見るに、二人は夫婦なのだろう、と僕は考えた。

とにかく、この場はなんとか大事にならずに済みそうだった。僕は胸を撫で下ろす。神谷家はもう見えている。

その時、後ろから大声がした。

「いたぞ！ 姫殺しだ！」

僕はハツとして後ろを振り向く。僕より大分慎重の高い大男が、僕を見下ろすようにして立っていた。男は僕を捕まえるために動く距離は二メートルも離れていない。未香の手は握ったままだ。僕はすぐにまた前方を向いて走り出した。夫婦はまだ事態を上手く把握できずにいたので、捕まらずに通り返れることができた。

「捕まえる！ いたぞ！」

村全体に響き渡るような大声で、大男は叫ぶ。もう多くの村人に僕らの位置は知られてしまっただろう。きっと今に、前方からも多くの村人が声を聞きつけてやってくるに違いない。

神谷家はすぐ近くだ。しかし、今逃げ込めば、目撃されてしまう。それでは駄目なのだ。僕は、もう打つ手がないことに気がつく。どうしたって、捕まることは避けられない。僕は失敗してしまったのだ。あんな男とぺちやくちやお喋りしていないで、無視してすぐに神谷家に向かえば良かったのだ。後方から村人が来ていた事は、知っていたじゃないか。本当に無能だ。先見の明が皆無の、役立たず

だ。広い視野で物事を見ることができない。主観的に、その場しのぎを繰り返してきたような人間は、やはりこういう重要な局面でいつだって失敗するのだ。いや、何を考えているのだ僕は。今は後悔なんてしている場合じゃないだろう。現状を打破する方法を考えろ、と僕は自分に言い聞かす。ここでいつも諦めてしまうから、僕はいつまでたつても成長もできずに同じ失敗を永遠に繰り返してきたんじゃないか。

今神谷家に入ることにはできない。しかしこのまま道を進めば、村人に出くわす。後ろからは大男が迫っている。仮に大男の横を抜けられても、やはりこの場所に今村人達は向かっているに違いない。全員から逃げ切ることなど、できるはずがない。それでは向こう見ずの能無しもいいところだ。

ならば、これならどうだ？ 道を通らなければいい。前方にも後方にも神谷家にも行けないのなら、それ以外に行けばいいのだ。単純にして論理的な思考だ、極度の混乱状態にあるのによく考えたぞ、自分を久々に褒めたくなった、グレイト。

僕は左手にあった人家に飛び込んだ。未香は突然の方向転換のために転びそうになったが、すぐに体勢を立て直して僕についてくる。僕が逃げ込んだのは神谷家の向かいにある家だった。神谷家からは離れてしまうことになるが、それも仕方ない。背に腹は代えられない、急がば回れ、どちらも若干使い方が違うが、そんなことはどうでもいい。

僕は庭を抜けて、家の敷地の奥へ進む。僕の首の下までの高さのブロック塀に隔てられた隣家が見える。僕は未香から一旦手を話して、ブロック塀をよじ登る様にして、越えた。未香も僕に続くこうとする。乗り越えるのが厳しそうだったので、僕が手を貸す。未香もブロック塀を乗り越えると、またすぐに走り出す。その家から抜け、道路に飛び出した。近くに人影があるかどうかも確認せずに、そのまま向かいの家の敷地内に入る。奥まで進むと、またブロック塀だ。先程と同じようにしてここも乗り越える。そして、今回は動かずに、

その場にしゃがみこんだ。

「はー、はー、はー」

僕も未香も息を荒げていて、顔も真っ赤だ。声を潜めなければならぬので、僕らはすぐに呼吸を落ちつけようとする。

まだ心臓は早鐘のように動きながら、全身に血液を送り続けている。酸素だ、酸素が不足している。すぐにこれからのことを考えなければならぬ。ブロック塀を二つ越えた程度で追手から逃れられただなんて、あるはずがない。すぐにここにも人が来る。

「お兄ちゃん、怖いよ。もう私、走れないよ」

見ると、未香は泣きだしてしまっていた。僕はすぐに未香を抱きしめて、背中をさすってあげる。未香はとうとう嗚咽を漏らしはじめてしまった。

そうだ、僕は僕だけを助けられればいいのではない。未香のことを護ってあげなければならぬのだ。この、僕が大好きで、四年間ずっと気にかけてきた、一人の少女を、護ってあげなければならぬのだ。僕にはそうしたい気持ちも、そうしなければならぬ責任も義務もある。冷静な思考をしる、求められるのは思考力と判断力。基本だ。

この状況になっても、神谷家に行くのをやめようとは思えなかった。それはやはり必要なことだし、避けられないことだし、唯一今できることだ。しかし、今すぐにあの場に戻るなんて考えるほど、僕は思慮の浅い人間ではないつもりだ。

ならば、この場を離れ、安全度の高い場所で身を潜めてから、今みたいに人家の中を通って神谷家まで行くのが得策だ。まさか見つかった地点に僕らが再び戻ってこようなんては、村人達も思わないだろう。時間が経てば、あそこに村人が集中しているということはない。なくなる。

僕は未香から身を離して「少し遠くに行こう」と優しい口調で告げた。未香はここで駄々をこねるようなことはなく、涙ももうとまっていた。二人で立ち上がった、また道路に出る。そこは住宅がま

ばらになつてくるあたりだった。近くに人影はない。僕らは壁に背中をつけるようにしながら移動していく。やがて適当な家を見つけ、僕らはその庭の奥に、隠れる。

「ここにしばらくいて、また神谷家に向かおう」

「もう私、眠いよ、お兄ちゃん」

「もう少しだけ、我慢して。神谷家についたら、安心して眠れるから」

「うん」

だけど、恭輔くんが僕らにそこまで良心的に接してくれる確証はないのだった。

どのくらい時間が経過したのかは、時計を持っていない僕らでは分からなかったが、一時間程度は経ったのではないかと思つて、再び行動を開始することにした。未香は眠ってしまったのだが、あまりのんびりしていると陽が昇ってしまったって動きにくくなつてしまつと僕は危惧したので、起こした。

僕はここに来るまでの道のりを引き返すようにした。そして今回は無事、神谷家に到着することができた。この中に、恭輔くんはいらるだろうか。恭輔くん他の住人がいることはないだろうか。おそらく姫に反抗心のある恭輔くんでは、姫殺しの犯人を搜索するのに村を駆け回っているということはないだろう。それは、神のみぞ知るところだった。

僕はなるべく音をたてないように、玄関の扉を開けた。鍵はかかつていなかった。姫のいる社から火があがっているのを聞いて紀久夫さんなどの住人は鍵をしめずに慌てて出てきたのかもしれない。たし、普段から鍵をかけないのかもしれない。京香姉さんと昼間訪れた時はどうだったっけ……。

僕と未香は神谷家の中に侵入することに成功する。先程外から見た時、二階の端の部屋の窓から灯りが洩れていた。あの部屋が恭輔くんの部屋なのならば、中に彼がいる可能性は高い。

僕と未香は足音を殺して階段を上がる。扉の下に開いている隙間

から光が洩れている部屋が二部屋あった。互いに向かい合っている。片方の扉にはプレートがかかっていた。木のプレートで「紗耶美」と書いてある。僕は昼間訪れた時に玄関の奥から僕を見ていた女の子の姿を思い出した。

僕は、紗耶美ちゃんのものらしい部屋の向かいの扉のドアノブに、手をかける。嫌な緊張感がある。

僕は思い切って、扉を開けた。

「はあ？」

ベッドに寝転んで本を読んでいたらしい恭輔くんが、こちらを見て、間の抜けた声を出した。

## 決意と協力者

「はあ？」

ベッドに寝転んで本を読んでいたらしい恭輔くんが、こちらを見て、間の抜けた声を出した。

この真夜中では恭輔くんが寝ているということも考えられたのだが、そうでなかったことは僕にとって都合がよかった。

恭輔くんは口をぽかんと開けてこちらを見ていたが、すぐに状況のある程度把握したようで、本を閉じると上半身だけ起き上がった。「なるほどねえ、俺を頼るってのは、まあ、いい決断なんじゃねえの？ ベストだったと言ってもいい。結果からしても、な。安心しな、俺はお前らを村人に引き渡しも、追い出しもしねえよ」

かなり飲み込みの早い子だ、と僕は内心で驚いた。僕が思っている以上に、彼は実際、頭が良いのかもしれない。

「ところでそっちのお譲ちゃんは何宮末香かい？ いやあ、初めまして。ははっ、お前ら姫殺しの罪被せられてんだろ？ で？ ここに匿ってもらいたい訳？」

僕は会話をしやすいように、部屋の中に足を踏み入れようとした。その時、恭輔くんが突然「あっ、おい、待て待て！」と慌てだしたので、僕は驚いて再び足を引く。

「あー、分かった分かった、ちゃんと話すからよ、まずお前ら、風呂入ってこい。服は、ギリギリ合いそうなのを出しといてやるよ」僕は自分の服と、未香の姿を改めて見た。泥だらけの砂まみれで、かなり薄汚い格好をしていた。

「大丈夫、この家には今俺と紗耶美とお前らしかいねえ。さっき親父が一回帰って来たけど、当分はお前ら探すのにあちこち村中を走り回ることだろうよ。一応、扉に鍵しめて入ることにしな」

僕はその言葉に素直に従うことにした。

扉を閉めようとしてから、僕はハッと思ひ直して、恭輔くんにあ

る要求をした。

「絆創膏とかも、出しといてくれるか？」

恭輔くんはあからさまに嫌な顔をしたが、結局「あー、やっつくやっつく。それと、靴はそこに置いておけ」と返答した。

意外と面倒見の良い子なのかもしれない、と僕は思いながら、言われた通りに靴底を上にした状態で床に置いてから、扉を閉めた。

「どっちから入る？」

僕が尋ねると、未香は首を傾げた。

「一緒に入るんじゃないの？」

確かに別々に入るのでは、僕が風呂に入っている間、未香は一人になってしまふ。だから未香が考えていることは、自然なことなのだろう。時間短縮にも繋がるし、今の精神が不安定なはずの未香には僕が常に傍にいることが必要だ。

「そうだね、一緒に入るうか？」

僕らは階段を下る。一階の扉を手当たり次第開けて行くと、二回目で風呂場に辿り着いた。

ふと壁にかかっている時計を見ると、今の時刻は三時少し前だった。僕は身につけているものをすべて脱いで、適当に床にまともしておく。未香もその隣に、同じように置いた。その後で、未香は慌てたように下着がYシャツの下になるように置きなおす。僕はあまり未香の裸体をまじまじと見るのも気が引けて、あえてあまり気にしないようにして、風呂場の中に入った。扉はガラス張りで、風呂場の中は二畳半ほどで、半分近くのスペースが湯船になっている。

シャワーを出して、体についた砂埃をきれいに洗い流す。驚くくらい爽快感があった。ただ、切り傷のある箇所があちこち痛んだのは否めないけれど。

そうしてから、すぐにシャワーを未香に貸す。僕が体を洗うのは未香の後でいい。未香はシャワーを浴びると「痛いっ」とうめき声をあげた。見ると、未香は主に足に切り傷が数箇所あった。自分の体も見てみると、スカートを履いていた未香とは違って切り傷は少な

かったが、腰が少し青白くなっているのが確認できた。そこは階段を転がり落ちた時に強く打ちつけた箇所だった。

未香はシャワーの勢いを少し緩めてから、また浴び始めた。まだ第二次成長期を終えておらず、ふっくらとしていて綺麗な肌から、僕は目が離せなくなる。そしていつの間にか、僕は未香を後ろから抱きしめていた。

「お兄ちゃん……？」

未香は驚いた様子だが、抵抗しようとはしなかった。未香の羞恥と喜びが混ざり合ったような恍惚とした表情が鏡に映し出されている。

僕が未香の柔らかい体を撫でまわすようにすると、彼女は初めくすったように身をよじったりしていたが、やがてビクビクと感じ始めた。僕は我慢しきれなくなり、手を未香の下半身に移動させていく。しかし未香は慌てたようにして僕の手を掴んだ。

「駄目っ、お兄ちゃん。今は、駄目なの」

未香は困ったような顔をしている。恥ずかしそうにしていたり、僕を焦らしているという風ではなく、あくまで困惑の表情を浮かべているのだ。今は駄目、とはどういう意味だろうか。それでも僕は未香の体を愛撫するのをやめたくなかったのだが、何故だか、急に罪悪感のようなものが芽生え、それ以上は続けなかった。

だけど僕が未香から体を離すと、彼女は首を横に振って僕にすがりついてくる。未香は「ごめんね」と泣きそうな顔で謝罪した。僕はそれを受けて、また彼女を抱きしめる。どうやら性行為をするには今は何やら都合が悪いらしい。

「全部のカタがついたら、またしよう？」

未香はそんなことを言っている。全部のカタがつく、とは今僕らが直面している諸々の問題が全て解決するという意味合いだろうか。

僕は「うん、そうだね」なんて返答しながら、果たしてそんな時が来るだろうか、と真剣に考えていた。

風呂からあがって用意されていた服にそれぞれ着替えた。僕も未香もサイズが小さくて、窮屈な思いをした。どうやら、僕の服は恭輔くんのもので、未香の服は紗耶美ちゃんのものらしかった。寝巻きではなく、僕の方は黒と黄色の半袖Tシャツにダメージ加工の施されているジーパンで、未香の方はピンクのキャミソールに薄い黄色のカーディガンと女性物のジーパンだった。

絆創膏もちゃんと用意してあって、僕と未香は切り傷のある箇所にそれを貼った。

用心して洗面所を出たが、一階に電気をついた部屋はなく、特に話声も聞こえないので、紀久夫さん達はまだ帰ってきていないようだった。

階段を上がると、廊下のところで見覚えのある女の子が床を濡れ雑巾で丹念に拭いていた。女の子は僕らに気付くと、ビクツと肩を震わせた。

「こ、こんにちは」

夜の三時半に「こんにちは」はあまり似つかわしくない様に思われたが、女の子は驚いた拍子について口から出ただけだといった様子だった。

「紗耶美ちゃん、だよね」

「うん」

紗耶美ちゃんは長めの黒髪をツインテールにしている。年齢相応の幼い顔立ちで、未香のように大人しめの子供という印象を与える独特の雰囲気を持っている。ただ、未香が恥ずかしがりの傾向にあるのとは違い、紗耶美ちゃんはあくまでも感情の起伏がないだけみたいだった。要は、無表情に固定されていることが多いのだ。

「もしかして、僕らが歩いて汚れたのをふいてくれる？」

「うん」

この分だと、服や絆創膏を用意してくれたのは、全て紗耶美ちゃ

んのようだ。しかし恭輔くんが僕らに献身的になってくれるというのは想像し難い図なので、どこか納得させられたのも事実だ。

「ごめんね。あとは自分でやるよ」

僕は紗耶美ちゃんから雑巾を受け取るうとしたが、彼女はそれを拒否した。

「嫌っ、これは、自分でやるの……。兄さんが、私にくれた仕事なんだもんっ」

紗耶美ちゃんは必死な風にそう言うと、驚くべきことに薄汚れた雑巾を抱きしめた。僕は面食らう。あまり積極的に接さない方がいいのかもしれない。この不自然な反応も、人見知りなのに僕に話しかけられたが故なのかもしれない。だから僕は、紗耶美ちゃんとの会話を早々に中止することにした。

「えーっと……じゃあ、お願いする」

「うん」

僕は紗耶美ちゃんの脇を通り過ぎて、恭輔くんの部屋に入ろうとする。すると、背後から紗耶美ちゃんが「あの、」と呼びかけてきた。

「あなた達が、姫を殺したの？」

僕は振り返って「違っよ」と答えてから、恭輔くんの部屋に入った。

しかし、恭輔くんの姿はどこにも見当たらなかった。別に、どこかに隠れているという訳でもないだろう。そんなスペースは精々机の下かベッドの下かクローゼットの中程度しかないし、そもそも恭輔くんがそんな下らない真似をするとも思えない。

僕は、正面の窓が開けっぱなしになっていることに気がついた。その窓の真ん前に、向き合うようにして、隣の家が見える。神音家の窓だ。そして、その窓は閉まっていた。二つの窓の間は五十センチ程である。

僕は一度恭輔くんの部屋を出て、廊下で雑巾がけを続けている紗耶美ちゃんに「恭輔くんが何処行ったか分かる？」と尋ねた。

「部屋にいない？」

「うん」

僕が相槌をうつと、紗耶美ちゃんは突如として不機嫌そうになった。感情の変化が表に出ることの少ない紗耶美ちゃんにとっては、それは珍しく、分かりやすい程に嫌悪感を表に出した態度だった。

「じゃあ、琴音さんのトコに行つてんじゃね」

口調まで乱暴なそれになっている。それが何故なのかは分からないし、琴音さんというのが誰なのかも分からない。

「隣の家。窓伝いに兄さん、よく会いに行くの」

紗耶美ちゃんは吐き捨てるようにそう言つと、雑巾を持って立ち上がり、階段をドタドタと下つて行つてしまった。

僕は恭輔くんの部屋の、開けっぱなしになっている窓に再度目をやる。成程、確かに向かいの窓を開ければ、簡単に飛び移れそうだが特に恐怖することなく、小さな水たまりを飛び越えるくらいの心持ちで十分だろう。

「あの子、琴音つて人と仲悪いのかな？」

僕と二人きりになると、未香はそう話を振つて来た。思い返すと未香は僕じゃない第三者がいる場では発言をしていない気がする。僕だけが未香に信頼されている訳だ。それは僕に誇らしく心地よい特権意識を芽生えさせる。

「いや僕が知つてる訳ないじゃん」

僕がそう言つのと向かいの神音家の窓が開くのが同時だった。一瞬身構えた僕だったが、その窓から現れたのが恭輔くんだと分かり、緊張を解く。恭輔くんは「ああ、あがったのか」などと言いながら、自分の部屋に窓から入つて来る。

「どこ行つてたの？」

「琴音のとこ。神音<sup>かみね</sup>琴音、知ってるか？俺の女。丁度その窓開けると琴音の部屋なんだよ。まあ今はあいつ、寝てたけど。互いにつきも窓の鍵開けておいてさ、自由に出入りしてるんだ」

恭輔くんは自分のベッドに飛び乗つて、胡坐をかいた。僕らに「

座れよ」と薦めてくるが、椅子なんてこの部屋にはなく、それはつまり客人に対して床に座れと言っているということだった。しかし僕は本来招かれざる客というよりもはや客にあらざる者なのだし……、だけど僕は首を横に振って、立ったまま壁にもたれかかった。未香は僕にぴつとりとくつついて、同じようにしている。

「まず初めに言っておくと、お前らは姫殺しの罪人だと決定されている。村人達は今も死に物狂いでお前らを探しているぜ。お前ら二人が、姫宮唯人、姫宮未香であることは親父のせいでもう分かっている。だけど容疑が晴れるどころか、今じゃ姫宮京香、未香、小夜子、幾夜を殺したことにもなってるぜ。この四人はお前らの家で死体になって見つかったんだけど、知ってた？」

「ああ、僕は実際にそれらを見ているよ。その時に姫の社が燃えていることを知って、助けを呼ぶ目的も兼ねて駆けつけたんだ」

「姫殺しがお前らじゃないことは分かるんだけどよ、この姫宮家の四人を殺したのは、本当にお前らじゃねえのか？俺相手なんだから、心配せずに本当のこと言っていいいぜ？」

「違うよ」

「ふーん」

恭輔くんは意味ありげな風に頷いた。まるで挑発するかのような態度だ。

「成程ねえ。ま、そんな主張は村人達には効かないさ。とにかくお前らは姫と神宮家の四人を殺した罪で村人全員から追われていて、捕まり次第即刻死刑だつてこと。そして、こんな中じゃ、どう頑張ったつて島から抜け出すことは不可能だ。船は出せないようにしてあるだろうし、見張りもいるだろう。さらに、島の外に助けを呼ぶこともできないぜ。知ってるかもしれないが、この島は国の管轄外だ。勿論、俺はお前らを匿ってやってもいいが、いつまでもこれが露見せずにいられるはずもねえ」

「そんなことは分かってる。どう見ても、この状況は最悪だし、絶望的だ」

「じゃあ、どうすんの？ 大事な義妹を護ることもできねえでこのまま下らねえ時間稼ぎばかりして、最終的には村人に捕まって仲良くギロチンにかけられんのか？」

「……………」  
僕は多少躊躇ったが、やがて、先程から密かに考えていたことを口にすることにした。

島から抜け出すことはできない。助けを呼ぶのも難しい（そもそも電話はあるのか？ 僕の携帯電話はもう取り返せないだろうし）。ならば、できることは一つしかない。

「捕まる前に、真犯人を見つけた」

直後、恭輔くんが大口をあげて笑った。底抜けに嬉しそうに哄笑している。

「そうだよな、それって最高だぜ、そうじゃなきゃ匿ってなんてやるつもりなかつたんだよ、でもま、合格。面白いじゃんよ、エンターテインメント性に長けた非常に面白い試みだ。現実じゃあ早々拜めるようなシチュエーションじゃねえ。俺がお前らに協力する条件も、それだ。いいねえ、素敵だねえ」

僕としてはこれは、そのような娯楽性を重視しての決断でなく、生き死にかかった深刻な問題に対しての一つの回答であったので、それを楽しむかのような態度をとる恭輔くんには正直腹が立った。ただどこで恭輔くんを叱咤するのも大人げないし、会話が円滑にすすむを妨げる効果しかなさそうだったので、僕はそのことを口に出したりはしない。

「俺の目的は後腐れなく島を出ることだ。今回のお前みたいに後々呼び戻されるのは御免だからな。そのためには、ここでお前らを差し出す訳にはいかねえんだよ」

「そうか？ 僕らを差し出せば、この騒ぎは終わる。姫も死に、君は束縛されることなく、島を出ることを許されるだろ。今島を出れないのは、あくまでも姫殺しとされている僕らが捕まらずにいて警戒態勢になっているからなのだし」

「いや違え、それじゃ駄目だ。このままお前らが捕まれば、姫を殺した奴の思うがままさ。今の島の意向では、姫の代理がたてられるのは必至。そうすれば、また今まで通りだ。支配者が姫か、そうでないかってだけで、現状維持どころか、きつとさらに馬鹿らしい島になる。だから俺は、姫の代理として島を支配することを目論んで姫を殺害した真犯人を暴きだして、この島をぶっ壊さなきゃならねえんだよ。そのためには協力者が必要だ、そしてそれは自分達が姫殺しだと疑われているお前からこそが信頼できるし適任だ。信頼関係というのは利害の一致の上でこそ成り立つ」

「待つてくれ、どういうことだ？ 君は犯人を知っているのか？」

「はあ？ 知ってないって言うてんだろ。でも、大体のところは見当がついてるぜ。姫を殺した動機は、姫の代わりに島を思うがままにすること。そして姫の代理になることが可能で、さらに話を優位に進めて行くことができるのは、かなり上位の家の奴らだけだ。つまり、犯人ないし犯人の一味の内の少なくとも一人は、絶対に上位四位の家の中の誰かだ」

恭輔くんの言わんとしていることが僕にも大分分かってきた。成程、確かに姫を殺そうとする動機を考えれば、すぐにその推測は立つだろう。その犯人が暴かれれば、姫もいない今、序列制度そのものが崩れる。そうすれば島には統率者がいなくなり、村人は烏合の衆と化す。恭輔くんも安心して、堂々と船を使って念願の島脱出を成功させることができるだろう。

「ここまでは客観性にも長けたまじく正しいと見ていいだろう考えだ。ここから先は、俺の独断と偏見に満ちた推測とも呼べねえ代物なんだが……、俺は序列四位神代家が怪しいと思ってる」

僕はそこで、序列四位の家の名前を思い出した。そうだ、神代家だ。序列一位から順に、神音家、神谷家、神宮家、神代家。

「神代三かみしろみよこ二二にってというイカれた名前の女、知ってるか？」

「いや、知らない」

「その女が、序列外の例外的存在、琴吹家の現党首……つつても一

人しかいないんだけど……（ことびきやみ） 琴吹病子と濃い繋がりを持って、どうにもくせえ」

「琴吹家……そうだ、思いだした。処刑専門の家系だよな。一人しかいないってどういうことだ？」

「病子が家族全員殺したんだよ、十二歳の時にだ。お前が島から追放された次の年だな。……まあ、こいつらは全然関係ないかもしれねえが……、とりあえずこの辺りから探って行けば、何か掴めると俺は思ってる。琴吹家っていえば、島の裏側の方の事情に精通してるところか、島の裏側そのものだしな」

そこまで話すと、恭輔くんは一旦区切りをつけるかのように「さてと、」と言った。そして、相変わらずの挑戦的でいて軽薄さの浮かぶ眼差しを僕らに向ける。ニヤニヤと、笑いながら。

「再度確認するぜ。お前らは俺と組んで、命がけの探偵ごっこをするかい？」

話を聞きながら、僕はその決断をとうにしていた。僕らにはそれ以外に道はないだろうし、ここに匿ってもらうことと協力者を得ることはどうしたって必定条件だ。恭輔くんの軽々しい幼稚な言い回しには興を削がれたが、しかしそれでやらなければならぬ内容が変化するはずもない。

僕は答えた。

「するよ。さっき言っただろ。君が協力者になるのも、最初から予想してたことだ。……未香も、それでいいか？」

未香は頷いた。気のせいかな、その表情はどこか楽しそうに見えた。

## 神宮家の密室殺人事件

その直後、ガラガラと何やら窓が開く音がして、僕と未香はびくつと反応してしまう。音のした方向に目を向けると、神音家の窓が開いて、そこからショーヘアの女の子がこちらを覗きこんでいた。とても眠たそうな表情をしていて、左手では目をこすっている。

「ああ、琴音。起きたか。こっち入って来いよ」

恭輔くんの言葉で、その女の子が神音琴音だということが分かった。

「ちよつと恭輔、これはいくらなんでもあまりにあんまりだと私は思うな。そうは思わないかい？ 少々やりすぎたとか、そう言った後悔や罪悪感が少しもないと言うほどに君は鬼畜に徹してはいないだろう？ って、待ってくれよ、何でピンときてないみたいな顔するんだ、え、もしかして、私が何に対して憤慨しているのか思い至っていないのか？ それは酷い！ 戦慄を禁じ得ないよ、恭輔。ほらこれ、どうして君は私の服に冷たい水をかけて放置するなどと言う真似が平気でできるんだい？」

聞いていると若干引き気味になってしまふほどの饒舌を疲労しながら、琴音ちゃんは窓から窓を伝ってこの部屋に入ってきた。その言葉通り、彼女の黄色のパジャマ上下の内上の方はびしょ濡れになっていて、それ故肌にぴつとりと張り付いて薄く肌色が透けていた。「確かに私は君と接するようになってからかなり被虐趣味に傾倒するようになったけれど、これは快感を得る前に泣きそうになってしまったよ。ああ、寒い。風邪を引くね！ 今にきつと体中が震えだし、その揺れは地面に伝わり、この島全体に地震を起こさせるに至るだろう！ 何も私は表現に大げさな誇張を加えようだなんてしていないよ、少なくとも僕の心の内はそのようなことを想像する程度には荒れている。繰り返すがね、これは酷い。これで私が起きた時に君が傍らで悪戯が成功したのに満足するかのようない笑み

を浮かべていたと言うのなら、私はひたすらにときめくだろうけれど、くしゃみと共に目を覚ましたら部屋は真つ暗なままだなんて、虐めじゃないか！ ドメスティックバイオレンスだよ、私は恭輔とは家族同然だと思っっているからね。さあ、私の中で君の株は地に落ちたぞ、何でも壊すのは簡単だが作るのは難しいものだ、人間というのは強い破壊衝動を秘める生き物だしね」

僕は呆気にとられながら琴音ちゃんの演説のような言葉を聞いている。これだけの量の台詞をつかえずに言うのだから、相当な頭の回転の速さだ。恭輔くんは終始それをニヤつきながら聞いていたが、やがて自分のつかっているベッドの上の布団を持ちあげて「じゃあ入れてやるよ琴音。早く来な」と言った。すると琴音ちゃんは表情を輝かせて「わぁいっ！ これは嬉しい、大好きだよ恭輔、巧みなアメとムチだ。この胸の奥に湧きあがる感動をそのまま君に伝えたい心持ちだよ、そうすれば私が君に寄せる莫大な愛情も分かるものだろう！」などと喋り続けながら布団の中に入って、恭輔くんに抱きつく。

服を着替えれば済む話じゃないだろうか……、と僕は思っていたのだが、おそらくこの二人はこのように一緒に布団に入る結末を予め考えた上であのような形式的な掛け合い（ほとんど琴音ちゃんが一方的に喋っていただけけど）を展開していたのだろう。

「ていうか、誰？」

琴音ちゃんはやつと僕らに目を向けた。

「神宮唯人と神宮未香。姫殺しの濡れ衣を哀れにも着せられ、村中を敵に回しつつもここに逃げてきたんだ」

恭輔くんが解説すると、琴音ちゃんは「ああ！」と声をあげた。

彼女は先程からいささか声が大きすぎる気がする。身を潜めている僕らとしては、それは都合が良いとはあまり言えないことだった。

「そういえば言っていたね、姫が殺されたんだろう？ うんうん、恭輔の念願達成じゃないか。おめでとう！ ただ、私はあまりの眠気のため話を統吾兄さんから聞いた直後に寝てしまったからね。状

況を掴みかねているところはある。でも、私一人のために、どうやら緊迫しているらしいこの状況においてのスムーズな展開に支障を与える訳にはいかない。どうぞ、私のことは気にせず、会話を進めてくれ」

琴音ちゃんは予想していたよりも気遣いがちゃんと出来る子だった。その点は素直にありがたい。

「じゃあまず、これまでに起こったことを整理しようぜ。俺はお前が島に戻ってくるようになった細かい経緯なども分からないから、重点をかいつまんで話してくれ。ところどころ、俺が考えなり補足を入れる」

僕は遙か昔の出来事であるかのような感覚を与える一昨日の出来ごとを思い出した。

「僕の両親が交通事故に遭ったんだ。そして、死んだ。僕は親が運ばれた病院に駆けつけて、そこで従姉の京香さんに再開した。彼女の話では、姫は僕の両親が死ぬことを予知していて、それで一人になってしまふ僕を島に連れ戻すように言ったとのことだった。そして僕は京香さんに連れられるままに、フェリーで島に帰って来た」

「ストップ。いきなり馬鹿馬鹿しいことになってるじゃねえか。で、お前の考えはどうな訳？ 姫のその予知能力とかいうやつ。まさか今になってもまだ本当だとは思ってないだろ？」

「……そうだね。今となっては、僕も姫の不思議な能力は甚だ怪しいものだと思うてる。僕の両親は、きつと、姫に殺されたんだ」

恭輔くんは満足そうに頷いた。そしてこちらに手を差し出すようにして、続きを促す。

「京香さんとは別に、島の者を誰か、送り込んでいたんだ。そして、そいつが僕の両親が乗っている車に、トラックで故意に衝突したんだ。きつと、かなり姫に忠実な奴だったんだ。そんなの、この島には東にして捨てる程いる。ただ、このことを京香さんが知っていたか知っていないかは、もう分からないけれど」

「知ってたね、確実に。あの京香とかいう姉ちゃんは、ちゃんと姫

が全部イカサマの存在だつと知ってる身だぜ？ 何しろ序列三位の家であるの歳だし、母親に代わっているいろいろ仕事してたもんな。知らないはずがない。きつと、お前が正式に神宮家の代表になったら、全部教えるつもりだったんだと思うぜ？ それまでは、万一お前が島から四年間離れたことによつて姫に反抗心を抱いている場合を危惧して、姫の能力があたかも本物であるかのように話していたんだろ」

「……君が姫の能力を否定するのに、何か証拠はあるのかい？」

「証拠も何も、少なくとも序列四位以上の家の者は常識として知ってるぜ。若い内に島から追い出されて数時間前に戻つて来たばかりのお前や、ずっと家に籠りっきりのそつちの姉ちゃんには知らなくても無理ないけどな。うん、じゃあここでしようもねえ姫のトリックを全部教えてやるよ」

随分と恭輔くんが軽々しくその内容を口にするので、僕はただただ啞然となった。姫のトリック……、二千年の時を生き、数々の不思議な能力を持ち、この小さな島を支配する彼女。そんな謎に包まれた彼女が、今まさにペテンだったと知れるのだ。

「まず姫つーのは、二千歳じゃねえ。ただ、およそ二千年前からその家系の娘が代々姫を務めてるだけだ。姫は二十代後半で序列四位以上の家の男との間に子を作らなければならない。これは勿論内密で行われるし、上位家の間で軋轢が生まれない様に、相手の男が誰かであるかは上位家の者にさえ伏せられる。本人も姫も、口にすることは禁じられている。そして、女が生まれるまで子を作り続けるんだ。男が生まれたら、すぐに殺して、山の中に埋めているらしいぜ」

恭輔くんは、特に嫌悪感を露わにしているというような様子もなく、自然に語り続ける。

「姫は娘に、幼い頃から自分の知識や記憶、姫の仕事や役割を徹底的に教え込む。二千年前から歴代の姫は重要事項を書き残して記録していて、その書は社の中に揃ってるんだ。古いのはもう読めたも

のじゃないんだが、とにかく、姫が持っている過去の知識というのは、それらから学ぶ一応本当のものな訳だな。娘はこの書もほとんどもを讀ませられる。そして、この教育の仕方っていうのも決まってる、代々同じことを繰り返してんだ。だから、ほとんど同じ人格と知識と能力を持った人間が出来上がる。そうなりやすいように、交わる男も上位家の者達だけだと定めてるんだらうな。遺伝子が似るようにするんだ。知ってるか？ 神音、神谷、神宮、神代、これらの家は昔一つだったんだぜ。だから、俺達は実は皆親戚同士なのさ。まあ、それはいい。大体、二千年前なんて遺伝子なんて考え方がそもそも生まれてないから、これも当初は姫を奪い合うような低俗なことが起きないようにするため、とかそんなだったんだらうよ。話を戻すぜ、要は、大抵の場合あの社の中には姫の他にその娘もいるってことだ。そして、それをカムフラージュするのに一役かっているのが食べ物だな。姫は一日二食だけで、それぞれ量もあまり多くない。これを二人で分ければ、即どちらも栄養失調だらうな。幼い内は、姫の食事の内少しを与えればいいのだから間に合う。しかし、成長に従って、娘の食べる量が増える。そうすると、姫の食べる量は反比例して少なくなる。分かるか？」

「やがて姫は自分の分の食べ物なくなり、餓死する……ってことか？」

恭輔くんは頷いた。

「信じられない。そんなことができるのか？ 言葉で言うほど簡単なことじゃないはずだ。それも、二千年前から、そんな無茶なことが続くはずがない」

「ああ、だから、二千年って言葉も、かなり誇張があるんだと思うぜ。実際は、それほど歴史があるんじゃないやねえ。だけど、成功率はそれほど低くないと思う。姫は村人から離れたところに住んでいるし、合えるのは上位四位とは言わないがそれでも一部の家の者だけだ。さらに、姫は上位家によってサポートをしてもらえる。食べ物だって、二食の他にこっそり持って行っているんだらう。それは当たり前

前だ」

「……………」

確かに口で言う分には筋は通る。姫と上位家、村を背負う彼らは幼い頃からの徹底した教育のおかげもあって、真相を晒して村を崩壊させようなどとは思わない。上位家は密集し、その他がばらばらに配置され、さらに姫の社は山の上の方にあるというのも、真相の隠匿をしやすくしている。

しかし、それでも、納得することは少なくとも僕にはできなかった。例え、それでもない限り現象を説明することができないのだとしても、残された回答がそれしかないのだとしても、だ。

「島の外のことを姫が知ってるのは、過去は定期的に島の外に食糧確保の名目で情報収集に行く上位家の者から聞いていたんだろうが、最近では情報端末を使用している。当然だ、この時代にまだアナログな手段で頑張る理由がない。あの社にはその情報端末によつて天気予報も入つて来るから、予言者めいた真似もできるのさ。一方この島の住人はそういったデジタルな道具が身近にないたため、これに思い至るはずもない。思ったよりせいせいことしてんだろ？ その他の数々の奇跡みたいな出来事だつて、上位家によるやらせだよ。そりゃ何でもできるはずさ。ただ、これも島を安定させるためのことだからな、上位家としては従うに決まつてる。姫というのは分かりやすい記号なんだよ、島を統率するために作りだされた虚構の神さ」

記号。虚構の神。恭輔くんのその表現は実に的確だと僕は思った。「さ、姫のことについてはこの程度でいいだろ。どうだ？ 拍子抜けか？ まあ、その分姫と上位家による姫を信仰させる試みは成功してる訳だよ。赤ん坊の頃から島の中に閉じ込められて姫は絶対的な存在だなんて教え込まれ続けてんだから、当然だな。でも、実際はこんなもんだ。じゃあ、続きを話してくれ。島に戻つて来たところからだ」

僕が話し始めようとした時、隣から未香が「もう眠いよ、お兄ちゃん」と囁いてきた。僕はそれを聞いて、少し考えた後、床に胡坐

をかいた。そして、未香をその足の上に座らせて、後ろから抱くようにする。未香は頭を落として、眠り始めた。そしてから、僕は恭輔くんはその状態で話を始める。恭輔くんはベッドの上なので、僕は彼から見下ろされるようなかたちとなった。

「まず姫と会話をさせられた。内容は、島の者のほとんどには僕を部外者と伝えるということ、僕を神宮家の跡取りにしたいということ。その後僕は君に会って、話をしたね。そして京香さんと共に、神音家、神谷家に挨拶をした後、神宮家に到着した。で、夜ご飯を食べた後に、部屋に引きこもっている未香のもとに僕一人で行ったんだ。その直後に、一階から叔母さんと京香さんの悲鳴が聞こえてきて、二人で下りると、祖父母に叔母さんに京香さんが、皆腹を切り裂かれて死んでいた。そこでチャイムが鳴ったから出た。この時、玄関の扉は施錠されていて、鍵は全て家の中にあつた。僕は姫が大変なことになっていると聞いて、外に出た。社が燃えているのを発見し、僕と未香はとりあえず家に鍵をかけてから、社に向かった」

そこで僕は思い出して「だから、家の鍵が一つ、僕のズボンの中に入っているんだつたな」と言った。今頃洗濯されているだろう。

その時僕は、恭輔くんが眉を顰めて難しそうな顔をしていることに気付いた。

「どうしたの？」

「家の鍵って三つしかない？ 俺の家はそうなんだけど」

「うん、三つだと思う」

「その内一つはお前が持つてるんだよな？」

「うん」

「お前が家に来客があつて出た時、玄関の鍵はしまっていたんだな？」

「うん、それがどうしたの？」

恭輔くんはしばらく無言になってしまったが、次に突然笑い出した。

「馬鹿馬鹿しいな、ほんと」

「何がだよ」

「いわゆる密室殺人、だよ。ここでもまた」

僕は間抜けにも口をばかんと開けてしまったので、恭輔くんはそんな僕のために説明を始めた。

「姫殺しの正体が神宮唯人と神宮未香だと分かった村人達は、当然真っ先に神宮家に向かった。しかし玄関の扉には鍵がかかっているようで開かない。開いている窓はないかと家を一周ぐりりと周ったが、一階の窓は全て内側から鍵がかかっていた。二階に開いている部屋が一つだけあったらしいが、例えばこの部屋みたいに真正面の家の窓が近くにある訳でもないから、そこから出入りすることはできねえ」

僕はその話を聞きながら、その意味するところを必死に考えようとしたが、何も掴むことができない。僕は混乱しているのだ。

「仕方がねえから窓に岩投げつけて割って入ったって話だぜ。家の一階ではさつき言った四人の死体があった。勿論家の中には他に生存者は一人もいなかった。玄関脇に、家の鍵が二つあったらしい。

この後も色々と搜索したんだが、凶器らしきものは、家の中にはなかったって話だ」

「……そうか！　こんなことが、あり得るはずがないのか！」

僕はやっとこの話のおかしな点に思い至った。靄の中に隠れる何らかの物体の輪郭が徐々に見えてきたかのような気味の悪さを僕は感じた。

僕が玄関に行った時、扉には間違いなく鍵がかかっていた。つまり、この時点で犯人が家の外に出ているのだとしたら、それは窓から出たということになる。何故なら、玄関の鍵は家の中に三つともあったからだ。しかし村人達がやってきた時、鍵の開いている窓は一つもなくて、勿論玄関の鍵もかかっている、なおかつ僕が持っているもの以外の二つの鍵は全て家の中にあっただ。ということは、犯人は僕と未香が去った後にまた神宮家にやって来て窓の鍵をしめたのだろうか？　しかしそれでは家から出られなくなってしまう。鍵

を使おうにも、繰り返すけれど二つの鍵は家の中であって……。

ならば、僕と未香が出た時にまだ犯人は家の中に潜んでいたと考えたらどうだ？　しかし今度は、犯人が家から出られなくなってしまう。鍵を使わずに、家を密室状態にして脱出することなどできるはずがない。

残された方法は、僕の部屋、つまり唯一開いていた二階の窓から飛び降りることだが……。

「いや、でも恭輔くん、そんなの、二階のその窓から出ればいいだけの話じゃないか。跳び下りても二階程度じゃ大怪我はしないだろうし、何なら縄でも使えばいい」

「俺もすぐにそう思ったさ。でもそれも考えられねえんだ。なんでもかと言って言うと、階段から二階のその窓にかけて、床や壁には一切血の跡がついていなかったからだ」

「血の跡……」

たしかに、祖父母の部屋からダイニング・キッチンにかけては血の跡が点々としていた。あの出血では返り血を浴びるのは必至なのだから、そのような跡がつくことは当然だ。

「だけど、それがなかったということは、その場所は犯人が歩かなかったということ……二階に行くには階段を使わなければいけない……」

「風呂が利用されたような様子はなかったみたいだぜ。それに、返り血まみれの衣服が脱ぎ捨てられてた、ってことも当然ない。……歩きながらどうしてもついてしまう血の跡を拭きとっていた、って考えるしかないが、これってそんな簡単なことじゃないよな。村人達がいくら探しても、そのような跡は一つもなかったって話だ。全ての跡を完全に拭きとりながら二階に上がって、そこから脱出なんて……現実味は、ねえかな。木の床や壁ならまだ何とかなるかもしれないねえが、窓が開いてた部屋ってというのは床にカーペットが敷かれていたみたいでさ、ここも際どい所だよな……」

僕はある考えを閃いた。こういうのはどうだろう。犯人は村人が

来るまで家の中に潜んでいて、やがて入ってきた村人の中に、あたかも最初からいたかのような何食わぬ顔で紛れこんだ。

……いや、これはあり得ない。これならまだ血の跡を拭きながら歩いたという方が成功率が高いように思われるし、だいたい犯人は返り血まみれなのだから。

「でも、実際血の跡は残らなかつたんだから、結果オーライだったってことかなあ……。ああ、あと、なんでそんなことをしたのかわかって謎も残るよな。わざわざ密室殺人なんて馬鹿げた事をした理由があるはずなんだ」

「理由……。そうだね」

「村人達はこう言ってたぜ。姫を殺した罪人がいる姫宮家は姫の裁きを受けたんだ、って。四年前の事件もあるし、姫宮家は呪われているんだ、って。多少強引だけど、そう思わせることが目的だったって考えるのが妥当かな。まあいい。後で考えよう。さっきの続きから話してくれ」

「ああ、うん」

僕は家を出てからのことを話し始めることにしたが、それでもモヤモヤとしたものは頭の片隅に確かに存在し続けていて、思いだすことになかなか集中できなかった。

「社に着くと、火の勢いは大分弱まってたよ。で、崩れた社の柱の下で、姫の焼死体が潰れていたんだ。その時に、僕は突然犯人だと言われ、村人達に追われた。階段を下りて、追手を撒くのに未香と一緒に咄嗟に森の中に逃げ込んだ。目を覚ましてから、情報収集と隠れ家及び食糧の確保のために恭輔くんの家を訪ねようと決めた。そで向かう途中に一回村人に見つかつて、一旦遠くに離れたんだ。そしてしばらく経ってから、また行動を開始して、なんとかここまでたどり着くことができた。……うん、こんなものだろうと思う」

「そうか……」

恭輔くんはもうニヤニヤと軽佻浮薄に笑ってはいなくて、真剣な表情をしていた。彼の腕の中では、琴音ちゃんがもう眠ってしまっ

ているようだった。僕の腕の中でも未香が、可愛らしい小さな寝息を立てて、眠っている。

時刻は四時をまわっていて、段々と外が明るくなってきていた。

その時、ふああ、と恭輔くんが大きなあくびをした。

「さすがに眠いわ。何時続報が入ってもいいように起きてただけど、さすがに限界。俺、寝るわ。お前も休んどけよ」

「……そうだね」

これから僕はたくさん考えて、たくさん動かなければならないのだ。なるべきなら、体の調子は整えておきたい。

僕は用心のために背後の恭輔くんの部屋の鍵をしめてから、目を閉じた。僕も内心、もう寝たいと考えていたのだ。瞼がいつもの五倍は重く感じられていたのだ。

やはり体の方は睡眠を所望していたらしく、僕はすぐに眠りについた。

私、神宮未香が目を覚まして時計を見ると、時刻は八時四十五分で、カーテンの隙間からは陽光が部屋の中に入ってきていた。

私は従兄の唯人お兄ちゃんの腕の中にいた。唯人お兄ちゃんはまだ眠っているみたいだった。少し首を伸ばすようにすると、ベッドの上で恭輔くんも琴音ちゃんが抱き合って寝てるのが見えた。私も唯人お兄ちゃんとあんな風に抱き合ってベッドの中で寝たいなあ、と思ったけれど、今は我慢だ。この一連の事件が全て解決した後、それは御褒美としてとっておくのだ。

眠気はもうなかったのだが、体のあちこちがズキズキと痛かった。といっても深い傷はない。この肌にも今後傷の跡が残ってしまうというところがないのは救いだ。唯人お兄ちゃんと交わる時に、体に傷があつては、この時のことを思い出させて萎えさせてしまうかもしれない。それは私にとって凄まじい恐怖の対象だ。

退屈なので私はまた目を閉じようとした。すると、私に声がかけられた。

「起きたのか、神宮未香」

私はびくつと肩を震わせたが、声の主が恭輔くんであることを知り、胸を撫で下ろした。彼は上半身だけを起こし、私に浮ついた嫌な笑顔を向けている。身長は低いくせに、いつでも他人を見下しているかのような態度をとる子供だ。

「なあ、一つ訊いてもいいか？ まあそっちの兄ちゃんにも後で訊こうとは思ってるんだけどさ、答えてくれるとは思えねえんだよね……。まあいい、質問するぜ。いや、質問っつーか確認だな。俺はもうこれは絶対の事実だつて確信してるから。四年前、神宮冬賀を殺したのは、お前ら二人だろ？」

神宮冬賀は私の実の父親で、四年前、謎の密室殺人に遭い、死亡した。一見して犯人不在のこの事件は、村人達に長い間姫の裁きだと考えられてきた。

私は恭輔くんの質問に、答えることは出来なかった。だけど、肯定する勇氣も否定する勇氣もなかった。私は唯人お兄ちゃんが今起きてくれることを願った。しかしその気配はない。ならば、私は今すぐに唯人お兄ちゃんを起こして、助けを求めべきだろうか。

しかし、私が無言のままにいるのを、恭輔くんは満足そうに見ていた。

「答えないってことは、本当なんだな？」

「えっ、待って」

声が裏返ってしまった。

しかし、私はそれを否定することがやはり出来なかった。

何故なら、父を殺したのは間違いなく唯人お兄ちゃんなのだから。

## 四年前の密室殺人事件について

作者です。

前回の話の最後の行を修正したことをお伝えします。

「何故なら、父を殺したのは間違いなく唯人お兄ちゃん、私はそれを見ていたのだから。」

「何故なら、父を殺したのは間違いなく唯人お兄ちゃんなのだから。」  
よく考えたら唯人が冬賀を殺したのを、未香は実際に目で見ていた訳ではなかったです。

それと「神宮」が「姫宮」とたまに間違ってたかかれています。こちらはまだ修正が間に合っていないです；

どうでもいいと思われるかもしれませんが、「二千年姫の死亡」はミステリ小説の体裁をとっていますので、描写は全て正確にしてフェアにしたい、という考えの基での報告です。

この小説はもう中盤をとくに迎えていて、この話の辺りからいろいろな謎が解かれたりまた生まれたりします。

全ての伏線はまだ登場していませんが、物語の真相を推測しながら読んでいただけると嬉しいです。

読者の皆様全員がこの小説に仕組まれたある企てに掛かっていることを、生意気ながら僕は確信しています。

「あの事件の後に神宮夏雅、舞穂、唯人が島を追放された。しかも神宮唯人なんて跡取りのはずだった奴だぜ？ あからさますぎるじやねえか。つまり神宮唯人が殺人者で、だからこそ追放されたんだ。でも年端もいかない子供だけを追放するのも躊躇われるし、息子を追放された親がどう動くかも分からない事態だ、それで両親も共に追い出された。このことは姫だけがどうやら知ってることみたいだな。何度が接触して感じたが、神宮京香等は事の真相に至っていなかったみたいだ、まああくまでこれは俺の勘で実際のところは分からないが……」

私は合いの手を入れることも、頷くこともできずに、ただただ恭輔くんの話聞いてるばかりだった。彼はベッドの上から、私を威圧するような視線を向けて話し続ける。私は自分が惨めで仕方がなかった。年下の子供に、このように圧倒されてしまって、私は一人では何もできない弱者なのだとこのことを痛感させられているのだ。

唯人お兄ちゃんの名誉のために、私は嘘をつき、恭輔くんの話を早く否定したい。だけど、その決意が固まるうとしても、恭輔くんが喋り続けているため、口をはさむタイミングが掴めない。

私は恥辱と屈辱を同時に味わい、今にも泣き出してしまいそうだった。

「だけど、犯人は神宮唯人だけじゃねえ。あの密室殺人を説明する必要がある。さらに、その時家の中には神宮冬賀、唯人の他に神宮未香、幹樹がいた。家の中で殺人なんてが起これば、この二人ともにそれを隠すことは難しい」

神宮幹樹は私や唯人お兄ちゃんの曾祖父にあたる人で、三年前に他界した。

「神宮幹樹はでも攻略できるだろうな。もうこいつの存在は無視していい。死期が間近で耳が遠くて目が見難くて痴呆で足が悪いため

部屋に籠りつきりの老人なんて、気にする必要はねえよ。だけどお前に隠しだてはできねえだろ。神宮唯人は家族が駆けつけた時、返り血を浴びていたなんていう事実はねえ。つまり、神宮唯人は殺人を犯した後に、風呂に入って服を処分している。さすがにお前には露見するよな……ああ、実際に殺したのはお前じゃないのは分かっている。そうだったら追放されるのはお前だっただろうし、女の力で大の大人の体にあんなに包丁を突き立てられるとも思えねえ、中には相当深い傷もあつたんだからな」

私はその話を聞きながら、恭輔くんがどのようにそこまでの情報を収集したのかをふと疑問に思った。しかし、その程度の事実なら、序列二位の者ならどうにでもできるんだろう、とすぐに結論を出せた。

「そしてお前が共犯ならば、密室の方はすこぶる簡単だ。大体あの事件は、神宮唯人、未香が家族を呼ばずに扉にタックルきめてぶち破ったつとこが最も不自然なんだ。いくら怪しいと思つたつて、鍵がかかっている扉をいきなり破壊はしないだろ。家族が帰って来るのを待てばいい。……でもお前らは密室殺人に見せかける必要がある。何故なら、およそ不可能に見られる殺人が起きれば、この島では姫による裁きだと思われるから。まあ上位家は前言った理由からそんなことはないと分かるだろうけどさ、その時のお前らは姫の力を信じてたんだしな」

確かに恭輔くんの言う通り、あの事件の真相は簡単すぎる。何せ、当時十四歳の唯人お兄ちゃん人が人を殺してすっかり動転してしまつた頭で即興で考えたものなのだ。隠し通せるだなんて、ハナから思つていなかっただろう。

「まずお前が神宮冬賀の部屋に入って、内側から鍵をしめる。そして神宮唯人が外から突進して扉を突き破る。これだけだ」

恭輔くんはそう言うてから、またニヤリと笑う。

「どうだ？ 俺の話を否定できるか？」

私は全身に鳥肌がたつのが分かった。言い逃れはできない。恭輔

くんの言っていることは全て事実だ。言いがかりをつけることさえもできないほどの、完璧に理にかなった論理的な推理だ。

「おい、未香を苛めるなよ」

私の胸の内に莫大な希望が生まれ、一瞬にして感動が体中を満たした。

その声は、唯人お兄ちゃんのものだった。

恭輔くんは一度たじろいてから、ハツとつまらなそうに笑う。

「なんだ、起きてたのかよ。まあいいさ、聞いてたか？ 別に隠しだてするようなことじゃねえだろ。俺はミステリ小説つてのが好きでねえ、不可思議な現象には解答を見出して確認したくなるんだよ。それを容易にするために、科学だの何だのも学んでるんだ」

「ああ、正解してるよ。だけどこの程度のことを看破しただけで悦に入ろうなんてするのは思いがりも甚だしいよ。それともう一つ、忠告しておく。君が思っているような理想郷は、島の外には広がってなんかいない」

唯人お兄ちゃんが怒っているというのが、ひしひしと伝わってきた。唯人お兄ちゃんは、恭輔くんが私に手を出したことに怒っているのだ。それはとても嬉しいことで、私は不安になるよりも先にまず喜んでしまった。

そしてそんな唯人お兄ちゃんは、とびきり格好良かった。

私の憧れの、自慢の、従兄だ。

「今僕はこの島で絶体絶命の危機を迎えている。一步間違えれば殺されるし、間違えずとも僕にはもうすでに破滅の道しか残っていないのかもしれない。だけどこのような状況下にあっても、あの場所に帰りたいたとは、どうしても思えないんだ」

「……どうしてだよ、こんな無能まみれの茶番じみたふざけた島の方がマシだったのか？ 俺が今まで夢見てきた島の外が、こんな幼稚な島よりも劣悪だったのか？」

「そうだよ。この島よりあつちはもっとイカれてて、はつきり言って異常だ。僕はあの島に四年間で少し慣れてしまったことが、本当

に恐ろしい。全員が自分を特別だと思い込んでいて、自分にとって有益な存在のみを受け入れて、有害な存在を全て排除しようとする。そんな奴しかあそこにはいなかった。友情を口実に他人の秘密を平気な風に知ろうとして、愛情を口実に自らの欲を満たして、いくら嘘をついても良心が痛まずに、いくら裏切っても全て自分の中で勝手に正当化がされ、劣っている人を見れば嫉妬心から迫害する……そんな奴らを僕は何人も何人も、本当に何人も、腐るほど、飽きるほど、そんな異常に慣れてしまうほど、繰り返し繰り返し見続けてきた。文明が発達すれば、皆が優秀になれる、それは成程素敵なことだけど、奴らはそれと同時にどんどん他人を見下したがる。全員が、自慰ばかりの日々を送り続けるんだ。僕はみんなが怖かった、人だけじゃなくて、人が作った物が、思想が、制度が、全て怖かった。……あんな最悪な場所に、僕はまた行こうだなんて絶対に思えない」

恭輔くんはその言葉を受けて、何を返すべきか逡巡している様子だった。彼が押されている姿というのを、私は初めて見たかもしれない。しかしそれは仕方ないことだった。唯人お兄ちゃんが少しでも本気になれば、誰も敵わないのだ。

その時、家の玄関の扉が開く音がした。恭輔くんはベッドからすぐに下りると、家の正面の側についている窓から外を覗いた。

「帰ってきたみたいだな、お袋しか見えなかったけど、多分親父もだ」

続いて、すぐ近くの扉が開く音、これはおそらく、紗耶美ちゃんが部屋から出てきたのだろう。恭輔くんは慌てた様子でこの部屋を出た。そして廊下にいた紗耶美ちゃんを引きとめる。

「これから親や他の客が来た時は、俺が出る。お前は出るな。俺が出て、情報を引き出すことが大切なんだ」

紗耶美ちゃんは「うん、分かったよ、兄さん」と言って、自分の部屋に引き返して行った。

「すぐ戻る、待つてる」

恭輔くんはこの部屋の扉を閉めた。それと同時に、ベッドの上で今まで眠っていた琴音ちゃんが起き上がった。

私はそれからすぐに唯人お兄ちゃんに礼を言った。

「さつきはありがとう、お兄ちゃん。大好きっ」

私は体の向きを変えて、唯人お兄ちゃんに正面から抱きつく。温かい。

十分ほどすると再び玄関の扉が開く音がして、当然閉まる音がした。同時に、階段を誰かが二階に上がってくる音。

僕はその間、琴音ちゃんと会話していた。

「えー、じゃあ君達が捕まれば、君達を匿っていた恭輔や、その手助けをした私も何らかの処罰を受けることになるじゃないか。それは勘弁してもらいたいなあ。私は今まで振りかかる火の粉を極力断ち、波風起きないようにしながら一応順風満帆な人生を送ってきているからね、そのようなイレギュラーな事態というのは全力で遠慮したいよ。私と恭輔が島を出ることに繋がるっていうなら確かに協力するのにやぶさかではないけれど、もし君達が捕まるようなことがあったら、私と恭輔は君達に脅されていたと言うことにするよ」

しかし喋る量が一对三十くらいの掛け合いを会話と呼ぶのかは甚だ疑問だった。

部屋の扉が開き、恭輔くんが入ってくる。「おはよう恭輔！」と琴音ちゃんは僕へ話しかけてたのを全て放棄して、恭輔くんに手を振る。

「また出掛けて行っただぜ、どっちとも。しばらく帰ってこないってさ。まだ村人達は村中を血眼になって探してるって話だぜ、御苦労なことだな」

「この家は君と紗耶美ちゃんと父母しかいないのか？」

「ん、そうだけど。まあ確かに、この村じゃ珍しいよな。三世代くらい同居するのが普通の村だもんな。でもま、みんな死んじまったよ。早死にが多くてな……俺は絶対デブにはならねえ……」

後半はよく聞こえなかった。

「ねえ恭輔、私は一旦着替えてくるよ」

「ああ、分かった」

琴音ちゃんは恥じらいもせず僕達の前で恭輔くんに口づけすると、窓から窓へ、恭輔くんの部屋から自分の部屋へ、移動していった。着替えるためだろう、彼女はカーテンをしめた。

「さて、時間は無駄にできねえ。俺達はさっそく姫殺しの犯人を見つけなければならねえ。神宮家の密室殺人のことはひとまず置いておく、別に俺達は全てを解き明かす必要はねえ、あくまで姫殺しの犯人を告発すればいいんだ」

恭輔くんはそう言いながら、ベッドの上に飛び乗り、胡坐をかく。

「そうだね」

「俺が目をつけてんのは、神代家だ。神代三一二が琴吹病子と最近よく合って仲良くやってるらしいってのは目撃証言多発の有名な噂なんだ。姫暗殺を企てて実行した連中を裏切り者と呼ぼうか……上位家に裏切り者が多くいたのでは事は簡単に露見してしまう。だからあくまで裏切り者は上位家には少数。そしてその手足となる奴らが下級の家にいるはずなんだ。そう考えれば、処刑専門の家の娘である琴吹病子と神代三一二の関係はかなり怪しい」

「待ってくれ。そーいやさ、君は姫暗殺を企てる奴らの噂は、誰から聞いたの？　そこから辿る方法もあるんじゃないか？」

「……琴音だったかなあ、多分。でもそーだな、それはなかなかいい着眼点だ。……琴音が来たら、訊いてみるか。さて、神代三一二だよ、とりあえずその話だ」

恭輔くんは神代三一二にかなりこだわっているようだった。しかし、話を聞いてみれば確かに怪しい。

「第一、琴吹病子に長時間接していられるっていうのがまずおかし

いんだ。姫の許しがなければ殺しはしないと表向けには言っているが、実際のところはあんなの殺人鬼に変わりねえぞ。絶対に何かある。それに神代三一二なら女であることと言い、姫の代理にぴったりだ。そこそこ知能の高い奴だっけ話をよく聞くしな」

「で、どうするの？ その三一二って子に、接触するの？」

「そうだな、琴吹病子の方は危険すぎるから……。神代家なら、かなり近い。ここの四つ横の家だ」

上位四家はこの辺りに密集しているから、それは別に運が良かったとか、そういうことではない単なる必然だ。

しかしそれからの会話は、特に重要でもなければ、生産性も皆無だった。結局またこれまでのおさらいみたいなのをしただけで、三十分も経ってしまった。

「……琴音、遅いな。顔洗ったりしてんだと思うけど、これはかかりすぎだ」

会話が行き詰っていた中、恭輔くんはそう言って沈黙を破った。そして彼はベッドから下りて、神音家に向いてる方の窓に近づいていく。

恭輔くんは少し身を乗り出して、琴音ちゃんの部屋の窓を開けようとした。しかし、その窓は開かなかった。

「鍵？ おかしいな。なんで鍵をかけてるんだ？」

恭輔くんは窓を結構強めに叩く。しかしカーテンが開くことはなかった。

「おい、鍵はおかしいぞ。俺達は互いに鍵をかけることだけは絶対に今までしてこなかった……」

僕はそんなことはそれほど重要視することではないと思ったが、恭輔くんはかなり怪訝そうにしている。

「変だな。まあ、いいか」

恭輔くんは浮かない顔をしたままで、ベッドの上に戻った。

僕と恭輔くんはそれから話し合った結果、二人で神代家に行くことにした。恭輔くん一人で行くよりもはるかに話が早いし、戦闘め

いたことが起きてても優位に立てるためだ。

いつまでもただただ推測を述べ合っているだけでは、いつまでも解決しない。やはり、動くことは必要だ。その動きを効率よくするために、話し合いが必要なのだ。

その時、部屋の扉が外からノックされる音がした。「何だ」と恭輔くんが聞くと、扉ごしに「ご飯、つくったんだけど……」と言う。紗耶美ちゃんの声がした。「応、ありがと」と恭輔くんが言うと、紗耶美ちゃんは「うんっ！」と何やら嬉しそうな声を発した。これも全て扉ごしだけど。

「飯食つたら、行動開始するか。来いよ、親父とお袋はまだまだ帰ってこないぜ」

恭輔くんは立ち上がると、部屋から出る前にまた琴音ちゃんの部屋の窓を開けようとしたが、やはり鍵はかかったままだった。

僕らは部屋を出て、一階のリビングに下りた。琴音ちゃんが着替えてくると言っ自分の家に戻ってから、四十五分が経っていた。

## 神谷家への訪問者と神代家の内部

テーブルの上には三つチャー飯が置いてあった。この島でチャー飯なんてものを僕は初めて見た。

「俺の家、料理は島の外から結構知識得てるんだ。俺の親父、体型おかしいだろ？」

僕は曖昧に微笑んでお茶を濁した。

紗耶美ちゃんが作ってくれたらしいご飯の味はまあまあ出来だった。どうやら料理を作るのも大抵の場合紗耶美ちゃんの仕事みだ。僕は紗耶美ちゃんのことを少し可哀そうに思えたが、彼女は別段嫌がっている様子がなかったことを思い出す。

食器が三つもあつては帰つて来た紀久夫さん達が怪しむのではないかと僕は言ったが、恭輔くんは「あいつら馬鹿だから。今はお前から探すのに精一杯で、そんなとこに頭回んねえよ」と一蹴した。

食べ終わって食器をキッチンの流しの中に入れて、僕らはまた恭輔くんの部屋に戻る。

「もうしばらくしたら、出るぞ」

恭輔くんは食べたすぐ後に動くのは避けたいらしかった。意外と慎重な子だ。しかしこういう局面において、それは大事なことだとも思った。

現在の時刻は十時半過ぎ。昨日の僕は、まだこの島に着いていなかったのだ。それはちよつと信じられなかった。僕としては、もう一週間程度経つたくらいの心持ちなのだ。

恭輔くんはまた琴音ちゃんの部屋の窓を開けようとしていたが、やはり開かない。

「やっぱおかしいよな、これ。玄関から訪ねてこようかな……」

恭輔くんは独り言を言う。それから僕に振り返った。

「神代家に行った帰りに、琴音の家に俺は寄ることにするわ。お前はまっすぐ俺の部屋に戻ってくれればいいけど」

「僕らが神代家に言ってる間に紀久夫さん達が帰ってきたらどうするんだ？」

「……じゃあその場合は、神宮未香、お前がそっちの窓から何か合図を出してやれ」

未香は頷いた。未香はこの部屋に残る予定だ。この部屋は内側から鍵がかかるのだし、安全だろうと判断したのだ。それに引きこもりだった未香は、やはり「動く」のは苦手だろうから。

「僕は家に入る時に、この部屋の窓を見るようにすればいいんだな。他に何か起こりうる場合はないだろうか、と僕は考えることにした。」

「未香、悪いけど、窓から外の様子を窺ってて。いつ僕が帰ってきてもいいように」

「ちゃんと帰ってくる？ 危険な所に行くのでしょ？」

未香は恥ずかしいのか、小さな声で僕に訊いてくる。しかし恭輔くんの方は僕らには一瞥もくれずに、浮かない表情のまま琴音ちゃんの部屋の窓を見つめていた。鍵がかかっているのは、ここからでも見える。

僕は未香の柔らかい頬に手を当てる。

「大丈夫。今までも危険なことはたくさんあったけど、僕はその全てで死んでない。その時は絶対絶命だとか絶望的だとか思っていたことも、時間が経ってから振り返ってみれば、全部どうでもよくなるんだから。そうでしょ？」

もう死ぬしかないと思っただけの悲しみも、絶対に色あせることはないと思っただけの喜びも、全部すぐに忘れてしまうのだ。だから僕らは多分、いつだってしっかりと腰を据えていなければならぬ。そういう諸々を学んで、僕らは子供から解離し、幼い頃にひどくつまらない存在に思えた大人へと、近づいて行くのだ。

未香は僕の言葉を受けてもなお、不安そうな表情を隠せないようだった。

僕がもしも帰ってこなかったらどうするか、というような内容を、

僕は未香に言わなかった。未香をさらに怖がらせることになってしまつし、僕としても、帰って来なければならぬという事を自分に言い聞かせるという意味が、そこにはあった。

僕は、生きて、未香のところに帰ってくる。

四年前に島を追い出された僕がこの度ここに戻って来たのは全て姫に仕組まれたことだったけれど、次こそは、自分の意思を通して、未香に再開する。

僕はこの強いモチベーションが維持されている内に、この決意が固い内に、恭輔くんと言った。

「恭輔くん、行こう。時間が経てば経つほど、僕らが見つかる危険性は高くなるんだ」

「ああ、そうだな」

恭輔くんは頷いたけれど、またチラリと琴音ちゃんの部屋の窓に目を向けるのだった。

その時、緊張していた場の空気を一気にかき乱すかのような最悪なタイミングを、まるで狙い澄ましたかのように、家のチャイムが鳴った。恭輔くんは家の正面側の窓から外の様子を窺う。

「統吾さんか。おい、神音家は後回しだ。統吾さんから、いろいろ聞けるかもしれねえ」

恭輔くんはそう言つて、部屋を飛び出す。その時、思いついたかのように僕を見て「話はリビングですることにする。お前は先回りして、キッチンに潜んでろ。俺が全部の話を伝達することはできねえだろうからな、実際に聞いてた方が手っ取り早いだろ」と言った。僕はその通りだと思つて、恭輔くんと一緒に部屋を飛び出した。未香には「残つてて」と指示した。

一階に下りると、僕はキッチンに向かう。恭輔くんは玄関に出て行つて、扉を開けた。

キッチンで僕はうずくまり、呼吸を落ちつかせるように努める。呼吸音で統吾さんに僕の存在を気取られては、話にならない。

玄関から統吾さんと恭輔くんの声が聞こえてくるが、その内容ま

で聞き取ることはできない。声が、段々と近づいてくる。すぐに、リビングの中に二人が入って来るのが分かった。続いて、椅子を引く音。二人が机をはさんで向かい合うかたちで座ったのが分かった。「親御さん達は搜索に出てるんだね。うん、あの人達はそういうところは真面目だからな。でも所詮あれは指示待ち人間って感じだな。俺は独断と偏見によって、ここに来た」

「どういうことだよ。緊急事態なんだろ？ 回りくどいことは抜きにしようぜ、お互い」

「じゃあお言葉に甘えて、単刀直入に言う。君はこの家に唯人くと未香ちゃんを匿っていないかい？ そうでなくとも、彼らは一度ここに来たんじゃないのかい？」

僕はあまりの衝撃に「あっ！」と声を出しそうになってしまい、慌てて自分の口を手で塞いだ。

何故、統吾さんはそのような推測をしたのだ？ しかも彼の口調にはそのことを確信しているかのような自信がみられる。

「どっちもねえよ。どうやったらそんな間の抜けた考えが浮かぶんだ、あんたらしくねえな」

恭輔くんの言葉を聞くに、彼に動揺しているような様子はなかった。いや動揺はしているだろうが、それが全く表に出ていない。僕は恭輔くんを尊敬した。

「昨晚、この家の前で二人が一度発見されたんだ。結局逃げられてしまったけどな。だけど、おかしいと思わないか？ 何故二人はこんな風に住宅が密集して、一番発見される危険があるエリアにやって来たんだ？ 食べ物を得るためというのが真っ先に浮かぶが、それだつてわざわざ神音家と神谷家の真ん前に来る必要はない、それどころかここは避けるべきだろう。目立ち過ぎだ。結果、見つかった。俺はこう考えるね、二人はこの辺りの家に用があった」

「なるほどな、確かにそれは十分に考えられる。だからあんたはこの周辺の家を一軒一軒回って、今事情聴取してるって訳だ」

「いいや、俺はこの家だけにあたりをつけて来ているよ」

「は？　なんでだよ？」

「おかしいね、君なら、この理由を客観的な視点で以って理解できるはずだ。あの姫殺しの二人が、頼ることができる人間といたら誰だ？　それは、姫に反抗精神をむき出しにしている、自分達と歳の近い神谷恭輔に決まっているだろう！」

「随分飛躍してるな。神宮唯人は昨日ここに来たばつかで、神宮未香なんて引きこもりだ。面識のない人間に、頼って来る訳ねえだろ。あんたの言葉を借りるなら、わざわざ発見されそうになる危険まで冒してまで、助けてくれる可能性がちょっとあるかないかくらいの俺を訪ねてくる訳ねえだろ」

「うまい、と僕は思った。統吾さんの台詞を逆手に取った反論、これをさらにひっくり返すことは相当に難しいだろう。」

統吾さんは少しの間黙った。そうしてから、深い溜息をついた。二人がどのような表情をしているのかは、僕では分からない。

「俺は責任を感じているよ。君に姫に対する疑惑の念を抱かせた原因は、俺が君を外に連れて行ったことなんだからね」

「確かに、そうだな。あんたには感謝してるぜ。あの半年間が、俺に真実を教えてくれた。感受性の強い幼少期に俺を島の外に半年間もいさせるなんていう失態をあんたがしてくれたおかげだ！」

京香姉さんから以前、恭輔くんは半年間島の外に出ていた時に姫への反抗心を芽生えさせたとは聞いていたけれど、それが統吾さんによってだとは知らなかった。

恭輔くんと統吾さんにそのような関係……因縁があるとは、思わなかった。その辺の事情も、恭輔くんが未だ処罰を受けていない原因になっているのかもしれない。何しろ、恭輔くんを裁くのならば、彼の罪の原因となった統吾さん……この島で姫に次ぐ権力を持つ統吾さんまでも裁かなければならないのだから。

「否定する気はないよ。あれは俺が唯一自分の人生の内です失敗したと思っっている出来事だ」

「そうかい！　あんたは俺の存在を認めない訳だな！　やっぱり気

に入らねえぜ、あんた程の知識人が、何故姫の馬鹿馬鹿しい茶番に付き合うのか、気が知れねえぜ」

「俺から言わせてもらえれば、君の方がよっぽど馬鹿馬鹿しい。俺だって幼い頃、姫に反抗しようとしたことがある。だけどそれは若気の至りというものだよ！ 君はそれが度を越してしまっている。危機察知能力がないのか？ 姫が今回殺されていなければ、君はきつと一カ月以内には裁きにあっていたよ」

「裁き？ ああ、あんたが姫の指示に従ってほいほい動いて、琴吹家に俺の殺害を頼むのか？ そしてそれを姫の裁きなんて呼ぶのかへえ、こいつぁお笑いだ。若気の至り、だって？ 自分はもう老獪したつもりなのかい、坊ちゃん」

ガタン、と椅子が動く音がした。

……しかし、それに続くかと思われた怒声は、いつまでたっても聞こえなかった。

「あんた、本当に姫宮唯人と姫宮未香が姫を殺したと思ってるのか？」

「そうだな、それ以外には考えにくいだろ」

「とことんあんたには失望したぜ。知ってるだろ、姫を暗殺する計画が以前から影で進行していたこと」

「俺も琴音から聞いたがね、あんなの嘘っぱちに決まってるだろ。もつと現実的で分かりやすい解答があるのだから、素直にそれを認めるべきさ。唯人くんは四年間島の外に出て、姫をまったく信じなくなつた。そして戻ってきて早々、未香ちゃんを口説いて仲良く姫殺した。君は天の邪鬼を演じて格好をつけているつもりだろうけど、それが真実だよ」

すると恭輔くんは笑いだした。今まで彼のもので聞いた中では最も大きな笑い声だった。

「あんたと話せば有益な情報が手に入るかと思つたが、興冷めだ。帰ってくれよ、あんたの妄想通りに神宮唯人と神宮未香がこのこ訪ねてきたら、ちゃんと教えてやるからよ」

「……ああ、俺もこんな不愉快な餓鬼と話している程、暇じゃない」  
「ははっ、あんたから来といてその言い草はねえだろ！」

統吾さんはそれに答えなかった。代わりに、椅子を引く音と、立ち上がる音。少ししてから、玄関の扉が閉じる音。

「上出来だっただろ」

恭輔くんの声がした。

「そうだね」

僕はキツチンから答えた。

「さて、無いとは思うが、頭を冷やしたあいつがまた戻ってこないとも言い切れねえ。さっさと神代家に行こうぜ。神宮未香に、伝えて来い」

僕は立ち上がると、未香が待つ恭輔くんの部屋に戻った。扉を開いて「神代家に、行ってくる」と未香に告げた。未香はそれを聞くと、今にも泣き出しそうな顔をして、僕に駆け寄って来た。抱きつこうとしてきたので、僕は腕を広げたが、彼女はそこで思い直したように一歩後ろに退いた。

「帰ってきたら、抱きしめて。お兄ちゃん」

その愛くるしい台詞に、僕は未香を今すぐに抱きしめたくなくなったけれど、それを我慢して、強気に答えた。

「絶対に、帰ってくる」

僕は扉を閉めた。未香がちゃんと部屋の鍵を内側からかける音を扉ごしに聞いてから、階段を下って、恭輔くと共に玄関から外に出て、扉を閉める。小さく「行ってきました」と呟いた。頭の中で、未香が「行つてらっしゃい」と言っただけで微笑んだ。

恭輔くんは先に通路に出て、左右を確認した。そうしてから、また家の敷地内に戻って来た。小声で僕に「駄目だ。来てる」と言っただけで、小走りで家の庭の方に回り込む。僕は無言でそれについていく。

家の裏側のブロック塀を、恭輔くんは乗り越えた。僕も余裕でそれに続く。神谷家の裏は林になっている。成程、この林の中を進んで、神代家には裏から入るのか。馬鹿正直に通路を使うのよりも、

何倍も安全だ。

神谷家の四つ隣の家が、神代家の家らしかった。僕と恭輔くんはまたブロック塀を乗り越えて、神代家の敷地内に入る。足音を忍ばせて、家の正面に向かう。

目標である神代三一二は、都合よく家にいてくれるのだろうか。そしてその家族も都合よく家の外に出ているなどということが、あるのだろうか。

僕は今からやろうとしていることがとても危険なことだということとを、今頃になって認識した。全身から嫌な汗が出る。

家の正面に行くまでもなく、途中で開いている窓があった。中をこっそりと見ると、そこはキッチンになっていた。人の気配はない。恭輔くんはその窓から、家の中に入る。僕も続く。

キッチンとダイニングとリビングが繋がっている構造になっていた。た。

僕はリビングの床で、血まみれの女性が死んでいるのを見た。

「……………」

僕も恭輔くんも、言葉を失う。

神代家には、死臭が満ちていた。

血の色が、まだ赤い。酸化が進んでいないのだ。まだ、殺されたばかりだ。

そう、殺されている。自殺で、あんなに体を滅多刺しにできるはずがない。

完全なる無音。もうこの家に生きている人間は、きつといない。

今僕らが見ているのは女性の死体一体だけだが、それがこの家の中にある死体の全てだとは、僕も恭輔くんも思っていないかった。

神代家には村人は集まって来ていない。つまり、あの死体を見つけた家族は、まだ村人達に助けを求めているのだ。

まだ家族が戻ってきていないと考えるのも、今まさに助けを呼びに行っているところなのだと考えるのも、簡単だ。だけど、もしも他の家族も助けに行けない状況に置かれているのだとしたら、どう

だろう。

神代家の人間のほとんどは、すでに殺されているのではないだろうか。

そして、その推測を確信させるほどの死臭が、この家にはたちこめていた。

「神代三一二の部屋に……とりあえず、行こう。何か、あるかもしれない……」

恭輔くんはそう言って、キッチンの脇にあった扉を開けた。扉の向こうは廊下になっていた。床にはあちこちに血が垂れていた。

むせかえるような死臭を嗅ぎながら、僕らは力の抜けてしまった足を無理矢理動かして、廊下を歩いていく。

廊下を進むと、右に階段があり、左にはさらに廊下が続いていた。左に目を向けると、廊下の向こうには玄関があつて、そこに男性の死体があつた。仰向けに倒れていて、切り開かれたお腹の中身が、ごっそりなくなっているのが見えた。

一階にある部屋はリビング・ダイニング・キッチン・洗面所・風呂・トイレで全teraしかつたので、僕と恭輔くんは階段を上がることにする。

階段の上を、ずるずると何か長いものが這っていた。それは人間の腸だと分かった。階段の上から下にかけて、どろどろの腸が敷かれているのだ。

僕は大声をあげたくなつた。大声をあげて、狂つたように壁を叩きたかつた。叩いて叩いて壁に穴が開いてもなお叩き続けて僕の拳が血まみれになって骨が出てしまつても気にせず発狂したまま家の壁のあちこちを叩き続けたかつた。こんなところで無言でいたら、誰でも気が狂つてしまふに違いないのだ。

僕は駆けあがる様にして階段を上がる。もう、足音を忍ばせるなんていう考えは頭になかつた。

二階にはいくつかの部屋が並んでいて、扉が開いている部屋が二つあつた。その内、奥の方の部屋から、ガタガタと音がするのに僕

は気がついた。

誰かが、いるのだ。

この血まみれで死まみれの家の中に、生きている者が、いるのだ。助けを呼びにも行かずに、まだ家の中に残っている者が、いるのだ。

そいつはこの惨状を作りだした人間に、違いないのだ。

僕は振り返って、震えた声のまま、恭輔くんに小声で言った。

「僕が先に行く。良いタイミングで、君は来て。僕が殺されたら、君は逃げるんだ。未香を、よろしく」

恭輔くんは蒼白になってしまった顔を、縦に振った。

僕は、一步、物音のする部屋に近づく。地球の重力が三十倍になったのかと勘違いするほどに、自分の足は重かった。また一步、踏み出す。また一步、さらに一步、その度に、精神が壊れてしまいそうになった。

途中で、扉が開いている部屋の内の一つの前を、通過する。しかし僕はその中に目を向けようとは思わない。そこにはまた、どうしようもない死が満ちているに違いないのだ。僕は、そんなものをわざわざ好き好んで見るような変態では、ない。その変態は、僕がこれから行く部屋の中に、いる。

僕は問題の部屋に、辿り着いた。恐ろしく長い時間がかかったように、体感した。

部屋の中に、目を向ける。

「……………は？」

血だらけになった人間の首を両手で挟むようにして持ち、その顔を幸せそうな表情をして舐めている女の子が、そこにはいた。

## 琴吹病子の愛情論

血だらけになった人間の首を両手で挟むようにして持ち、その顔を幸せそうな表情をして舐めている女の子が、そこにはいた。

髪型はソバージュ……というには少し雑すぎる切り方がされていて、服装はタンクトップにジーパン、年齢は僕よりも二つか三つ年下に見え、発育が良いとはとても言えない貧弱そうな体つきをしている。肌は人のものとは思えない程に白い。

女の子はジロリと黒目だけを僕に向けてきた。僕は一步退くことすらできなかつた。残酷すぎる映像を目の当たりにして、足がすくみ、動かすことも叶わなくなつたのだ。背中を汗が流れるのが分かる。僕はもう、女の子から目を逸らすことも出来やしない。それでも言葉を発することはできた、しかしそれは自分がまだ生きているという実感を求めている咄嗟の発言であつた。

「君が、神代三一二ちゃん？」

女の子は今まで舐めていた人間の首を抱きかかえるようにして、僕の方に向き直つた。そして、満面の笑みを浮かべ、無邪気な声で……無邪気な声？ そんなはずがない。死人の生首を舐めるだなんて異常が無邪気と表現するのは僕としては逃避でしかない。認めなければならぬ。僕に今頬笑みかけている女の子は、リビングの女性を殺し、玄関の男性を殺してその腸を階段を上るまでずるずる引きずり歩き、すぐ近くの部屋でも誰かを殺して、この部屋でも同じく殺人をしてその死体の生首を恍惚とした表情で一心不乱に舐め続けていた異常な殺人犯なのだ。

僕は直感的に、黙ってはいけないと悟つた。一定以上に沈黙が続いた時、この女の子は僕をも殺すだろう。僕は女の子の横にある血まみれの包丁が目に入っていないだなんて言わない。

「君が、神代三一二ちゃん？」

僕は同じ質問を繰り返した。するとにこにここと微笑み続けていた

女の子は、口を大きく開いて、真っ赤な舌を出した。そして僕は、今まで女の子が喋らなかつた理由を知ることになった。

女の子の口からころんと出てきたのは、潰れた、人間の眼球だった。

女の子が愛おしげに抱きかかえている生首の顔面は僕に向けられていて、その左目があるはずの場所はがらんと空洞になっていた。

「みいにちゃんは、こっちですよ。今、死んでしまったのです」

女の子は外見に不釣り合いな丁寧な言葉遣いをした。話しながら、生首を抱く力を一度ぎゅっと強めたのが分かった。

「君が殺したの？」

「そうですね。私、みいにちゃんのこと、好きですから」

僕は首を傾げることになった。女の子の言葉がひどく不自然だったからだ。しかし、間違えた、訳でもなさそうだ。

「好きなのに、殺したの？」

女の子はくすりと笑ってから、首を横に振った。

「好きだから、殺したのです」

僕はいよいよ訳が分からなくなる。もしかして、この女の子の言葉に意味なんてものはないのだろうか。だとしたら、僕はこの女の子を理解しようとするだけ徒労を味わうことになるのだろうか。

しかしその時、今までとは打って変わって、女の子は突然饒舌な風に喋り出した。

「ある特定の人を好きで居続けるのって、とても難しいとは思いませんか。勿論最初の内こそお互いに自分が相手に向ける莫大な愛情がこの先薄まることなどあり得ないと確信しているでしょうけれど、実際時が経てば相手に飽きてしまうじゃないですか。私、パパとママ見ていて思ったのですよ、きつと出逢った初めの頃は毎日のように抱き合ってキスして合いの言葉を交わし合って献身して依存し合って性的なこととして深く愛し合っていたはずなのに、時間が経過して老いる内に、もうその内の一つだって継続してないのです。悲しくて嫌だったので、私はパパもママも他の家族も全員殺しました。」

その時はパパもママもお兄ちゃんも伯父さんも叔母さんも従弟も皆私に愛情を向けていてくれたので、その内に殺しておきたかったのです。あの人達がいつか私に飽きてしまったら、私はとても苦しい思いをすることが目に見えていましたから。でももう殺しましたから、あの愛は永遠に失われることがないのです。私なら大丈夫、私は一度愛した人は永遠に愛し続けます。あの人達は私に殺されて、今も私を愛して私に愛されているのです。これはとても美しいことですし、幸せなことですよね」

僕はすっかり呆気にとられてしまい、自分が今とても阿呆な面構えをしていることも認識していたけれど、開いた口を塞ぐことも見開いた目を閉じることも傾けた首を真っすぐに直すことも逃げることも何も出来なかった。

女の子はそれでも狂ったような笑みを浮かべたまま、ハキハキと楽しそうに話し続ける。その口調は自慢話でもしているかのようで、その話をするのが誇らしくて堪らないという様子が手に取る様に分かった。

「それとですね、私の愛は重すぎるのです。だから、殺してしまうのです。つまり、殺すことこそが私の愛の証明なのです。お分かりですか。人にとって生きる上での優先順位は、一に生き残ること、二に子孫を残すことであると、私は考えています。愛情とはこの内の後者のためにある感情ですね。そして愛情を向ける相手には、尽くしたいと思うのが乙女というものですよ。私の愛は莫大すぎて、それ故その献身意欲は強すぎて、最優先事項である生き残ることを脅かすほどののです。相手のためなら、自分を捨ててもいいと思えてしまうのです。だから私は生きるために、愛した相手を殺さなくてはならないのです。私は悲劇の主人公です。だけど、それも先程お話しした通り相手との愛を永遠のものへと昇華させるためなので、私は耐えられるのです。これは、素敵な生き方だと思います。私は真実の愛を知っているのです」

女の子の独白はそれで終了したらしく、僕はすぐに次の質問をし

なければならなかった。女の子が話した内容を僕は少しも理解していなかったけれど、とにかく分かった事と言えば、この子はどんな理由でも人を殺せるということだ。この子は好きでも嫌いでも無関係でも何でも、誰でも殺せるのだ。

「君は、琴吹病子ちゃん？」

この推測は容易にできた。まず、こんな若い女の子が何人もの人間を殺しているということから、この子は殺人の技術に長けていることが分かるし、先程の話から、この子は自分の家族を皆殺しにしたことがあると分かる。そこから真つ先に浮かぶ人物と言えば、三二ちゃんと関連がある人物ということからも、琴吹家の当主である病子ちゃんしかない。

「そうです」

案の定、女の子は病子ちゃんだった。

しかし、妙だ。恭輔くんの話では、病子ちゃんは三二ちゃんと仲が良かったようだし、姫暗殺を企てる三二ちゃんの協力者が病子ちゃんだったはずだ。なのに、病子ちゃんは三二ちゃんを殺したのだろうか。……何故？ それに、全ての元凶である三二ちゃんはどうして呆気なく死んでいる。僕はどうすればいいのだ？ とにかく、この場をなんとか生き残らなければならないのは、分かるけれど。

「なんで、三二ちゃんを殺したんだ？」

「愛しているからだと説明したばかりではありませんか。それと、ここで愛されている夫婦を見てください」

病子ちゃんが示した先に目を向けると、床に、血染めの男性と血染めの女性が倒れていた。明らかに死んでいるこの夫婦に、僕は見覚えがあった。神谷家に僕と未香が向かっている時に、一度会って少し話した夫婦だった。そして僕は思い出す、彼らが琴吹家に向かっていたということ。

「私はこの夫婦について先程初めて出逢い、そして恋に落ちたのです。だから殺して、ここまで連れて来てあげました。私は姫様から、こ

の二人と近々邂逅するように言われていたのです。話を聞けば、この二人は愛していた息子が突然行方不明になってしまい、ひどく悲しんでいたようです。一人息子がいなくなったことを悲しむだなんて、とても慈悲深い方達だと思つくと、すぐに愛情を向ける対象となりました」

「ちよ、ちよつと待つて。その人達の息子は、いつからいなくなったの？」

僕にはある考えが浮かんでいた。そしてそれは、おそらく当たっている。この島で行方不明事件なんてことが起こるのはあり得ないのだから。

「三日前らしいです。ただ、姫様は彼らの息子がなくなってしまつたことを、五日前に私にお話ししていました」

ならばその息子さんというのは、もうこの世にはいない。彼は僕の両親が乗る自動車にトラックに乗つて故意に衝突し、死んでしまつたのだから。

「姫様も殺されてしまつたようです。私は姫様を愛していました。姫様は私とその先祖を生まれながらの処刑人にしました。人を殺すのが嫌だつた方もいたでしょう。しかしそれでも私達は人を殺すしかなかったし、そもそも人を殺すことだけが姫様がお与えになつた私達の存在意義だつたのです。私達にとつて姫は絶対の存在です。私はずつと姫様のことを想つておりました。愛しておりました。なので、姫様の死体は今、私の家に大事に置いてあります。仕事がありましたのと、三一二ちゃんに呼ばれていたのです、まだ深く愛し合う儀式をしてはいないので、帰つてから彼女の死体を堪能するのが、私は今の内から楽しみで仕方ありません」

「三一二ちゃんは、どうして君を呼んだの？」

僕は緊張しつつも、このまま上手くやれば、病子ちゃんから情報を引き出して、この場から逃げることもできるかもしれないと思つていた。思つたよりも病子ちゃんは話が通じる相手だし、少しばかりの理性と知性は持っているようだったから。

だけどそれは、浅はかな考えだった。

病子ちゃんが言葉だけで上手く御せる程度の相手なら、この神代家での悲劇は起こるはずもなかったのだ。

病子ちゃんは相変わらず笑い続けたまま、言った。

「謝罪します。私は遂に限界を迎えました。あなたを殺さずにはいられない。あなたは私に数々の質問をしてくれます。私を理解しようと努めてくれます。そのような探究心を向けられていると、私は胸の内から湧きあがる愛情を表現せずにはいられなくなるのです」  
病子ちゃんは三二二ちゃんの生首をベッドの上に置くと、包丁を握って、立ち上がった。

動かなければならない、逃げなければならぬ、と僕は確信していた。しかし僕が動くよりも先に、病子ちゃんは視認することがいささか難しい程の速度で以って、僕に接近していた。

僕は完全に油断していたのだ。

病子ちゃんは慣れた動きで、包丁を正面から僕の胸目がけて突き出してきた。僕は咄嗟に、屈んだ。横に跳ぶことは出来なかった。ナイフは僕の頭上をかすめて、背後の壁に突き刺さる。座りこんだ僕の真上に病子ちゃんは位置している。僕が顔を上に向けると、病子ちゃんはすでに僕を見下ろして笑みを浮かべ続けていた。

そして僕は病子ちゃんに上から乗られた。僕は後頭部を床にしたたかに打ちつけることになった。僕の腹に病子ちゃんは馬乗りしている。もうこの状態から形成を逆転することはできない。諦めるつもりがなくとも、僕にはもう足掻きようがなかった。病子ちゃんはそれから壁に突き刺さっていた包丁を抜く。

ああ、僕は間違いなく殺される。

真っ先に頭に浮かんだのは未香のことだった。僕は未香を護らなければならぬ。必ず帰ると、約束した。しかしそれはもう護れない。不本意だが、未香のことは恭輔くん任せしかない。そうだ、恭輔くんは？

まさにその時、恭輔くんが、僕らの真横にいて、両手に何かを持

って、それを病子ちゃん目がけて振り下ろしていた。

しかしこのような殺す殺されるの瀬戸際を、処刑を家業とする琴吹家の統領である病子ちゃんは幾度となく経験している。このような場合では経験が生きる、当たり前だ。病子ちゃんは自分が突然の第三者の介入により危機的状況に陥ったことをすぐに認識して、恭輔くんの攻撃から身をかわした。それでもかわしきれずに恭輔くんの振り下ろした……置物だ、あれは陶器だ……陶器に背中を打ちつけられたが、当初狙われていた頭部は、攻撃を避けることができていた。ここで彼女に致命的なダメージを与えられなかったのはどう考えても失敗だったが、それでもひとまず僕の上から病子ちゃんは退いて僕は助かったのだから、恭輔くに文句を言うことはできない。

僕は立ち上がり、恭輔くと並んで、病子ちゃんと対峙した。病子ちゃんは、打ちつけられた背中をさすって、顔を苦痛に歪めていたけれど、口元だけは笑ったままだった。

「痛いですが……これは愛を感じますね。あなたのこと好きになっ  
てしまいました」

隣で恭輔くんが身震いするのが分かった。

病子ちゃんはすぐにまた動いた。上半身を前傾させて、僕らに向かってくる。わずかにメートル程の距離は、すぐに埋められる。僕も恭輔くんも、何をすればいいのか分からなかった……分からなかったから、恭輔くんは深く考えもせずにもまた、陶器を振り上げた。

病子ちゃんの頭に今度こそ振り下ろすつもりなのだ、しかし、その行動は愚かだった。両手を振り上げている恭輔くんは、腹への攻撃を防御することができないのだ。当然病子ちゃんは包丁を横振りして、恭輔くんの腹を掻っ切るうとする。

僕もその時はただ、目の前で恭輔くんが殺されようとしているのを止めたい一心で、深く考えもせずに、動いていた。

僕は恭輔くんから横から思い切り体をぶつけ、彼を突き飛ばした。

恭輔くんはすぐ隣にあった壁まで吹っ飛び、彼が持っていた陶器は

見当違いの方向に飛んでいった。恭輔くんが今までいた位置には代わりに僕がいて、それはつまり、本来斬り付けられるはずだった恭輔くんの代わりに僕が斬り付けられることを意味していた。

僕は腹を左から右に冷たくて堅い感触が一閃するようにはしつていくのを感じた。どばあと、少量とはとても言えない血液が傷口から吐き出される。少し遅れて、燃えるような痛みが全身を駆け巡った。本当に燃えているみたいなのだ、そのくらいに体中がたちまち熱くなった。視界が一度ぶれて、頭痛が始まるのと共に吐き気を催した。

僕の顔に浴びた病子ちゃんの笑顔が、視界の下の方に入る。僕はどんな表情を浮かべているのだろう、苦しそうにしているというのが一般的な見解だろうけれど、僕としては自分がひたすら笑っているような気がしてならなかった。きつと僕は痛みのみあまり、頭がおかしくなってしまったに違いなかった。

いかれた僕は、病子ちゃんの包丁を持っていない方の手を握っていた。すると病子ちゃんが包丁をすぐに、今度は僕の顔面目がけて真つすぐに突き出すのが見えた。これはきつと、反射神経だ、僕は病子ちゃんの手を握っていない方の手を、包丁に向けて突き出したのだ。手の平に包丁の先端が当たり、すぐに皮膚が破れ、肉が裂ける感触がある。これはカウンターが逆に決められたようなものなのだから、かなり奥まで包丁は入っただろう。それでも貫通してはないらしいのが救いだっただ、でも骨に到達しているのは感覚的に分かっていた。

僕は左手で病子ちゃんの左手を握っている。そして右手で病子ちゃんが右手に持っているナイフを受け止めている。僕は今病子ちゃんを捕まえていた。

僕は前方に倒れ込んだ。腹を斬られたことで、どの道立ってはいられなかったのだ。病子ちゃんもバランスを崩して、後ろ向きに倒れる。僕はその上に覆いかぶさる。左手に突き刺さった包丁は、骨をかわし、さらに奥に入ってくる。そして病子ちゃんは床に倒れ、

僕はその上に乗っていた。ついさつきとは、まるで逆の体勢になっていた。僕はあの状況を、恭輔さんの助けによって打破できた。しかし恭輔くんは、病子ちゃんのことには助けがない。

つまり僕は病子ちゃんを拘束できていた。

腹からは血液が流れ続ける。左手は痙攣し、血の気は失せ、冷たくなってしまっている。今にも激痛と貧血で、意識がなくなりそうだ。

「あなたの名前を教えてください」

朦朧とする意識の中で、僕はそんなひどく場違いな質問を受けた気がした。

「神宮、唯人。神宮未香の幼馴染で、姫を、殺した男だ……あれ、違うな、僕は姫を殺していない。僕は今、この島の全てを敵に回して、姫を殺した張本人を探している……いや、真犯人を見つけている……見つけていないのか」

「あなたが姫様を殺したのではないのですか」

「違う、それは違う……姫を殺した奴は他にいる。僕は未香を護らなきゃ……頼む、恭輔くん」

限界だった。僕の意識はそこで途切れた。

耳元で「あなたのことは嫌いです」だか何だか、そんな風な言葉が聞こえたのは、現実だっただろうか、幻想だっただろうか……。

## 琴吹病子の愛情論（後書き）

こんにちは。

生意気なことを言うようですが、お気に入り登録と評価とメッセージはちらほらと受け取っているのですが、やはり感想覧に何も無いのが寂しいです。

「あれ、今の話の流れ駄目なのかな良いのかな」と不安になってしまつので、感想くださると嬉しいです。批判も勿論受け付けております。

そろそろ数々の真相が暴かれる頃合いです。結末を予測しながら読んでいただければ、冥利に尽きるお話であります。

## 琴吹病子からの事情聴取

意識が回復した時、僕は布団に寝かされていた。服の腹の辺りには穴があいていて、そこからは不器用に包帯が巻かれているのが見える。包帯には少し血が滲んでいたが、今はもう血は止まっているようだった。左手も同じようにされていて、包帯の下にガーゼがあるのも分かった。この分ではきつと、消毒もされているのだろう。誰が僕の怪我の手当てをしたのかと思っただが、すぐに恭輔くんが僕の隣から話しかけてきて、疑問は解かれた。

「意外に早く目覚めたじゃねえか。まだ一時間程度しか経ってないぜ」

恭輔くんは僕の隣で胡坐をかいていた。僕は傷の手当てをしてくれたらしい恭輔くんに礼を言おうとしたが、すぐに別の声がそれを遮った。

「あー、目を覚ましてくれたのですね。嬉しいです。ところで唯人様もお目覚めになったのですから、そろそろ私を開放していただけないですか。かなり窮屈です。体のあちこちがギシギシと痛いんです」  
僕は飛び起きた。腹に激痛がはしる。「おい急に動くなよ。俺、止血とかそんな上手にしてないんだからよ」と横から恭輔くんが言う。

僕は正面に目を向ける。壁際に、体中をロープでぐるぐる巻きにされている病子ちゃんがいた。

「心配しなくていいですよ。私は唯人様のごことは嫌いなので、殺すことなどあるはずがないのです。ちなみに恭輔くんのごことは愛しているのです、今も殺してしまいたいと思っています」

僕は喜べばいいのか落ち込めばいいのか分かりづらいポジションみたいだった。

「じゃあ、神宮唯人も起きたし、事情聴取を始めるか」

恭輔くんは病子ちゃん言葉を見殺しする。どうやらこのように縛ってしまった今となっては、恭輔くんは病子ちゃんに怯えているということはないようだった。

おそらく恭輔くんは、僕が気を失った直後に、病子ちゃんを僕に続いて取り押さえて、こうして拘束したのだろう。ここは寝室みたいで、布団が二つ並べてある。鼻をつく死臭から、ここがまだ神代家の中だということが分かった。

「まず、お前は何故ここに来たんだ」

「私がそれに答えたら、お返しに何をしてくれるのですか。あるいは、私がそれに答えなければ、罰として何をされるのですか。それが釈然としない内に易々と情報を渡すことはできないのです」

病子ちゃんは縄に縛られたこの状況においても、特に臆しているような態度をとってはいなかった。恭輔くんはあからさまに舌打ちする。

……ただ僕は、早くこの家を去りたかったし、病子ちゃんに事情聴取なんて別にしなくてもいいと考えていた。病子ちゃんは台詞返しこそ丁寧で慣れた風でこの島の人間の基準以上の知性はあるが、その人間性は破綻を喫していて、とても通常の対応を期待できそうにはない。故にその発言は信頼性が低いし、このような子が姫暗殺に関わっていたかどうかも怪しい話だ。仲が良かったはずの三二二ちゃんを殺していることから、仲間にできそうな子ではない、それは姫暗殺を企てていた連中からしても同じだろう。それに僕は、こんな死体まみれの家に、これ以上一秒たりとも居たくなかった。このままここで血のにおいをかいてみると、いささかの誇張もなく、病子ちゃんのように頭がおかしくなってしまうようだったのだ。

「答えたら、解放してやる。答えなかったら、殺す」

「殺すというのは、私に恋心を抱いているからですか？」

「違いよ。お前が嫌いだから、殺すんだ」

恭輔くんが面倒くさそうに答えると、病子ちゃんは「えええ！」と叫び声をあげた。その声があまりに大きかったので助けでも呼ぶ気だと思っただのか、恭輔くんは腰を浮かした。しかし病子ちゃんはそのような企みがあった訳ではなく、単純に恭輔くんの言葉に衝撃を受けただけのようだった。

「それは嫌です。最後の最後に誰にも愛されずに殺されるのは、私が最も忌避すべき最悪の事態です。それに、私は今まで愛してきた人達との愛を少しでも持続しておきたいのに、殺されてしまうのもどうかと思いますし……。そうですね、私、まだ死ぬのは怖いですが、じゃあ早く答える。時間がねえんだよ」

そうだ、僕らには時間がない。未香を恭輔くんの家に残しているのだ。僕は早く戻らなければならぬ。

僕は自分の腹に目を向けた。意識すると、ひりひりと痛い。思ったよりも傷は浅いようだったが、それでもこの負傷はこれからの動きが相当不利になってしまいうに違いない。僕はこの傷を受けたことを後悔していた。もっと利口に、最小限の傷で病子ちゃんを捕獲する方法があったはずなのだ。

「昨晚は私の家に中森夫婦を招いていました。姫様に指示されて、二人と邂逅することになっていたので。そして私はすっかり彼らに惚れてしまい、殺害しました。そして、今朝にはみににちゃんとうう約束をしていたので、中森夫婦の死骸を引きずりながら外に出ました。すると騒ぎが起きていて、村人の一人に姫様が死亡したことを伝えられました。神宮唯人、神宮未香がその犯人だとも聞きました。私は姫様の死体を自分に預けるように手配しました。一旦家に戻り、姫の死体を手に入れた後に、また中森夫妻と共に家を出てここに来ました。玄関口でみににちゃんのお父さんが私の姿を見て突然襲い掛かって来たので、何かこう……愛情が湧いて、殺しました。自分の夫が殺されたことでみににちゃんのお母さんが叫び声をあげたことに心打たれ、彼女も殺しました。二階からみににちゃんの声がしたので、みににちゃんのお父さんのお腹の中を弄くり回し

ていた私は、それを中断して、中森夫婦だけ連れて二階に上がりました。ああ、中森夫婦の足にみいにちゃんのお父さんの中身が絡みついて、途中までついてきてくれていましたね……あれはどうなったのでしょうか。みいにちゃんの部屋と間違つて、みいにちゃんの祖母の部屋を開けてしまったので、てれ隠しに彼女を殺して……みいにちゃんの部屋に入りました。多くの人々の愛に触れた私は興奮状態にあつたので、大好きなみいにちゃんを前にして、殺したいという衝動を抑えることは出来ませんでした。みいにちゃんはしつこいくらいに私に絡んでくれる子で、以前から常々殺したいと考えていたのです。そして、彼女を愛し続けていると、唯人様が入つてこられて、その先は唯人様達の知る通りです」

病子ちゃんの話は要点が絞られていて分かりやすかった。と言っても、やはり所々意味が分かりかねる部分はあるのだが……、大筋を理解することはできた。真偽は定かではないが、大体は信用していいだろうと判断できる。

「姫の死体を手に入れるなんて、どうやったんだよ」

恭輔くんはそう指摘した。特に重要な質問とも思えなかったが、恭輔くんは些細な疑問を放置することができないタチのようだし、確認しておきたいのだろう。

「統吾さんに頼みました。そうしたら手配してくれるとのことでした。姫がいなくなつた今、一番の権力者は統吾さんなのだろうと判断しての行動です」

「はあん。まあ、琴吹病子に面と向かつて頼み事されちゃあ、断れないよな。統吾さんとは、結構付き合ひあるのか？」

「いいえ。直接お話ししたのは、今日で二度目くらいだと思います。ところで、私も質問したいことがあるのですが、よろしいでしょうか」

「よくないよ」

恭輔くんが一蹴すると、病子ちゃんは「ええ、いいじゃないですか」と抗議の声をあげた。何だか、シニールな画だと思った。……

こんな死体まみれの家の中にいるというのに、いつしか僕も恭輔くんも、慣れてしまっているのだ。僕はそのことに気付いて、戦慄した。こんな場所で、こんな子と話をしている今の僕らは、異常者であるに違いない。

しかし恭輔くんはそのことを知ってか知らずか、病子ちゃんに、まるで仲の良い友達を相手にしているかのように「駄目だ。今自分が拘束されてる立場だっという認識が足りてないんじゃないか」なんて言っている。一方の病子ちゃんは、恭輔くんの言葉にも構わなくなつて、僕の方に向き直つた。

「唯人様、先程おっしゃってましたよね、姫様を殺したのは自分ではないと。あれは、どういうことなのでしょうか」

質問が僕に向けられたものだったからだろうか、恭輔くんは黙つて、僕の様子を窺うようにした。

僕は質問に答えた。自分の身の潔白を知っている者は、少しでも多い方が良いに決まっているのだ。

「僕は姫を殺していない。勿論未香も、そうだ。犯人は、他にいます。そいつは姫だけじゃなくて、僕と未香意外の神宮家の人間を全員殺しました。きつと、僕と未香に味方がいなくなるようにするためだ。彼らを殺せば、僕と未香にはアリバイを証言してくれる人もいなくなるのだしね」

「そして今唯人様は、その真犯人を捜し出すために、このように動いているのですか。真犯人を告発し、身の潔白を証明するつもりなのですね」

「そうだ。僕だけならまだしも、未香さえも島全体から疑いをかけられていたんだ。ずっと神宮家に引きこもって生きてきた未香には、今、僕しか味方がいない。僕は未香を、護らなければならぬ」

それは僕がこの四年間、ずっと願っていたことでもあった。贖罪というだけでなく、愛する人に尽くしたいという純粋な想いもあつての、願望だ。

「はい、これでいいな。で、琴吹病子、お前は神代三一二と付き合

いがあったな。その中で、神代三一二のことについてある程度の知識を得たはずだ。神代三一二は、姫を恨んでいたり、あるいは姫を殺そうとしていたり、しなかったか」

恭輔くんは話を強引に本筋に戻した。病子ちゃんは、核心的な内容の返答を、聞き流してしまいそうなくらいにあっさり述べた。

「してましたよ。みにちゃんは、私に、一緒に姫を殺して島を統治しないかと、特に最近になってからはよく言っていました」

「何だと、本当か！」

「はい、本当ですよ」

「神代三一二は、何か、他に同志がいるというようなことは、話していなかったか？」

恭輔くんは熱の入った口調で、即座に尋ねた。浮かんだ疑問を、忘れぬ内に全て消化したい、とでも言うようだった。僕もそれは同じで、今まさに真相が解かれようとしている予感に、緊張と共に興奮していた。病子ちゃんは僕らとは違って、冷静なまま、懇切丁寧な言葉遣いのまま、淡々と質問に答えていく。

「そのようなことは話していなかったと思います。あくまで、私に姫様への憎しみはないのか、姫様のやっていることは果たして正しいことなのだろうか、と言った内容のことを繰り返していたくらいでした」

「何やら具体的な話、もしくは具体的な要求、などはなかったのか」「具体的な話……と言いますと、なかったように思います。ただ、姫様を殺す決心がついた時は自分に知らせてくれ、とは言われておりました。私は姫様のことを愛していて、殺して自分のものにした気持ちはありませんけれど、それをみにちゃんに話すのは、姫様と自分との愛への冒瀆であるような気がして、結局やめました。私は相手とは一對一の清純な愛を、と決めているのです」

「……そうか。でも、神代三一二は姫に殺意を向けていて、お前に勧誘まがいな真似をしていたのは事実なんだな。何故、神代三一二は姫に殺意を向けているのか、話していたか」

「みにちゃんは姫様のことを憎んでいた訳ではなかったと、私は推測しています。みにちゃんは、姫様のやつていることに非難的だったのです。そして、自分が姫様に代わって島を支配することだつて容易だ、と言うようなことを言っていました。詰まる所、みににちゃんは姫様に嫉妬していたのだと、思います」

「成程ねえ、嫉妬か。そいつぁ言い得て妙だな」

恭輔くんはさもありませんと言った感じにしきりに頷いていた。案外、恭輔くんも何だかんだ言つて姫に嫉妬しているだけだったのかもしれない、自意識過剰な年頃なだけに。

「他に、何か、姫が殺されたことについて知っていることや、気付いていることはあるか」

「ないですよ。そもそも私はあまりその手の情報と言うものに敏感な人間ではありません」

「そうか。じゃあ、もういいかな。行こうぜ、神宮唯人、立てるか」  
「ああ、大丈夫」

僕は平気な風に装い立ち上がったが、腹には激痛が走った。左の掌もじりじりと痛い。しかし吐き気がある訳ではなかったため、骨が欠けたりはしていないようだ。少し立眩みがしたけれど、それはしばらく横になっていたせいであろう。

「私は質問に答えました。約束通り、拘束を解いてください」

病子ちゃんは少し責めるような口調になって、恭輔くんに言った。しかし恭輔くんは「嘘も方便」とだけ言つと、部屋を出て行った。僕は部屋を出る前に「ありがとね」とだけ病子ちゃんに告げて、扉を閉めた。やはり病子ちゃんは危険人物だ。ここに閉じ込めておくのが一番だろう。あの縛り方では、芋虫のように這うことは出来ても、立ち上がることは出来ない。

僕は階段の上で伸びている腸をなるべく見ないようにしながら、血で濡れた階段を下り、入って来るのに使った窓から、外に出た。

歩きたびに腹に激痛がはしつて、僕は毎回声を出しそうになったが、恭輔くんの手前、それは我慢した。

「ありがとな」

恭輔くんが何の前触れもなく、そう言った。何故か、僕から目をそらすようにしている。

「何のこと？」

「さつき、お前が俺のこと突き飛ばしてなかったら、今頃俺は生きてない」

「ああ、それか。こちらこそありがとう、怪我の手当てしてくれて」「お前の場合は、謝罪だろ」

「え、何のだよ」

「俺の服に穴開けた」

恭輔くんはそこでやっと僕と目を合わせた。恭輔くんは唇の先を尖らせて、僕を睨むようにしている。しかしそれが一種の照れ隠しであることは、容易に分かった。

僕は肩をすくめてから「ごめん」と素直に謝った。

「じゃあ、帰るか。来た道を辿ればいいな」

「うん」

僕と恭輔くんはブロック塀を乗り越え、神代家の裏側に出た。腰のあたりまで伸びた雑草は先程僕らが歩いてきたところだけ脇に倒れていて、獣道みたくなっていた。一応当りに気を配りながら、こそそと歩く。

「まだ村人達はお前らを島中探しまわってるんだろうな。どこにもいないもんだから、森の中にまで探し出てると思うぜ。まさか姫殺しの罪人を家に匿ってる奴がいるなんて、誰も思わないもんな」

「統吾さんは気付いたけどね」

「ああ、あれは正直、俺も驚いた。動揺が出ないようにはしたけどな。だけど、あの推理はまさしく正解だったからな、やつば凄い人だよ。おおらかな性格だから、口喧嘩になれば俺なら言いくるめられるけど、あの人の本領発揮はあんな場面じゃないからな」

「随分、評価が高いんだね」

「……何だか、含みのある言い方だな……まあいいか。そうだな、

あの人のことは、若干認めてる部分はある。俺がまだ餓鬼だった頃は、よく遊んでくれたらしいな。いや、そんな話はどうでもいいところで、訊きたいことがあるんだ」

「僕に？」

「なんで神宮冬賀を殺したんだ？ こうしてお前のこと見るとさ、どうしても人を殺しそうな奴には見えねえんだよ。それがどうも、腑に落ちなくてな。この質問が無神経すぎるのは承知してるから気分を害したんなら謝るが……、答える気はねえのか」

「そうだね。それには、答えられない。僕だけの問題じゃないし」  
そう言いつつ僕は、恭輔くんの小さな変化を感じ取り、内心驚いていた。今の彼の言い方は、少しだけ、以前と比べれば、いくらか僕を気遣っているかのように、聞こえた。これは成長というのではなく、僕に心を開いてきてくれたということなのかもしれない。思えば、最初と今では、僕が恭輔くんに対し抱いているイメージも、かなり変化していた。まだ会ってから一日くらいしか経過していないにも関わらず、だ。量より質、という言葉が頭に浮かんだ。

神谷家の後ろまで来ると、またブロック塀を乗り越えた。そして家の脇（神音家の側でない広い方）を歩いて玄関に着くと、恭輔くんは僕に「じゃあ、お前は先に帰っててくれ。部屋に行くまで、用心しろよ。俺は、琴音のことが心配だから、神音家に行って来る」と告げた。僕が頷くと、恭輔くんは通路に出て行った。恭輔くんの靴は血で濡れていたのだけど、そこまで気にしなくても平気だろう。僕は恭輔くんの部屋の窓を見上げた。カーテンの隙間から、未香の姿が見えて、僕は安堵する。未香は指でオーケーサインを作った。僕はそれを確認してから、扉を開けて、中に入った。  
色々と衝撃的なことが相次いだけれど、僕はこうして、生きてここに帰って来ることができたのだ。その実感が、僕に喜びと心地よい達成感を与えた。

階段を駆け足で登り、恭輔くんの部屋に入る。扉を閉めると、すぐに未香が正面から跳ねるようにして抱きついてきた。僕は約束通

り、未香の小さな体を強く抱き締めた。

「おかえり、お兄ちゃん。遅いから、心配してたよ」  
「ただいま、未香。ごめんね、心配かけて」

僕は疲労感のため、立っているのがつらくなってきたので、未香を抱いたまま、恭輔くんのベッドに座った。他人のベッドに寝転ぶのは抵抗があつたので、あくまで腰かけるだけだ。未香は僕の膝の上に乗り、足を僕の腰に回して、僕に抱きついている。

僕は先程の恭輔くんからの質問を思い出していた。

『なんで神宮冬賀を殺したんだ？』

僕は未香の体を愛撫して愛情を表現しながら、四年前の出来事を回想していた。今まで、思い出すことを意識的に避けてきた、四年前の出来事。思い出したくない、愚かな僕の失敗。だけど僕はきつと、あれとちゃんと向き合わなければならぬのだ。

……………。

## 狂人と追手と協力者

……。

未香はかつて、実の父親である冬賀から、性的虐待を受けていた。未香の話によれば、それは半年間続いたらしい。冬賀の部屋に未香は強引に連れ込まれ、犯されていた。未香の引きこもりが悪化したのも、思えばその頃からだった。神宮家の統領である冬賀が相手である以上、逆らうことも、誰かに相談することも、内気な未香にはできなかったのだらう。それに、そのことが家族に知れば、神宮家が崩壊することは目に見えている。

しかし、僕はある日、気付いてしまったのだ。あの日は、家に冬賀と未香と曾祖父だけが残り、他の家族は僕も含め、田んぼに行っていたのだ。そして、途中ですっかり疲れ切ってしまった僕は、先に家に帰ったのだ。二階に上がるうとした時に、上から未香の叫び声が聞こえることに気がついた。僕は大声で未香の名前を呼ぼうとしたのだが、その時に、冬賀のくぐもった声も聞こえてきたのだ。未香が叫んでいる言葉の内容を聞きとってみると、僕にはおのずと何が行われているのか予想がついた。だけどそれは、認めたくない事だったし信じたくない事だった。最初は、そんな予測を立てた自分に嫌悪感を覚え、腹が立った程だった。

それでも僕は、真実を確かめずにはいられなかった。足音を忍ばせ、二階に上がる。声は、冬賀の部屋の中から聞こえてきていた。扉は施錠されていない。しかし、その扉を開けることは僕には出来なかった。僕は扉に耳をつけ、声や音を聞くことしかできなかった。未香が抵抗していること、嫌がっていることはすぐに分かった。それと同時に僕は、自分の叔父の、今まで聞いたことがないような気色悪い声と野蛮で悪趣味な笑い声を聞いた。僕が今まで家族に対して、特に叔父に対して抱いていた愛情や信頼は、この時、粉々に砕け散った。今まで自分達を良い家族だと思っていたことが、急に恥

ずかしくなった。常識が、崩れた。

そして何より、僕は当時から、未香が好きだった。決してこの気持ち誰かに伝えたことはなく、身の内に潜めていたのだが、僕は未香のことが愛おしくてたまらなかったのだ。そして扉の向こうでは、そんな未香が、自分と血の繋がった叔父に汚されている。

僕は悔しくて気持ち悪くて悲しくて腹立たしくて、堪らなかった。僕は扉から離れ、一階に下りた。台所から、包丁を探して手に取ると、二階に駆け上がった。

あの時僕が何を考えて、何を思っていたのか、それは霏がかかったように不鮮明で、要は思い出せない。そのくらいに僕は理性を失い、激情に駆られるままになっていたのだと思う。理性を捨てなければ、肉体も精神も、とても耐えることなど出来なかったのだ。

僕は冬賀の部屋の扉を開いた。あの時の僕に躊躇いはなかった。僕の目には、泣き叫ぶ幼い未香の上に覆い被さって汚らしい笑みを浮かべる冬賀が映った。ああ、あの光景だけは、今も鮮明に覚えている。忘れたいと強く思うほどに、僕の奥深くに絡みつき、こびりつく。冬賀は未香のことを愛していたのではない。あれはとてもそのように美化できる光景ではなかった。冬賀は未香の体、あるいは欲を満たす自分だけを見ていたのだ。

僕は冬賀に飛びかかり、腹に、両手で持った包丁を思い切り押し込んだ。ずぶり、と音を立てて金属の塊が肉を裂いて体の中に入っていくあの嫌な感触も、未だ忘れられずにいる。しかしあの時の僕は、あの感触に酔い、病みつきになった。包丁を引きぬくと、すぐにまた刺した。その度に血が跳ねて、僕の顔は返り血まみれになった。それでも気にせずに、僕は包丁を何度も何度も冬賀に突き刺した。その度に僕の怒りは治まるどころか、より膨れ上がった。僕はこの時、未香が僕をどういう風に見ていたのか、分からない。でもきつと、怯えた眼差しを向けていたに違いない。あの時の僕は、忌避すべき異常者と化していた。やがて僕は、冬賀の微塵も生気が宿っていない目玉に気がついた。そして僕は、十一回目に突き刺した

包丁を、もう引き抜こうとはしなかった。体に力が入らなくなった。僕はその時に初めて、未香に目を向けた。彼女の表情はやはり、思いつけない。でも彼女が「ありがとう」と礼を言ったことだけは、覚えてる。

僕は未香を風呂に連れ込んだ。僕は冬賀の血を早く洗い流したかったし、何より冬賀に汚された未香を綺麗にしてあげたかった。そして罪深き僕は、彼女と交わった。あれは互いに、嫌な事を全て忘れたくて行った行為だったように、思う。僕は一時でも自分の罪から逃れたかったし、未香を自分のものにしたかったのだ。

今思えば、あの時の愚かな自分の行動は、全て、思い出す度に胸が痛む、過ちだった。僕はずっと後悔し続けていた。僕がやったことは、果たして、正しかったのだろうか？ その問いの答えは、ちゃんと分かっているのだ。

「お兄ちゃん、この怪我、どうしたの？」

僕は未香の声で、すっかり入り込んでしまっていた回想の世界から、現実へと戻って来た。

「ちょっとね、琴吹病子と会って、色々あったんだ。大丈夫、気になくていいよ。僕が間抜けなせいで、負った傷だし」

未香はそれでも、悲しそうな顔をしたままだった。僕は未香の頬に触れ、優しく撫でる。

今、未香は四年の歳月を経て、さらに可愛くなった。そして、こうして、僕の前にいて、僕のことを許してくれている。それどころか、僕を愛してくれている。僕はこれ以上、望むものなんてない。

その時に、僕は、形容しがたい、奇妙な感覚を覚えた。

これは、何だ。

何か僕は、取り返しのつかないことをしてしまっているのかなような……。

正体不明の有耶無耶が、たちこめている。

何だろう……。

僕がおかしな感覚に首を傾げていると、家の扉が大きな音を立て

て閉まる音がした。続いて、ドタドタと慌ただしく階段を駆け上げる音。僕と未香はベッドから下りて、身構えた。しかし「神宮！神宮！」と言う恭輔くんの声聞き、安心する。

扉が開く。恭輔くんは、今まで見たこともない程の焦り様で、僕らに言った。

「逃げるぞ！ 今、村中の人間が、ここに向かって来ている！」

「はあっ！？ どういうことだ！ 何故場所がバレたんだ！」

「そんなのは後回しだ！ 紗耶美！ 紗耶美、お前も来い！ 今見つかつたら、お前も殺されるぞ！」

恭輔くんは向かいの、紗耶美ちゃんの扉をドンドンと叩いた。そして返事も聞かずに、扉を開く。

「紗耶美っ？ おい、紗耶美、どこだ！」

どうやら紗耶美ちゃんは部屋にはいなかったらしい。

「おい、神宮未香、紗耶美はどうした？」

「え……、わ、分からないよ」

未香が答えた時、恭輔くんは突然、愕然とした。一気に血の気が引いて、苦しそうに喘ぎ始めた。

「どうしたんだ、恭輔くん、大丈夫か！？」

恭輔くんは「紗耶美……」と蚊の鳴くような声で呟いたかと思つたら、部屋に戻つて来た。部屋中を見回して、花瓶に目を遣ると、それを手に取つた。そして僕らの横を通過して、琴音ちゃんの部屋の窓にまた近づく。まだ鍵は閉まつたままだった。

恭輔くんは花瓶を、琴音ちゃんの部屋の窓に向かって、投げつけた。けたたましい音を立てて、窓ガラスは粉々に割れる。恭輔くんはそうして開いた穴の中に手を突っ込んで、乱暴にカーテンをはぎ取つた。

僕らは絶句するしかなかった。

露わになつた琴音ちゃんの部屋。窓のすぐ下にはベッドがあり、その上には、琴音ちゃんの死体に馬乗りになつて、今もその顔にナイフを絶えず突き立て続ける紗耶美ちゃんの姿があつた。

狂ったような笑みを浮かべて一心不乱に琴音ちゃんの顔をぐちゃぐちゃにしていた紗耶美ちゃんは、やっと僕らに気付くと、顔を上げた。

「ははは、兄さんだ」

そのかすれきつて別人のものになった声を聞いて、僕は凍りついた。それは恭輔くんも、未香も同じだっただろう。

「てめえっ！」

恭輔くんは怒鳴った。それでも紗耶美ちゃんは気圧されることなく、乾いた笑い声を洩らし続けるだけだった。

そして恭輔くんが片足を窓枠の上にかけて琴音ちゃんの部屋に飛び移ろうとした時、「いたぞ！ 神谷恭輔だ！」という声が聞こえた。

僕はハツとなって、家の正面の側の窓に駆け寄って、カーテンの隙間から外を見た。

神谷家の前には、通路を埋め尽くす程の村人達が、集まっていた。「ボケツとしてんじゃねえ！ 来い！ 逃げるぞ！」

恭輔くんの声。見ると、恭輔くんは壁と壁の間に両手両足を突っ張って、下へと下りて行く最中だった。

「未香、行くぞ！」

「うん！」

僕と未香もそれに続いて、窓から身を乗り出す。恭輔くんはすでに、神音家と神谷家を隔てているブロック塀の上に辿りついていた。恭輔くんと同じようにして、僕も下りて行く。体を横向きにしたければならなかった。その時に、また僕は、琴音ちゃんの部屋の中を見た。すぐ目の前で、紗耶美ちゃんは狂人の面持ちで、笑い続けていた。充血した目を見開いて、目一杯に口の端を吊り上げて、琴音ちゃんの血を浴びて。すっかり変わってしまった、おぞましい顔で。

僕は首を横に振って恐怖を払い除けてから、ブロック塀まで下る。「早く来い！」

恭輔くんはブロック塀の上を移動し、すでに神谷家の裏側の草むらに降り立とうとしているところだった。

上からは未香が僕達に倣い、こちらへ下りてくる。紗耶美ちゃんに攻撃されるのではないかと僕は少し危惧したが、彼女はすでに破綻してしまっているの、琴音ちゃんの上から退こうという気もないようだった。

しかし焦りながらもあるので、未香は上手く壁と壁の間に手足を突っ張ることができなかつたらしく、落下してきた。

「未香！」

僕は咄嗟に未香を受け止めようとする。未香が「痛っ……」と呻いた。着地の時に足をくじいてしまったようだ。そのままバランスを崩し、僕の方にしなだれかかってくる。

僕は、ブロック塀の上をこちらに向かつて村人が進んできているのを見た。怒声を発しながら、鬼の形相で迫ってくる。大人の体ではこの幅五十センチあまりの通路は窮屈そうだったが、それでももうすぐに追いつかれてしまいそうだった。そして未香は今、上手く動けそうにない。

僕は隣から未香の両脇に腕を回し、抱き上げるようにした。そのまま、僕は左向きに、恭輔くんがいる方向へと進んで行く。「お兄ちゃん、私は大丈夫だから、先に行つて」等と未香は苦しそうに言っているが、どう見ても大丈夫とは言えそうになかった。次の瞬間、未香の小さな叫びが聞こえて右に目を向けると、村人の一人がもうすぐそこまで来ていた。手を伸ばせば、未香を捕まえることができる距離だ。僕はスピードを上げようとしたが、上手くいかない。さらに、腹の傷まで痛みだしてきて、僕は今すぐに倒れてしまいそうだった。頭痛がして、ひどい眩暈に襲われる。

そして次に聞こえたのは、男の叫び声だった。

僕らに接近していた男が、どこからか真っ赤な血を噴き出して、絶叫している。そしてずるずると、壁と壁の間に体中を擦りながら倒れた。血しぶきが僕と未香にも少しかかった。

男が倒れたことによつて通路の先が見えるようになった。そこにいたのは、血で真っ赤に染まったナイフを持った琴吹病子だった。

「えらく都合の良いタイミングで現れましたでしょう。しかしそれも至極当然のことなのです。何故なら、私はそのようなタイミングを狙い澄まして助太刀したのですから」

「病子ちゃん！？ 助けてくれるのかっ!？」

「ええ、そうですよ。しばらくここは私に任せて、早く先に行つてください。脳のある村人は、向こうの庭を通つて、そちらの草むらへ向かっていますよ。挟み撃ちにされる前に、よろしく願いします」

「でもこんな大人数相手じゃ……」

「何を言っているのですか。この狭い通路では、私が相手にしなければならぬのは一人です。相手が何人いようが、一度に私に襲いかかれるのはそれだけなのです。だから関係、ありません。ところで、あなたが神宮末香様ですか。これを受け取つて下さい。ここに書いてある場所で、待っていてください。私の秘密の隠れ家なのです」

病子ちゃんは続いて追つて来た村人を包丁で血祭りにあげながら、一枚の紙切れを、末香に渡した。末香は少々怯えながら、それを受け取つた。

「では、早く行つて下さい唯人様」

僕は「ありがとう」と礼を述べてから、またブロック塀の上を進む。恭輔くんが「おい、遅いぞ!」と怒鳴っている。

僕は不思議な気持ちだった。何故か今、恐怖の対象だったはずの病子ちゃんが驚くほど頼もしく見えたのだ。彼女がまるで、仲間になつたかのような……。何故彼女が僕達を助けてくれるのかは分からないけれど、それでも僕は今、素直に喜びを感じていた。しかし、勿論今は喜んでばかりいられる状況ではない。村人達は何もここを通らなくても、僕達を追えるのだ。早くここを離れなければならぬ。

やっと僕らも恭輔くんのもとに辿り着くことができた。ブロック塀から僕がまず飛び降り、続いて飛び降りてきた未香を、下で僕が受け止めた。やはり未香は左足を痛めたらしく、右足だけで立つようにしている。

「とにかく離れるぞ」

恭輔くんは、真つすぐ走りだした。僕と未香が村人達に最初追われた時に逃げ込んだ森がすぐそこに見える。確かに、追手を撒くにはあの暗い森の中に逃げ込むのは最も良い手だろう。このあたりは山になっていて、つまり森を抜けるには下に下って行けばいいだけなので、迷うこともまずないのだし。

草を掻き分けながらなので、思うように前には進めない。特に僕は、未香に肩をかして、彼女を助けながら動いているので、決して速いとは言えない。

後ろを振り向くと、先程病子ちゃんが言っていた通り、神谷家の、神音家側ではない方の庭から、村人達がブロック塀を乗り越え始めていた。このあたりの雑草は随分と背が高いが、僕らを覆い隠せるほどではない。それに僕らが通ったあとは草が踏まれて跡ができていたので、屈んで隠れることも出来ない。僕らは一刻も早く森の中に入らなければならぬのだ。

見ると、追手の内の一人は手に斧を持っていた。まさか、あれで僕らを殺すつもりだろうか。村人達は、僕らを生け捕りする気などないのだろうか。いや、もしかしたら、生け捕りを命じられてはいるのだけど、姫を信仰している村人の内の一部は、自分の手で僕らを殺したいと考えているのかもしれない。彼らにとって「生け捕り」は、姫の命令ではなく、遵守しなければならないものではないのだから。

未香が「ごめんねお兄ちゃんごめんね」としきりに謝っている。もう未香は泣きだしてしまっていた。「大丈夫、泣かないで、未香。今はここを逃げ延びなきゃ」と必死に宥めるが、未香に泣きやむ様子はない。

草を掻き分ける仕事は僕らがしてしまっているので、追手はかなり速く僕らに近づいてくることができる。今僕らと追手との距離は十メートル程しかない。森は目前だ。と言っても、森に入ったからといって安心できるはずもない。僕は段々と焦り始める。もしや、今回こそは本当に捕まってしまうのではないだろうか。そして、あの斧で殺されるのではないだろうか。強い陽射しのせいもあって、僕は全身汗だくだった。この間にも、ブロック塀を超え、追手は次々と草むらに出てくる。病子ちゃんのこと……敵か味方かも判然としないとはいえ、心配だ。

恭輔くんは僕らを待つ気はないらしく、もう森の中に入って行ってしまうている。非情だとも思ったが、全員で捕まるよりは遙かに利口であるし、恭輔くんはそのような客観的な判断というものを自分に強いる向きだ。先程も、紗耶美ちゃんに逆上していたはずなのに、村人に気取られたことで、すぐに逃げに転じた。あれは僕も感心せざるを得ない、良い判断だった。

僕と未香もやっと草むらを抜け、森の中に踏み入る。木々の隙間からチラチラと恭輔くんの後ろ姿が見える。僕らは恭輔くんを追うようにしながら、森の中を進む。また背後を確認しようと思ったが、その時間が無駄だと思って、やめた。森の中は、生い茂る木々が陽の光を遮断しているせいで薄暗く、涼しかった。さらに奥へ行けば行くほど木は密集していて、まさに逃げやすく、追われにくい環境だと言える。

木の根やツルに躓かないように注意しながら、僕らは森の中を進んで行く。未香も僕も、体力がすでに限界に近かった。もはや何かを考える力も尽き、只々先を進む恭輔くんについていくことしかできなかった。

恭輔くんに追いついた時には、彼も疲労困憊のようで、木の幹に背中を預けて、肩で息をしていた。未香は倒れてしまって、僕も彼女と一緒に地面に胡坐をかいて呼吸を整えようと努めた。追手の気配はどこにもなかった。

それからしばらくは三人共無言だった。喋る気力が失せていたのだ。それに僕は喉が渴いていた。腹も減っていた。おまけに頭痛がするし、腹の傷口が開いてしまって、包帯に血が滲み始めていた。やがて、恭輔くんが沈黙を破った。

「紗耶美だ」

その声は静かだったが、怒りが滲んでいることは容易に分かった。「あいつが、琴音を殺し、俺達のことを村人達に伝えたんだ……。くそっ！」

恭輔くんは裏拳で木の幹を思い切り叩いた。ギリギリと歯を食いしばる音が、僕らにも聞こえた。

恭輔くんは、苦々しい顔で、言った。

「俺のせいだ」

## 神谷兄妹の事情

恭輔くんは、苦々しい顔で、言った。

「俺のせいだ」

「いや、君が責任を感じる必要はないだろ。予想しようとしたって無理な話なんだから、身構えることもできないし。それに、それを言うなら僕だって不用心だった」

「違う、そうじゃねえ。紗耶美が琴音を殺したのは、こんな状況になつたのは、全て俺のせいだって言ってるんだ」

恭輔くんはわなわなと唇を震わせながら、話し始めた。そのただならぬ雰囲気は圧倒され、僕らは口をはさむこともせず、その話を聞いた。

「紗耶美は、琴音のことが大嫌いだった。琴音のことを恨んでいたし、殺したいとも思ってただろう。そして、今回それが実行に移されたんだ。紗耶美は、俺のことが好きなんだ。俺も、紗耶美のことが好きだった。俺達は兄妹で互いを愛し合っていたんだ。だけど俺の方は、そのことに背徳感や嫌悪感を抱いていた。自分のことが気持ち悪かった。そんな時に、琴音と出会った。琴音は紗耶美とはあらゆる面において正反対の女だった。だから俺は、琴音を好きになることで、紗耶美から、実の妹を愛している自分から、目を背けようとしたんだ。とんだ間抜けだ。こんな低能は、一生後ろ指を指されながら、誹謗中傷を受け続け、嘲笑の的となりながら、恥辱にまみれて屈辱を受けて凌辱を尊び、早めに死ぬべきだ。俺は紗耶美を必要以上に避けるようにした。不当に扱い、好きでもない振りをし続け、自分を騙すためにも過剰なほどに琴音を構うようにした。ずっと紗耶美は、苦しみ続けてきたんだ。俺は紗耶美から、逃げ続けてきた。琴音のことも多分、愛してたんだと思う。だから、あいつが殺されて、俺はドロドロと煮えたぎるような怒りを今抱えている。だけど復讐するに当たって、紗耶美のことは殺せない」

恭輔くんは地面の少し湿った冷たい土を握ってえぐるようにしてから、屈辱的な風に、言葉を吐いた。

「俺は今も、紗耶美が好きだ」

僕は生憎、恭輔くんのそんな独白に対して返すべき言葉を探し当てることは出来なかった。彼らには彼らの思いと歴史があって、それは僕如きが軽々しく干渉できるようなお気軽なものではないのだ。僕はしばしの沈黙の後に、話のあるべき方向へと戻すことにした。恭輔くんの告白については、僕はやはり、筋違いな同情や非難をしてはいけないと判断した。

「でも、どうして紗耶美ちゃんは僕らのことを村人達に告発したんだ？」

それは愛している兄を裏切り、死においやる行為だと言うのに。

「……俺への復讐、かもな。紗耶美は、自分を苦しめてきた琴音と俺に復讐する気だったのかもしれない。もしくは、俺と同じように、実の兄に恋をしている自分を拒絶したくて、根源である俺を消そうとしているのか」

僕はそこで、あることに気がついた。

「そうだ！ 紗耶美ちゃんは、どうやって琴音ちゃんの部屋に入ったんだ？ 紗耶美ちゃんが琴音ちゃんの部屋に入ったのは僕らが見た通り事実だ。殺したのも紗耶美ちゃんだろう。でも、紗耶美ちゃんに、いつそんな時間があったんだ？」

「……俺達が一階に飯を食いに行った時だろうな。紗耶美が最後に俺達に姿を見せたのはあの時だし、あれ以降、他に俺達全員が俺の部屋から出ていた時はない。琴音の部屋に行くには、俺の部屋から行くか、直接神音家に入って行くしかない。だけど、神音家に直接入った可能性は希薄だ。俺はさつき、神音家でいろいろと事情を訊いてきたが、外部者が家の中に潜り込むことは難しそうだった」

「そうじゃない。だって、琴音ちゃんの部屋の窓の鍵は、紗耶美ちゃんが食事の支度をするよりも前から閉まっていたんだから！」

恭輔くんは目を大きく見開いた。

「琴音ちゃんは着替えてくるとだけ言って部屋に戻ったきり、いなくなつた。君のあの時の言を借りれば、かけるはずのない窓の鍵をかけて、部屋から出てこなくなつた！ 琴音ちゃんはその時に殺されたんだ！ 琴音ちゃんの死体が着ていた服は、着替えられていなかったんだから、間違いない。でも紗耶美ちゃんはその時に琴音ちゃんの部屋に潜んでいることは出来ない。あの後僕らはずっと恭輔くんの部屋にいて、紗耶美ちゃんは夕食を用意して僕らにそれを実際に対面して伝えた。これをどう説明するんだよ」

恭輔くんは眉間に皺を寄せて考え込んでいるようだったが、結局何か考えが浮かぶことはないようだった。

「それだけじゃない。紗耶美ちゃんはいつ、どうやって、あれだけの村人に僕らのことを伝えただけ？ 紗耶美ちゃんは、どう見ても正常で知的な思考や行動ができる状態じゃなかった。しかも返り血まみれだったんだぞ」

「……じゃあ紗耶美じゃ、ねえのか……いや、それはない。俺達は紗耶美が琴音の部屋で琴音にナイフを突き立てているのを見た。紗耶美は琴音を殺した。それは間違いない……」

「君が神音家で聞いてきたことを、教えてくれ。これが、全ての謎を解くことに繋がりそうだって予感がするんだ。頼む」

僕は本気でそう思っていた。なんの根拠も確証もない考えだけど、僕はそれを確信していた。それはきつと、僕の深層心理が真相の尻尾を掴みかけていることに由来するに違いない。もう少しで、全貌が暴かれる。

「来客は度々あったようだが、二階に上がった者はいないらしい。琴音に会ったのは神音家の者の中では昨晚統吾さんが最後。琴音は部屋に籠りっぱなしで、外に出たことはなかっただろうと言っていた。ああ、俺が会って話したのは統吾さんの父親だ。俺が頼んで琴音を呼んでもらったんだが、反応はなくて、扉には内側から鍵がかかっているって言っていた、紗耶美がやったんだろうな。まあ、そんな具合だ」

「紗耶美ちゃんが来たとは言っていた？」

「言ってなかったな、客の名前も一応聞いてみたけど。でも、こんなものは、気付かなかったで済む。要は紗耶美は、神音家に忍び込んで、琴音を殺し、一旦神谷家に帰って料理を作って俺達にアリバイじみたものを示し、また神音家に忍び込んだんだ。返り血を浴びたのは、料理を作って再度神音家に戻った時なんだよ。最初は、首を絞めたり、そういう血の出ない手段で殺したんだ。また帰って刃物で滅多刺しにしたのは、恨みを晴らすためだろうな」

「そんなことが本当に成功すると思っっているのか？ 僕は思わない。それに、紗耶美ちゃんが僕らを告発するつもりだったのなら、僕らに対してアリバイなんて示したって、何の意味もないじゃないか！」「……でも、それじゃあ説明が出来ない」

「出来る。出来るはずだ。それを見つけることが、この事件を解決するということ。そしてそれはきっと、姫殺しの真相に何らかの形で繋がりがあある。妙な確信があるんだ。今この島で起きていることは、姫の死亡が全て発端となっているんだよ」

「そうか？ 俺はこれは、姫が殺された件とは関係ないと思ってる」「そんなはずがないだろう。姫が殺されたすぐ後に、殺人が起きている。絶対に、関係している」

僕は考え始める。紗耶美ちゃんはどうやって琴音ちゃんの部屋に入り、どうやって村人達に僕達のことを伝えたのか。そしてこの事件と姫が殺された事件はどう繋がるのか。

「ねえお兄ちゃん、これ、見て」

隣から未香が小さな声でそう言った。未香が僕に差し出したのは、病子ちゃんが先程彼女に渡した紙切れだった。紙切れには、汚い字で短い文章が書かれていた。

『旧姫様のやしろが私のひみつの場所です。そこで持っていてください。私もそっこくむかいます。合流しましょう、あなた達に協力したいのです。』

「これ、持っていてじゃなくて待っていて、かな」

僕はそんなことをまず初めに言ったが、実際はどうでもよかった。僕はこの病子ちゃんからの指示をどうするべきか分からず、戸惑うことになった。

恭輔くんもその紙切れを覗き込んで、首をひねった。

「無視していいだろうな、それは。信憑性も低いし、畏かもしれないし、琴吹病子と会うこと自体が危険だ。俺達にとってプラスになる要素はない」

「でも病子ちゃんがもし協力してくれるのなら、さっきみたいに、大きな戦力になる」

「その前提がまずあり得ない」

「でもさっきは助けてくれた」

「畏かもしれねえって言っただろ」

「何の畏だ。殺す畏か？ 殺したいなら、さっき殺せただろ」

「忘れたのか。あいつはネクロフィリアだ。死体に欲情するような、重度の変態だ。俺達を殺して、独り占めしたいのさ。だから、そんな人気のない場所を選んだ。第一、そこに行く途中に村人達に見つかる可能性もある。気にする必要はない」

「……………」

僕は心のどこかで、病子ちゃんをわずかながら信頼しているらしかった。確かに病子ちゃんは殺人狂で死体愛好者で正常とはとても言えないが、絶対に解り合えない程に人間性を残していない訳でもないと思うのだ。何故だろう…………、たった一度助けられただけだというのに…………。もしかして僕は、彼女に惚れてしまったのだろうか。いやそれはない。僕が愛しているのはこの世界で未香一人だけだ。それに殺人鬼を好きになるというのは、さすがにあり得ない。

「だけど、恭輔くんを説得することは出来ないだろう。だから僕は病子ちゃんの話はここで止めにすることにした。」

「ここにいれば、村人に見つかることはおそらくない。でも食糧の問題もある。どうするか」

恭輔くんは自分の腹をさすっている。

「もうしばらくここで、考えさせてくれ。皆、休憩しないと動けないだろうし。未香は、今の内に寝ておいた方が良く。動くのは、その後だ。空腹は、我慢しよう。人間は、二日程度は食べなくても生きていけるはずだ。水は必要だが……それだつて丸一日は大丈夫だ」

「それもそうだな……。悪い、俺も寝させてもらつていいか」

「ああ」

「ちゃんと見張つとけよ」

恭輔くんは、目を閉じた。

未香は僕の膝に頭を乗せて、もう寝てしまっている。

僕は思考を再開した。考えなければならぬ事は増える一方で、疲労が限界に達している頭は全然冴えなかった。

僕もいつの間にか眠ってしまった。

目を覚ました僕の視界に真っ先に飛び込んできたのは、狂気の滲んだ笑い顔をしている病子ちゃんだった。

「おはようございます、唯人様。唯人様、可愛らしい寝顔をしているのですね。すみません、堪え切れずに舐め回してしまいました」

「……………」

僕は叫び声をあげるタイミングを逃した。

寝呆けていることもあり、今見ているものは、一つも意味が分からなかった。ただ、自分の顔が病子ちゃんの唾液でべつとりと濡れていることだけは、すぐに感知できた。

視線だけを動かして確認すると、未香と恭輔くんは眠つたままだった。殺されてはいない。そしてまた、地面に横になっている僕に覆い被さるようになっている病子ちゃんの顔に視線を戻す。

「ここには君一人で来たの？」

「そうですよ。ですからご安心下さい。私は唯人様達に力添えをしなくて参上したのです。私を唯人様の下僕と思つていただいて構い

ません。存分に私の人権を冒瀆して尊厳を踏みにじって、使ってくださいまし」

「どうやってここに来たの？」

つけてきたのだろうか。僕は追手がいないか、何度も確認しながらここまで逃げてきたのだが……。

「足跡を辿れば分かります。勿論、草が生えていたりで完全に足跡を追っていくことはできませんが、草がかき分けられていたり、通過した場所の形跡は大体残っているものです。私は処刑人という立場から逃亡した罪人を追うことがしばしばあるので、そのような痕跡を発見して辿って行く技術に長けているのです。時間はそれ相応にかかりますけれど」

それは相当難しいことのように思えたが、こうして僕らに追いついてきたのだから、本当のことなのだろう。

「そのようにして唯人様達を追っている村人達に途中何度か接触しましたが、その健気さに惚れて全員殺してしまいました。それと、唯人様達を通った痕跡を、出来る限り消しながらここまで来ましたので、ここまで辿りつける者はもういないだろうと思います」

確かに考えてみれば、そのような方法は、できるかどうかはともかくとして、追跡者からしてみれば簡単に思いつく。前に一度森に逃げ込んだ時は真夜中のために痕跡を発見することができなかったから見つからなかったただけなのかもしれない。今のような昼間では、このように見つかってしまうものなのだ。

「ありがとう、病子ちゃん」

病子ちゃんは僕らを殺さないだろう、という考えが僕にはあった。相変わらず根拠はない楽観的な考えだ。

やがて恭輔くんが起きた。恭輔くんは最初病子ちゃんに対して敵意と警戒心を露わにしていたが、僕が彼女が所持している凶器（包丁三本）を全て預かってボディチェックを済ませると、やっと落ち着いてくれた。病子ちゃんは、本当に僕の言うことなら何でも聞くつもりらしかった。次に未香が起きて、彼女も病子ちゃんを怖がっ

ているようだったが、僕がなんとか説得して警戒心を少し和らげることが成功した。

僕ら三人が目覚めてから、病子ちゃんは言った。

「では、私の秘密の場所へ向かいましょう。私が案内します。ここは寒さが凌げなく虫も多い等、環境の劣悪さが目立ちます。私の秘密の場所へ行くのが最も良いと思います」

「秘密の場所って、昔の社だろ？ あそこは結構怪しい場所だし、村人達が来るだろ。だったらここでも良い」

恭輔くんは文句を言ったが、病子ちゃんは動じなかった。

「旧社というのは、嘘です。すぐに追いつく予定でしたから、近くにあつて分かりやすいそこを書いたのです。私の秘密の場所は、誰にも知られていません。と言っても、足跡を辿ってみれば方向が全然違ったので、旧社には向かっていないだろうと分かったのですが」

「じゃあ病子ちゃん、そこに連れて行ってくれ。恭輔くん、君もさつき、いつまでもここにはいられないと言っていたじゃないか」

「……一応俺もお前らに着いていくが、嫌になったら、勝手に別れるからな」

「それは君の勝手だ。未香、未香もそれでいい？」

未香はこくりと頷いて、僕にぴつとりと身を寄せてくる。

「決まりですね」

病子ちゃんは満足そうに微笑むと、早速歩き始めた。一度森から抜ける気だろうか。ここはおそらく大分奥だから、それは時間がかかりそうだ。

「ねえ病子ちゃん、どうして僕らに協力してくれるの？」

僕がそう尋ねると、病子ちゃんは「唯人様が嫌いだからです」と答えた。理由になつてない、と思つた。

## 辿りついた真犯人

「どうにも解せねえな。お前が俺達に協力する明確な理由がないと、信用されるのなんて無理だって分からねえのか？」

恭輔くんは棘のある口調で言う。

また病子ちゃんはゆるりとその言葉をかわすのかと思ったが、予想に反して、彼女はきちんとこちらに振り向いてから、言った。相変わらず、顔は不気味に笑いながらだったけれど。

「私は、変わりたいのです。改悪でなく、改良です。自分が変化するには、環境の変化が必要です。そして今が、私が変わる最後の機会に間違いないと思います。姫様が殺され、この島は変わります。さらに、私はまさに運命的な出会いをしました。唯人様、あなたは私が生まれて初めて殺したくないと思った方です。このような環境の変化の中で、私も、人殺しで、なくなりたい。姫様が亡くなり、私は家柄に捕らわれる必要はなくなったのです」

病子ちゃんはそこまで述べる。「さあ、行きましょう。陽が暮れると不都合なのです」と笑って、また歩き出した。

僕らは誰も反応できなかった。それぞれ、病子ちゃんの言葉の意味を考えているらしい。だけど、おそらく誰も、今の台詞の意味は理解できていないだろう。僕も、一部分すら理解できていない。今までの病子ちゃんの台詞から考えても、まるで筋が通っていないのだ。やはり、真剣に聞くだけ損なのだろう。

歩きながら僕は、絶えず琴音ちゃんが殺された事件のことを考え続ける。この事件は、犯人が紗耶美ちゃんであることが分かっている。他の事件よりも簡単なはずなのだ。神宮家の密室殺人よりも、本題の姫殺しよりも。

そうしていると、病子ちゃんが「ありましたありました。これです」と言った。見てみると、林立する樹木の中に一つ、切り株があった。病子ちゃんはその上に飛び乗ると、周りを見回し始める。

「ああ、次はあれです。ほら、幹のところにはバツ印をつけてありますでしょう」

病子ちゃんは切り株から下りて、今までと方向を約九十度左に変えた。

「どづいこと？」

「私は私の秘密の場所にいつでも行きやすいように、島中にこのような目印をいくつかつけておいているのです。こういうものがないと、迷ってしまいますからね」

「でもこのまま下って行けば村には出られるだろ。樹海と違ってここは山だからな、あまり迷うことは考えられない」

「でも恭輔くん、それでは村人に見つかってしまいますよ。それに、私の秘密の場所へは、このような目印を追っていかないと辿りつけないのです」

恭輔くんはチツと舌打ちした。病子ちゃんと恭輔くんの愛称は相当以上に悪いようだった。しかし、病子ちゃんの方は別段それを気にしている様子はなく、だからこそ恭輔くんの方もあまり怒る気になれないのだろう。

「ねえ病子ちゃん、君はどうやって拘束を抜け出したの？」

僕は場の空気をいくらか和ませる目的で、そう尋ねた。

「助けていただいたのです、かみしろまなむ神代麻南無ちゃんに。あの後すぐに、唯人様達の捜索に出ていた麻南無ちゃんが帰ってきました、私を発見して、拘束を解いてくれたのです。即座に愛情が沸々と湧いてきまして、愛してしまったので、もう彼女は生きてはいないのですが」

「麻南無ちゃん……初めて聞く名前だ」

「三二ちゃんの姉です。腰まで髪がある、色白の方です。彼女とは、その時が初対面でした」

「へえ」

僕は澄ましたように会話していたが、実は気分が悪かった。病子ちゃんは、簡単に人を殺している。聞いていると、まるでそれが普通のことであるかのように錯覚させられ、ひどく心落ちつかなくな

る。ただ、すでに病子ちゃんの凶器は僕が回収済みだし、ここでは一対三になるので、今は殺される心配はなく、そこは安心できる。病子ちゃんは順々に木の幹に手を当てながら、森の中を進んで行く。いくつかの木の幹には、刃物らしきものでバツ印がつけられている。

僕は、未香がもうとても歩けそうにないことに気付いた。足はガクガクと震えていて、顔も真っ青だ。極度の疲労のせいだろう。引きこもりの未香にとって、部屋の外に出てからの出来事は、あまりにも酷過ぎたのだ。

「未香、僕の背中に乗ってきて」

未香は遠慮するかと思っただが、さすがに今回ばかりは素直に従った。僕は未香を背負った状態で進む。横から「おいおい大丈夫かよ」と恭輔くんが心配してくれた。僕は「大丈夫」とだけ答えたが、歯を食いしばりながらだったので、恭輔くんは聞きとれなかったかもしれない。

僕のせいで、進むペースは格段に遅くなってしまった。しかし恭輔くんも病子ちゃんも、文句を言っただけはこなかった。未香は時々僕に申し訳なさそうに謝るのだが、その弱弱しい声を聞くと、なおさら僕は彼女を下ろす訳にはいかなくなるのだった。

「なあ、前にも訊いた気がするけどよ、お前は、姫を暗殺しようとしている奴らの噂は、聞いたことがないんだよな？」

「はい、ありません」

「そうか……。あれは、どのくらい有名な噂だったのか……。姫は知らなかったんだと俺は思ってるが、そんな噂が回れば、絶対に姫には知らされるはず……」

「ねえ恭輔くん、僕は思うんだけど、そんな噂が流れるのって、おかしくないかな」

「どうしただよ。人の口に戸はたてられないだろ」

「うん、噂っていうのは大抵、噂の対象者が自分から広めたものと、偶然その噂の対象について知った者が広めたものと、誰かが無責任

にありもしない話をでっち上げて広めたものがあるよね。そう考えるとき、その噂はこの内のどれでもないはずだ」

「言ってる意味が分からないな。説明してくれ」

実は未香を背負って歩きながら言葉を発するのは非常に苦労しているのだけど、僕は自分に鞭打って、説明することにした。大分恭輔くんは親切になってきたけれど、それでも気遣いが足りていないのは変わらない。

「まず、この噂の場合、噂の対象者が自分から広めるはずはない。姫を殺そうとしているなんて知れば、即死刑だ。細心の注意を払って、秘密裏に計画を進めていたに違いない。そして、噂の対象者が、仲間を集める際に情報が洩れたとしてみると……つまりこれは噂の対象について知った者が広めるケースでもある訳だけど……、これもやはりあり得ない。だって、そんな話を知れば、すぐにでも誰かに噂としてではなく事実として報告するに違いないからだ。しかもこれは、でっち上げた話でもない。実際に姫は殺されたのだからね。要は、こんな噂はあり得ない。姫が何の手も打たずにみすみす殺されるはずがないから、この噂は広く知られてはいなかった。そう考えると、恭輔くん、君がそんな噂話を知っているのは、おかしいんだ」

「何だよ、俺が犯人だって言いたいのか？ 俺が姫を殺したと？ 馬鹿げてる。確かに俺は姫に死んで欲しいと思っていたが、殺したいとは思っていなかった。それは非常にリスクが高い。そんな真似をせずとも、俺は姫に対する不信感を高める行為だけしていれば、噂の連中が姫を殺すと考えていたって言うてるだろ」

「じゃあ、君がしていたことは、連中を助けることだったってことだね。姫を殺した目的はきつと、姫の代わりに島を統治することだろうと君は言った。僕も異論はない。しかしそのためには、姫を殺すだけでなく、村人達にある程度姫に対する不信感を抱かせる必要がある。そうでないと、姫に代替が効くことを村人達は認めないからね」

「ああ、その通りだよ。俺は連中を間接的に補佐した。それがどうした？俺も姫殺しの共犯だと言いたいのか？俺を犯人として告発すると？」

「違う、そうじゃない」

僕は立ち止まった。今僕は、自分が真相に徐々に接近しているというところを感じていた。ここで思考をやめてはいけない。この調子で、思考を進めていけ。論を確率していけ。組み立てていけ。もう少しだ。もう少しで、全てが見える。視界が開ける。

「恭輔くん、君は自分で勝手に連中を補佐しているつもりだったかもしれないが、こう考えることもできるだろう、連中は初めからそうさせるつもりで、君に噂話を装って姫暗殺計画を仄めかした。君は連中の思いがままに、操られていた。君は誰からその話を聞いたんだっけ？」

「琴音だったと思う」

「そうだよ、そう言っていたよね。そして、統吾さんも君とリビングで話した時に、姫暗殺の噂を琴音ちゃんから聞いたことがあると言っていた」

「琴音が、犯人だって言いたいのか？あいつが、俺を操っていたと？」

僕も、恭輔くんのその発言のように、思考を進めようとしていた。しかし、その時だった。

僕の頭の中で、何かが弾けた。

靄がかかっているかのように混沌としていた脳内の感覚が、突然光を放ち、爽快なそれとなった。

掴んだ。ついに、辿りついた。

「違うよ、違うよ恭輔くん！ 神音統吾だ！ 何故あの人は姫暗殺計画の噂を肉親である琴音ちゃんから聞いたのに、それを噂話だと蹴して誰にも伝えなかつたんだ？ 利口なあの人が、姫を殺したのは僕らなのだ決めつけているのはおかしくないか！？」

恭輔くんは「あっ！」と声をあげた！

僕は止まらなかった！

「君を島の外に半年間連れだして、姫に対する不信感を植え付けたのは誰だ！？ 姫が死んで、彼女の跡を継ぐ人間がいるとすれば、それは序列一位神音家の統領をおいて他にいないんじゃないか！？ 情報操作も人間操作も何もかも、一番やりやすいのは姫に次ぐ権力者の神音統吾じゃないか！？」

統吾さんは、琴音ちゃんから姫暗殺の話聞いたのではない。彼こそが、琴音ちゃんを使って、恭輔くんが姫暗殺の話を受けたのだ。反乱分子である恭輔くんが長らく処罰を受けなかったのも、統吾さんがそう取り計らっていたからではないか？

しかし統吾さんからしてみれば、姫暗殺計画の噂話の出所を探らなければ、すぐに自分のもとに辿りつかれる。

「だから琴音ちゃんは殺されたんだ！ 彼女は自分の兄が姫を殺したのではないかと疑っていたに違いない！ でも自分の兄のことだから、恭輔くんに言うか言わまいか迷っていたんだ！ なにせ、恭輔くんは真犯人を告発するつもりなのだから！ 統吾さんからしてみれば、琴音ちゃん存在は危険すぎる！ だから殺したんだ！」

「待てよ、でも琴音を殺したのは……」

「統吾さんだよ！ 紗耶美ちゃんは、彼に利用されたに過ぎない！ きつと統吾さんは、紗耶美ちゃんが琴音ちゃんのことを疎ましく思っていることを知っていたんだ。だから琴音ちゃんを殺すのに、紗耶美ちゃんを協力させた。これで、全て説明できる。琴音ちゃんが着替えに戻った時に、彼女の部屋には統吾さんがいたんだ。もし彼女が部屋の扉に鍵をかけていて統吾さんが入れなかったとしても、扉に外から耳をつけて様子を窺っていたら、琴音ちゃんが帰って来たらしい時にノックを入れてもらうことができる。統吾さんは琴音ちゃんの首を絞めて、殺した。そして扉と窓の鍵をかけたんだ。統吾さんは自分の家族には、自分が外に出ているように思わせていたに違いない。恭輔くんが拾って来た証言では、統吾さんが琴音ちゃんの部屋を訪れたのは、昨晚が最後らしいからね。しかし実際は、

統吾さんは琴音ちゃんの部屋に潜んでいた。一方の紗耶美ちゃんは、僕らの部屋の様子を声を盗み聞いたりしていたら、琴音ちゃんが戻ってこなくなつたことは知れる。そうしたら、ご飯をつくり、僕達を一階に行かせれば良い。僕達がいなくなつた恭輔くんの部屋を通つて、紗耶美ちゃんは琴音ちゃんの部屋に入る。琴音ちゃんの部屋の窓を、事前に統吾さんと決めていた叩き方をするなどすれば、中から統吾さんが開けてくれるからね。統吾さんは紗耶美ちゃんを部屋に入れて、また窓に鍵をかける。おそらくこの時に、紗耶美ちゃんは統吾さんに、僕と未香が恭輔くんと接触していることを伝えただろう。統吾さんは、部屋から出て行く。その後で紗耶美ちゃんは、部屋の扉の鍵も、内側から閉める。あとはその密室空間で、琴音ちゃんの死体を蹂躪して、思う存分恨みを晴らせば良い」

「俺達が紗耶美がいけないことに途中で気付く危険性があるだろ。そんな手段を選ぶかな……。大体、なんでそんな回りくどいことをする必要があるんだ？」

「君は紗耶美ちゃんを避けている。だから、その危険性は随分と低いね。それに、これによって統吾さんは、琴音ちゃんの死体が発見されることがないようにしたんだ。自分が戻るまで、紗耶美ちゃんには琴音ちゃんの部屋の中のように指示したんだろう。部屋の窓か扉の鍵が開いていては、恭輔くんや神音家の者が死体を発見してしまうかもしれない。どうしても密室状態を作りたい。しかし、統吾さんはずっと密室の中に籠っている訳にもいかない。早く僕と未香を捜し出して、姫殺しの罪を着せたまま処刑しないとイケない。統吾さんが怖れていることは、僕や恭輔くんが自分を真犯人として告発することだ。おそらく統吾さんは、僕と未香を処刑した後で、恭輔くんのこと処刑する予定だっただろうね。姫が死ねば、恭輔くんは用無しなんだから。でも警戒心があつて用心深い恭輔くんを殺すのは難しい。やはり恭輔くんを殺すには、処刑という正当性のある島ぐるみの殺害方法を使わなければならない。だから先に、琴音ちゃんを殺した。そしてそれを出来る限り長く、僕や恭輔くんに

隠したかったから、密室を作った。さらに自分は行動しなくてはいけないから、密室の外に出るために、紗耶美ちゃんに留守番をさせたんだ！ 紗耶美ちゃんを巻き込んだ理由はさらにある。紗耶美ちゃんに琴音殺害の濡れ衣を着せるためだ。紗耶美ちゃんに実際に琴音ちゃんの死体を滅多刺しにさせれば、誰が見ても彼女が犯人に見える。紗耶美ちゃんが統吾さんのことを言っても、信じる者はいないだろう。だって、統吾さんは琴音ちゃんを滅多刺しにした証拠がないんだからね！ 返り血も浴びていないし、凶器も使っていないし、あそこまで死体を蹂躞する時間も無かった、と誰もが思う。そして紗耶美ちゃんを罪人として処刑してしまえば、自分の罪は露見しない。あるいは、紗耶美ちゃんは何らかの形で統吾さんが姫を暗殺しようとしていることを知ったのかもしれないね。そこで統吾さんが彼女を無理矢理共犯にした、琴音ちゃんを殺すことを餌にして……非常に考えられた犯罪だ。それに、統吾さんは僕や未香が恭輔くんを頼るだろうことを読んでいたのかもしれない。だからこそ、そうなった場合に自分に告げ口する者が必要で、それは紗耶美ちゃんでしか有り得なかった」

「……………全然、気付かなかった。そんなこと……………」

「無理もない。君は実は、統吾さんのことが好きだっただろう？ だから、本来なら真っ先に疑うべき彼を、疑おうとしなかった。君が飛びつくように神代三二と琴吹病子という分かりやすい餌を見せたのも、彼の作戦の内かもね。話を戻すけど、統吾さんは紗耶美ちゃんから、僕と未香が神谷家にいることを聞いた。そして統吾さんは、村人達にそのことを伝えたんだ。村人達に僕らを告発したのは、紗耶美ちゃんじゃなくて統吾さんだったんだよ。紗耶美ちゃんもこれは知らなかっただろうね、だって彼女からしたら一番大事なのは恭輔くんなんだから。多分統吾さんは、この辺りで当初の計画をかなり変更したんだと思うよ。あとは僕らを捕獲するだけだから、紗耶美ちゃんのことと琴音ちゃんの部屋に放置しっぱなしだったんだろう？ 統吾さんは僕らを捕まえるのに失敗する訳にはいかないから、

多くの村人達に招集をかける必要があった。しかし村人達は島中に散っている。集めるには長い時間を要する。それで、僕達の家には村人達が来たのが、あれほど遅れたんだ。ああ、そういえば統吾さんは、僕らの注意を琴音ちゃんのことから逸らしたりするために、一度僕らの家に来たよね。そしてわざと無能者を演じて、僕らに油断をさせた。しかもあれには、アライワークという意味もある。琴音ちゃんの部屋の扉や窓には内側から鍵がかかっていたから、犯人はまだ中に潜んでいると考えられるだろう？　しかしその途中で統吾さんは僕らの前に姿を現したんだからね。全てが、統吾さんの策略通りだったんだ、病子ちゃんが助けてくれたことによつて僕らが捕まらなかったこと以外はね。大体、それでもなお、僕らの不利に変わりはない」

「畜生！」

恭輔くんは叫んだ。苦しそうな表情を浮かべて、自分の髪を両手でわしゃわしゃと掻き回した。

「気付かなかった！　俺はとんだ間抜けだ！　全部良いように操られて、琴音も紗耶美も失った！」

恭輔くんはその場に膝をついた。そして俯くと、ついに泣き出してしまった。僕は複雑な気持ちで、初めての彼の涙を、見ていた。

「許せねえ。統吾……くそっ！　俺は、俺はずっとあいつに………琴音、紗耶美………」

薄暗い森に、恭輔くんの喘ぎ声が寂しく響く。

僕もしばらく、途方に暮れてしまった。

神音統吾。彼は全ての元凶だ。あまりに巨大で、圧倒的な実力を持つ、恐るべき敵だ。

僕は全身に悪寒がしていた。

やがて、そんな空気を破つて、病子ちゃんの能天気な声が出た。

「ところで、私の秘密の場所はすぐそこなのですが、そろそろ行きませんか？」

僕らは黙って頷いた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8508w/>

---

二千年姫の死亡

2011年11月14日03時28分発行